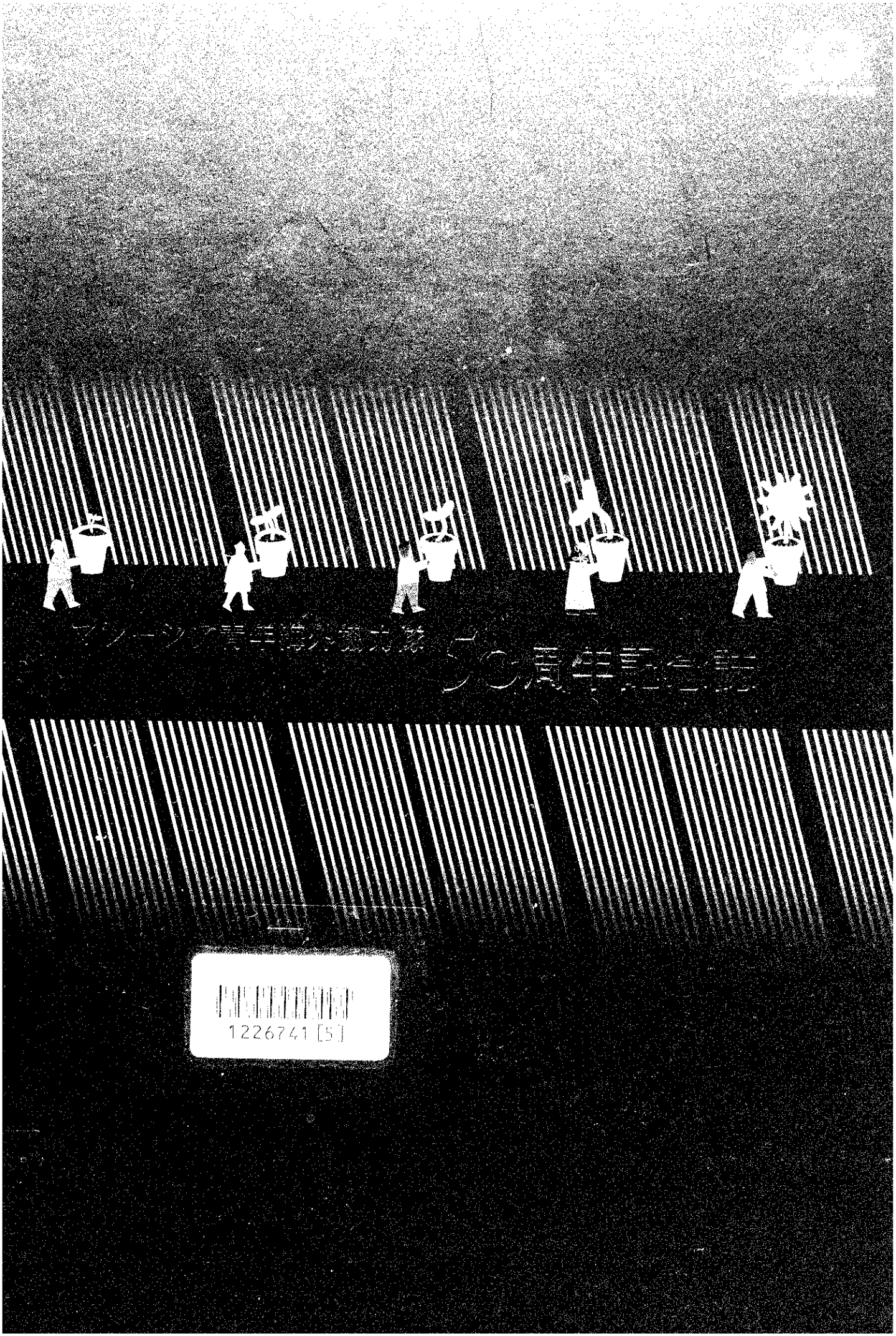

アジア青年協力隊 50周年記念誌
1226741 [5]

青年海外協力隊とは

青年海外協力隊は、日本政府の政府開発援助（ODA）により、独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施する事業で、開発途上国からの要請に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「開発途上国の人々のために活かしたい」と望む20~39歳の青年を募集し、選考、訓練を経て派遣するものである。

この事業は1965年に発足し、2015年は50周年にあたる。また、時代の変遷とともに、幅広い国民参加型の事業へと発展し、現在は40歳~69歳が参加するシニア海外ボランティア、海外にある日系社会を支援するボランティア（日系社会青年ボランティア、日系社会シニア・ボランティア）を加えた事業となっている。

事業の目的は、次のとおり。

（1）開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与

（2）友好親善・相互理解の深化

（3）国際的視野の涵養と経験の社会還元

過去50年間に88ヵ国、4万人の青年海外協力隊員が派遣され、他の3つのボランティアと合わせると、累計の派遣者数は96ヵ国約4万8千人に及ぶ。

青年海外協力隊をはじめとするJICAのボランティアは、現地の人々とともに生活し、働き、彼らと同じ言葉で話し、相互理解を図りながら、彼らの自助努力を促進するように活動することを特色とし、保健医療、教育、コミュニティ開発、農業、スポーツ、防災等など多くの分野において、草の根レベルの多彩な活動内容をもって、開発途上国の抱える課題解決に貢献している。

（撮影：東 西岐子）

発刊に寄せて

JICAマレーシア事務所 所長
松本 高次郎

1966年1月、初代青年海外協力隊員5名がマレーシアに赴任しました。以来、1,500名を超えるボランティアがマレーシアに派遣されています。今年50周年の節目を迎え、マレーシアにおけるボランティア事業の歩みを振り返り、これを次世代に伝えるための記念誌を発行することにしました。そこで、各時代を過ごした元/現役ボランティアや関係者の皆さんに、寄稿や写真の提供を依頼して出来上がったのが本誌です。

マレーシアに赴任して1年半、JICA事業の柱の一つとしてのボランティア事業を見てきました。また、2016年1月には青年海外協力隊派遣50周年記念の式典をワヒド・オマール首相府大臣、宮川眞喜雄大使のご臨席を得て盛大に開催することができました。

この経験の中で強く感じたことは、マレーシアという国とボランティア事業の親和性です。驚いたことは50周年式典に多数の元ボランティアの方が日本から私費で駆けつけてくれたこと、また、それ以外にもたくさんの元ボランティアが折に触れてマレーシアを訪れ、仕事であれ昔の友達に会うのであれ、往来をされていることです。

日本が青年海外協力隊員を初めて派遣した5つの国の一つにマレーシアが名を連ねている理由は何か。その後派遣された多くのボランティアがマレーシアとの関わりを大切にしている理由は何か。考えてみると様々な理由が浮かびますが、大きな理由の一つがこの国の人たちの寛容さにあるのではないかと思います。多民族国家として統一国家を形作ることのむずかしさ、国民の一体感の醸成への努力。この国が独立へと向かい、さらに発展してゆく過程で様々な困難を乗り越えてきましたが、その時に必要とされたのが多民族ゆえの他者への配慮、受容の精神だったのではないかと思います。苦い経験もありましたが、この国は独立以来約60年間常にそのことを考えながら発展してきました。

日本人がジャングルの奥地の入植地に入って、また、若々しい政府の機関に入り込んで仕事をすることの難しさは、経験した者でなければわからないと思います。その厳しい経験を最後まで支えてくれたのは、マレーシア人のこのような他者への思いやりと受容の精神だったのではないでしょうか。多くのボランティア経験者が帰国後もマレーシアを親しく思い、つらい思い出もあったにせよ故郷のように感じる様がこの記念誌への寄稿に読み取れます。

これまで派遣された1,500名ものボランティアの経験を一冊の本で表現することはもとより不可能ですが、マレーシア経験者としての多くの先輩たちが何を思いマレーシアでの任期を過ごされたのか、そしてそこから何を得てその後の人生を歩まれているのか、その一端でも本誌から感じ取っていただければと思います。そして、その向こう側に一人一人のボランティアと関わった何十倍、何百倍ものマレーシアの人たちがいることに、ぜひ思いを馳せていただければと思います。

マレーシアの発展を後押ししたボランティア、そしてマレーシアから多くのものを得たボランティアとしての日本人。この50年間お互いに助け合ってきたというのが正直なところではないでしょうか。

このかけがえのない交流を通じて育まれた2つの国の友情がこれからも末永く続き、発展するようにこれからも努力したいと思います。

本誌の作成にご協力いただいた全ての方に、心より感謝申し上げます。

2016年7月

1226741 [5]

マレーシア青年海外協力隊 50周年記念誌

独立行政法人国際協力機構　マレーシア事務所

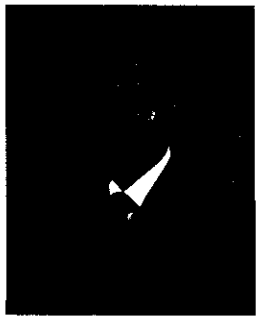
Salam Sejahtera.

Terlebih dahulu saya ingin mengucapkan setinggi-tinggi tahniah kepada JICA bersempena Ulang Tahun ke-50 Japan Overseas Cooperation Volunteer Program (JOCV) ini.

Hubungan kerjasama di antara Malaysia dan Jepun telah bermula seawal kemerdekaan negara ini lagi. Hubungan baik yang terjalin bukan sahaja tertumpu kepada bidang perdagangan, malah, kedua-dua buah negara juga merupakan rakan pembangunan yang saling hormat menghormati antara satu dengan lain. Hubungan ini juga telah diperkukuhkan lagi dengan pelaksanaan Dasar Pandang ke Timur (DPT) yang diperkenalkan pada 1981 dan gelombang kedua Dasar Pandang ke Timur (DPT 2.0) yang bermula pada tahun 2013. Pelaksanaan DPT 2.0 mensasarkan pengukuhan pembangunan ekonomi berlandaskan inisiatif berorientasikan pelaburan di antara Malaysia dengan Jepun. Program ini dilihat dapat membuka lebih banyak ruang dan peluang kerjasama strategik di antara kedua negara, khususnya di dalam bidang ekonomi.

Kerjasama yang telah diberikan oleh Kerajaan Jepun melalui program-program JICA secara langsung telah memanfaatkan Malaysia. Teras kerjasama di antara Malaysia dengan Jepun ini bukan sahaja meliputi aspek fizikal tetapi turut mengambil kira aspek bukan fizikal terutamanya dalam penekanan kepada pembangunan modal insan dan peningkatan kemahiran teknikal. Ini adalah selaras dengan agenda pembangunan Malaysia yang menekankan kepada pembangunan berasaskan pengetahuan ke arah merealisasikan wawasan untuk menjadi sebuah negara maju yang inklusif dan mampan menjelang tahun 2020.

Pada pendapat saya, JOVC bukan sekadar program bantuan teknikal tetapi ianya juga merupakan sebuah program pertukaran



budaya di mana para sukarelawan mendalami cara kehidupan, adat resam serta budaya masyarakat tempatan di sepanjang penempatan mereka di negara ini. Masyarakat Malaysia juga semestinya telah banyak menimba pengetahuan berkenaan budaya dan cara kerja masyarakat Jepun melalui program ini.

Malaysia juga bertuah kerana bidang kerjasama dengan JICA turut diperluaskan melalui pelbagai kerjasama teknikal seperti Science and Technology Research Partnership for Sustainable Development (SATREPS) dan kajian-kajian pembangunan dengan agensi kerajaan yang berkaitan. Hubungan dua hala yang lebih rapat ini telah banyak membantu agensi-agensi kerajaan meningkatkan pengetahuan dan kepakaran di dalam bidang teknikal, infrastruktur dan sosial dan seterusnya mengguna pengetahuan tersebut untuk kepentingan negara.

Semoga kerjasama erat dan sokongan jitu antara Malaysia dan Jepun akan diteruskan lagi bagi membantu memacu pembangunan di Malaysia, khususnya dalam membawa negara ini mencapai Wawasan 2020. Kepada JOCV, diucapkan selamat maju jaya dan diharapkan permuafakatan ini akan menjadi sumber inspirasi dan pemangkin kepada hubungan dua hala Malaysia-Jepun yang lebih erat di masa-masa yang akan datang.

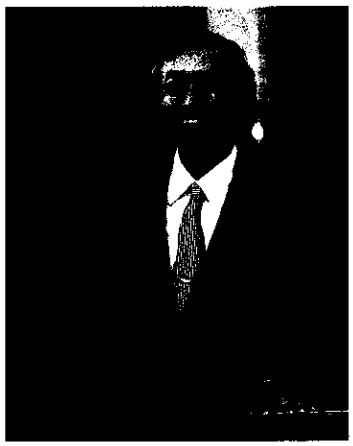
Terima kasih.

Dato' Sri Abdul Wahid Omar
Menteri di Jabatan Perdana Menteri
Malaysia

Mac 2016

このページの和訳はP.89

青年海外協力隊の理念とこれから



在マレーシア日本国大使
宮川 眞喜雄

全世界で累計4万人に及ぶJICAボランティアの方々の活動は、この制度が生まれた1965年から半世紀を経て本年５０周年を迎え、その足跡は受入国からだけでなく日本政府からも、強い感謝とともに記憶されています。在マレーシア日本国大使として、参画された全ての方々の献身とその業績に対し、称賛を惜しみません。

マレーシアは1966年1月、青年海外協力隊の最初の隊が降り立った国の１つです。ボランティアの派遣は、爾来現在に至るまで途切れることなく連綿と続き、累計で1,500人を超える日本人ボランティアが任務についてきました。

「初心忘るるべからず」という格言にある通り、50年を経た今、青年海外協力隊の当初の哲学や指針を改めて想起することは誠に重要だと考えます。

植民地支配からは独立しましたが、未だ経済的に自立できておらず、国造りに困窮していた東南アジアの国々をはじめとする世界の開発途上国に対し、支援のため若いボランティアを送るという構想が1957年出来ました。

1965年の日本青年海外協力隊要綱には、次のような目的が記載されています。「開発途上にある諸国の要請に基づき、技術を身につけた心身ともに健全な青年を派遣し、相手国の人々と生活と労働を共にしながら，相手国の社会的、経済的開発発展に協力し、これら諸国との親善と相互理解を深めるとともに、日本青年の広い国際的視野の涵養にも資さんとするものである。協力隊事業は、相手国政府との間にもとづいて実施される新しい国家的計画である。」

この「相手国の人々と生活と労働を共にしながら」は、一方的に途上国を助けるというような姿勢で臨むのではなく、任国の言語や文化を学んで、その国に溶け込み，その国の人々からも多くを学ぶ，という双方向的な協働を努力目標としていると解されています。

1966年に協力隊の雑誌に収められた「協力精神を哲学する」という座談会での坂田道太氏の発言には次のようにあります。「この日本青年海外協力隊が誕生する際に『協力隊』としようか『平和部隊』としようかと，いろいろと議論した。その結果，米国の平和部隊にとらわれずに独自の『協力隊』ということに決定した。その考え方は，『平和部隊』は、ややもすると上から、持てるものが持たざるものに物を与えてやる。あるいは，自分たちの考え方が一番正しいとして、潜在的に押しつける。そんなふうに開発途上の諸国からとられがちである。そのため、いろいろの功績をあげているのにもかかわらず、非難されているようだ。そこで、開発途上の国の人であれ、われわれ日本人であれ、一個の人格を持った人である。互いに人格を認め合い、同等の立場に立って協力し合おう。そういう考え方によって「協力隊」という名称に落ち着いた。」

こうした青年海外協力隊の精神と基本原則は、今日まで半世紀、厳格に遵守され続けて来ました。

援助分野は多岐に亘りますが、実際の援助は、現地の状況に応じて年々変化していくのは当然のことです。マレーシアの過去30年間の急速な経済成長は、その経済を一次産品に依存する労働集約型から、技術主導型、サービス中心型に変貌させてきました。今日、電気・電子産業はマレーシアの製造業の一柱であり、今後も継続的な技術革新を通じ、競争力を更に高めて行く必要があります。サービス部門では、通信と金融サービスが、進歩と拡大を必要としています。支援形態は、そうした変化に応じた内容に変化していく必要がありましょう。

日本で頻繁に発生する自然災害や、開発の結果としての公害について、それを予防し被害を極小にするために日本が有する経験、知識、専門技術は、マレーシアにとっても大いに有益であると確信します。

日本とマレーシアにとってＪＩＣＡボランティアの重要性はこの先も減じることはありません。今後も時代や環境の要請に応じ、支援の分野や形態を変えながら、一層の協力がなされることを期待します。

マレーシア青年海外協力隊派遣 50周年記念誌に寄せて

独立行政法人国際協力機構（JICA）理事長
北岡 伸一

わが国は1954年、いまだ戦後復興の途上にありながら、国際社会への復帰のプロセスとして国際協力を開始しました。その11年後、1965年に青年海外協力隊事業は創設されました。最初の派遣は今からちょうど50年前の1966年、マレーシアを含む5か国に向けてでした。

当時のマレーシアは1957年の独立からまだ日の浅い国家創成の時期にあり、そのような時代から50年に渡って、ボランティアによる草の根での活動を行ってきました。以来、およそ1,500人の隊員をマレーシアに派遣してまいりました。また、世界に目を向けると今日に至るまで4万人が88ヵ国に派遣されました。この間、事業を取り巻く環境の大きな変化とともに、ボランティア事業も成長し、シニア海外ボランティア、日系社会青年ボランティア、日系社会シニア・ボランティアを加えるとその数は4万8千人、96ヵ国にのぼります。

ボランティア事業の目的は、「開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与」、「友好親善・相互理解の深化」、「国際的視野の涵養と経験の社会還元」です。「現地の人々と共に」という言葉に集約されるように、相手国の人々と共に生活し、働き、現地の言葉を話し、相互理解を図りながら、自助努力を高めることに配慮した活動は、相手国政府や現地の人々から高く評価されています。

青年海外協力隊事業が、日本の代表的な「顔の見える」国際貢献として今日の発展を迎えた背景には、皇室をはじめ、多くの皆様の惜しみないご支援と受入国の人々の温かい心、そしてボランティア一人ひとりの情熱がありました。また、全国各地で長年事業を支えて頂いた「協力隊を育てる会」及び「青年海外協力協会」並びにボランティア経験者であるＯＢＯＧの皆様の活動は、ボランティアと地域社会を結ぶ懸け橋として、多くのボランティアに勇気と誇りを与えてくださいました。多大なるご貢献を賜りました多くの皆様に感謝申し上げます。

昨年、日本政府は「開発協力大綱」を定め、国連においては2030年を見据えた「持続可能な開発目標（SDGs）」が合意されました。日本の優れた知見や技術を海外へ、そして海外で得た経験を国の内外の課題解決に活かすことが、これまで以上に強く求められています。また、ボランティア事業は日本の社会においても、グローバルな視点を持った貴重な人材を育成するものとして期待されています。開発途上国での活動や生活経験を通じて身に着けた問題解決能力、コミュニケーション力、異文化適応能力などを活かして、企業や自治体、教育現場での貢献のほか地域おこしや起業などにも情熱を注いでいる方々が大勢おられます。このような国内外の課題や期待を踏まえつつ、引き続き、国民の皆様の理解と参加を得ながら本事業の次なる50年のあり方を考えてまいります。

最後に、長きにわたり青年海外協力隊をご支援いただいている皆様に改めて感謝申し上げます。

2016年6月

JICAとは

独立行政法人国際協力機構（JICA）は、日本の政府開発援助（ODA）の実施を担当する政府機関です。開発途上地域等の経済及び社会の開発若しくは復興又は経済の安定に寄与することを通じて、国際協力の促進並びに我が国及び国際経済社会の健全な発展に資することを目的としています。

JICAの役割

開発途上国の社会・経済の開発を支援するため、政府をはじめ、国際機関、NGO、民間企業などさまざまな組織や団体が経済協力を行っています。これらの経済協力のうち、政府が開発途上国に行う資金や技術の協力（ODA）は、その形態から二国間援助、国際機関への出資・拠出（多国間援助）に分けられ、JICAはこのうち二国間援助の形態である技術協力、有償資金協力、無償資金協力を担っています。

マレーシアにおける日本のODAの歴史

1956年 技術研修のためマレーシア人を本邦に派遣
1958年 日本人専門家の派遣開始
1966年 青年海外協力隊員の派遣開始
1966年 第1号技術協力プロジェクト
1969年 第1号円借款案件E/N署名（道路案件。旧OECF）
1975年 マレーシア政府からJICA事務所の設立認可
1982年 JICAによる東方政策研修を日本で開始
1991年 シニア海外ボランティアの派遣開始
2008年 JICAとJBIC円借款部門との統合　＊JBIC＝国際協力銀行

マレーシアにおけるJICA事業

① 技術協力
② 有償資金協力（円借款）
③ 機材供与
④ 研修員受け入れ
⑤ 南南協力
⑥ 国民参加型事業
　1）ボランティア事業
　2）草の根技術協力事業
⑦ 中小企業支援・民間連携
⑧ 国際緊急援助

セレンバン~アイルヒタム有料高速道路

完成は1987年

サバ州を拠点とする生物多様性・生態系保全のための持続可能な開発プロジェクト

2013年-2016年実施

凡例

JV：青年海外協力隊またはJOCV(20-39歳)
SV：シニア海外ボランティア(40-69歳)
隊次：派遣された年：日本の年号を用いる。現在は年4回の派遣が行われており、6-7月派遣が1次隊、9-10月派遣が2次隊、12-1月派遣が3次隊、3-4月派遣が4次隊となっている。
カウンターパート：派遣先でボランティアを受け入れ、ともに活動する上司、同僚など
任期：派遣期間は原則として2年間、1か月から参加できる短期派遣もある

—— Contents ——

青年海外協力隊とは …… 2

発刊によせて 独立行政法人国際協力機構(JICA) マレーシア事務所所長 松本高次郎 3

Message マレーシア首相府大臣 ダト・スリ・アブドル・ワヒド・オマール 4
Message 在マレーシア日本国大使 宮川眞喜雄 6
Message 独立行政法人国際協力機構(JICA) 理事長 北岡伸一 7

JICAとは <凡例> 8

Contents …… 9

Photo Graffiti 10

Chapter I 熱い思いに駆り立てられて …… 13
<年代別協力隊員>派遣累計マップと表(1) 14
1965~1974 ・草野忠征 ・原田敏幸 ・伊勢田涼子 ・池田山東志 15
1975~1984 ・西村善継 ・常木(松村)春江 ・井上昌夫 19
・高橋(近藤)明美 齋藤(坂本)良子 志賀典子
1985~1994 ・西田基行 ・四方照美 24
1995~2004 ・沖中高行 ・大澤(上松)由佳 26
2005~2014 ・段 佳江 ・小山 繁 ・坂口麻理 ・森下正人 28

《写真集》マレーシア青年海外協力隊50周年記念式典 …… 33

Chapter II History …… 37
▪JOCV・JICAの活動記録 ▪マレーシアの出来事 ▪日本・世界の出来事 38

Chapter III 共に目指したゴール …… 45
<分野別協力隊員>派遣累計マップと表(2) 46
日本語教育 ・吉田(谷口)曜子 ・吉田真裕美 47
幼児教育 ・石井範子 ・坪川紅美 50
農業 ・古賀正孝 ・佐藤純一 53
障害者支援 ・久野研二 ・川上かよ 57
環境教育 ・二ノ宮リムさち ・塚本真衣 60

Chapter IV 多様なニーズの多民族社会 …… 63
<地域別協力隊員>派遣累計マップと表(3) 64
・ペルリス州 高澤栄子 ・ケダ州 石本 馨 65
・ペナン州 浅野善博 ・ペラ州 小田島成良 67
・セランゴール州 若木 仁 ・クアラルンプール 前島 明 69
・ネグリスンビラン州 福井(水谷)容子 ・マラッカ州 山本 隆 71
・ジョホール州 堀田悦史 ・パハン州 山村博章 73
・トレンガヌ州 金森 寛 ・クランタン州 堀田裕美子 75
・サバ州 福永 敬 ・サラワク州 大沼 学 77

Chapter V ボランティアを支える人々 …… 79
元カウンターパート ダト・アラディン・ハシム 80
マレーシア会会長 白山 馨 81
元調整員 三浦康夫 82
元所長 永江 勉 83
ナショナル スタッフ ヌルル・アシキン・ヤハヤ 84

Chapter VI そして未来へ …… 85
現役ボランティア 渡会 慧 86
シニアボランティア 鷹取一雅 87
未来へのメッセージ 88

和訳 P-4 マレーシア首相府大臣 ダト・スリ・アブドル・ワヒド・オマール …… 89
P-80 元カウンターパート ダト・アラディン・ハシム 90
P-84 ナショナル スタッフ ヌルル・アシキン・ヤハヤ 91

編集後記 …… 92

Photo Graffiti

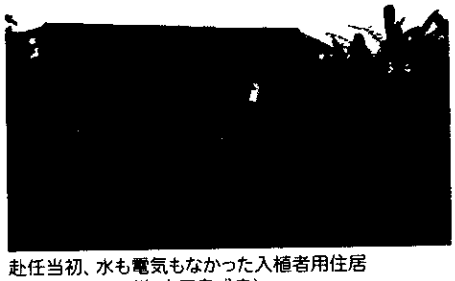
水浴び

家の前

我が寝室（1966年：サバ州：草野忠征）

警察学校ーマレーシア国家警察記念日の式典
（1974：KL：西村玉夫）

トレンガヌの交通手段「ベチャ」（1975年：金森　寛）



赴任当初、水も電気もなかった入植者用住居
（1987年：ペラ州：小田島成良）

生徒と同僚のカウンターパートの先生達と集合写真
（1989年：KL：前島　明）

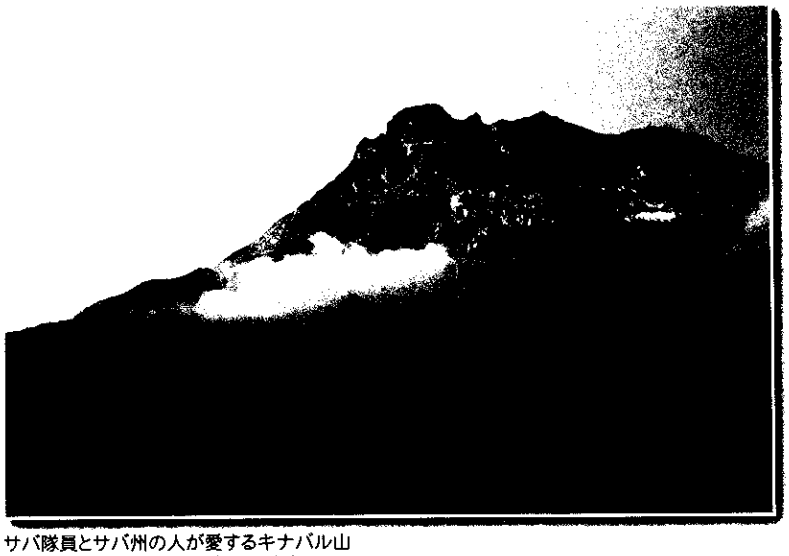
語学研修ホームスティ、語学講師と63年３次隊の
隊員たち（1989年：田島義明）

KL盆踊り大会、レジデンシャルスクールの生徒たちと
（1988年：田島義明）

スランゴール州プルタのオランアスリの子供たち（1975年：西村玉夫）

旧正月のライオンダンスと爆竹（1990年：KL：田島義明）

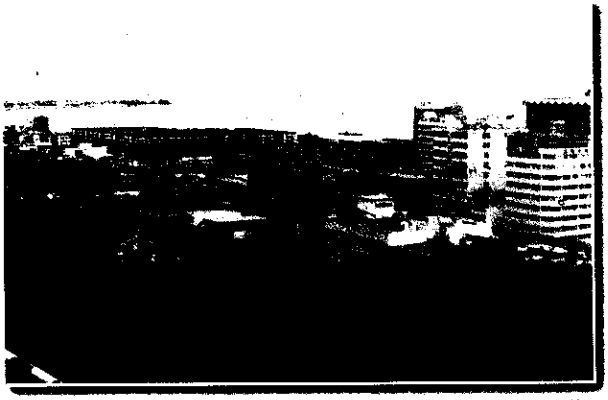
マレー人の結婚式（1989年：KL：田島義明）



サバ隊員とサバ州の人が愛するキナバル山
(2007年:ケニンガウ:河合(大町)恵子)

第12回アゴンカップ
マレーシアバスケットボール選手権大会開会式
チームコーチとして参加、行進中の前から3番目外側
(1970年:サバ州サンダカン:荒 正文)

モハメッド誕生祭(1981年:サバ州:白山 肇)



小高い丘にある「王宮」からコタキナバルを望む、後方の白く見えるのは海、
高い建物の多くはホテル(1980年:白山 肇)

ビダユ族のHari Gawaiのお祭り会場へ向かう
村民たち(1990年:サバ州:田島義明)

サバ州ムルット族の民族衣装
(2007年:河合(大町)恵子)

チュピン幼稚園活動・なわとび
(1985年:フェルダツブチュピン:高澤栄子)

Kudatで活動中の隊員(1989年:田島義明)

ケニンガウの幼稚園(1980年:サバ州:高橋(近藤)明美)

Photo Graffiti

養護支援クラスでボールを使った体育指導
(2011年:ジョホール州:小林美晴)

地域リハビリテーションセンター(CBRセンター)前で
(2010年:クランタン州)

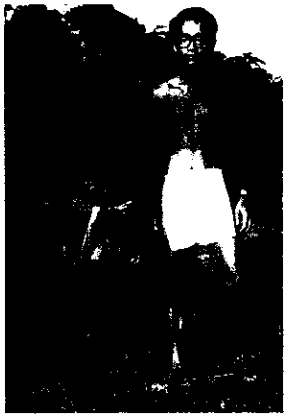
ケニンガウ役場の観光開発活動でスタディーツアーの滞在先となったパガス村の子供たち
(2008年:サバ州:河合(大町)恵子)

ドゥングンにある大学(UTM)のホテル観光部で洋菓子作りの指導(2002年:トレンガヌ州:渡辺千夏)

サバ州森林局Rainforest Interpretation Centreへ日本から訪問した子供たちに対応
(2000年:サバ州:二ノ宮リムさち)

ポンコル村でコレラが発生し、診療所スタッフと共に村の小学校に健康教育にでかける
(1999年:サバ州:永井雅姫)

軍用ヘリでフライングドクターサービス中、タイヤも便利な椅子に早変わり
(1978年:パハン州の先住民部落:北村 豊)



父親の愛用のフンドシを試しに着用してみたら、すぐに仲間となりフンドシ外交大成功(1978年:パハン州の先住民部落:北村 豊)

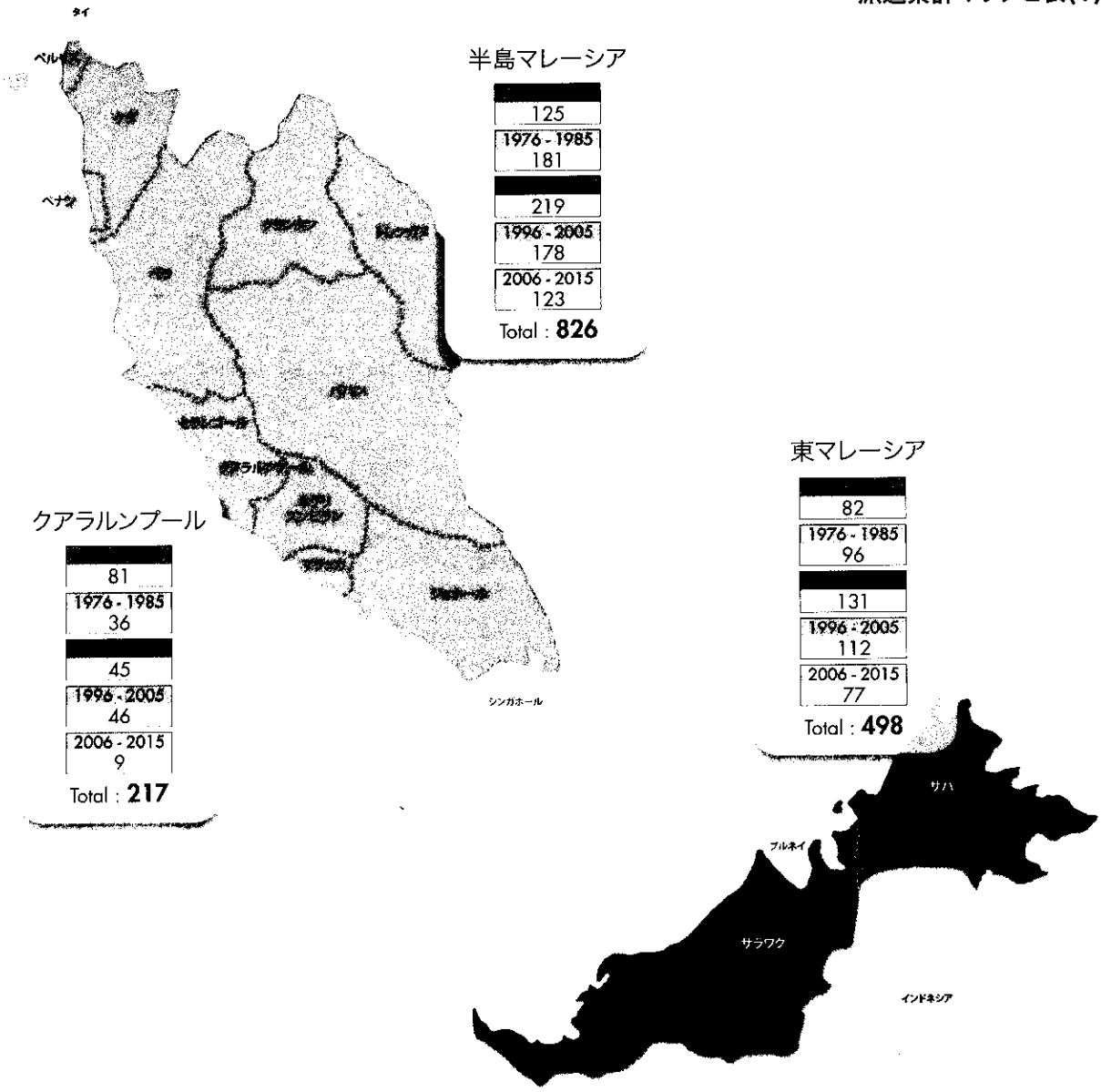
診療で行ったセメライ族の畑で稲狩りのお手伝い。翌日、首が痛かったこと!(1977年:パハン州ベラ湖畔:北村 豊)

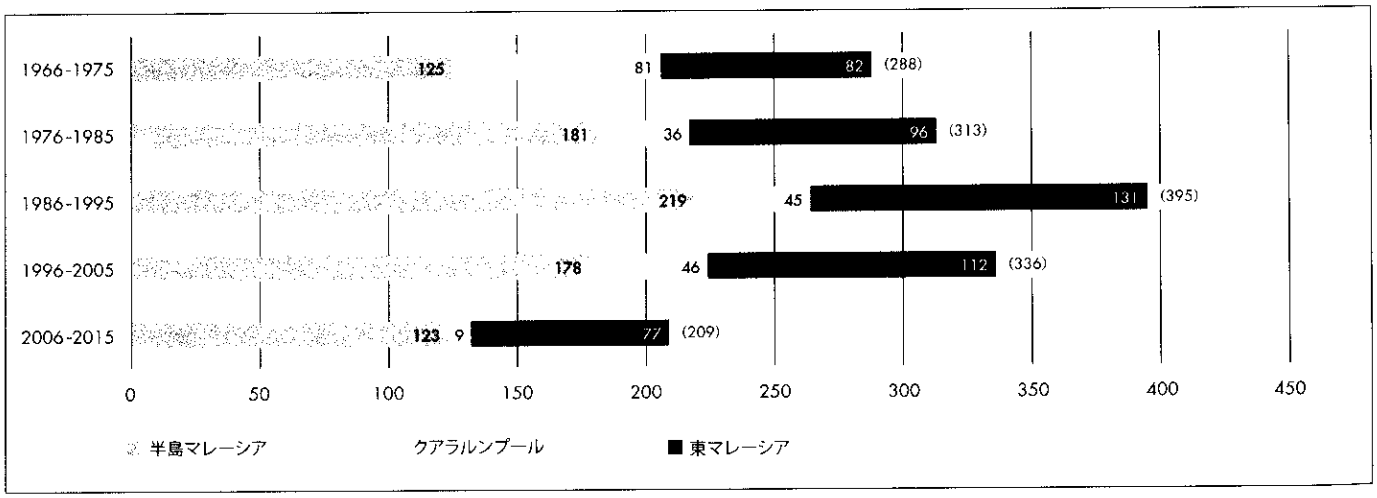
熱い思いに
駆り立てられて

Chapter

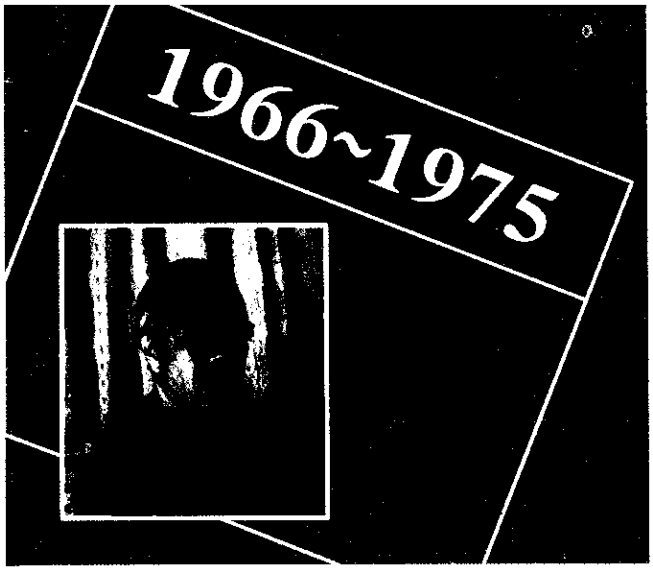
I

<年代別協力隊員>
派遣累計マップと表(1)





※ 1966年-2015年



JOCV マレーシア
昭和40年度1次隊

私は、マレーシアにおける協力隊活動が50周年を迎えた事をうれしく思います。そしてマレーシア政府職員の皆様がJOCV隊員たちと協力して下さった事を大変感謝申し上げます。

＜参加の動機と派遣前の心構え＞

1965年日本政府による青年海外協力隊事業(JOCV)が発足と同時に、私は将来農業技術専門家として開発途上国の発展に貢献しようと思い、青年海外協力隊に参加し昭和40年度1次隊員としてマレーシアへ派遣されました。

当時、東南アジア地域の国々は「低開発国」「後進国」と言われており、その原因は、欧米諸国による植民地支配により、東南アジア地域国民の生活向上意欲が低下させられたからだと、私は考えていました。

それで任国国民の生活向上のために、次のことを心構えとしてJOCV活動を進めて行こうと考えました。

- 現地の人々を尊重しお互い理解し助け合うことを心がける
- 高度の機材や方法を使わず現地の事情に適した手段を使う
- 何をやるにも「不可能」という言葉は使わない。つまり、困難な事があっても何とか工夫して任務を全うする

＜協力活動＞

任地は、マレーシア サバ州（旧英領北ボルネオ）Kota Belud Kg. Tangusi。住民は、バジャウ族で厳格なイスラム教徒です。イスラムが嫌う「豚を食べ」、「酒を飲む」異教徒の日本人(しかも若造)が何をしに来たのか、村人から理解してもらえなかったのは当然です。それで、まず、語学力の習得、そして現地の人とのコミュニケーション、つまり「草野とはどう云う人物か」を知ってもらう為に農業普及センターで、職員がマンゴやドリアン、ランブータンなど熱帯果樹の苗木作りをしているのを手伝うことから始めました。

私の任務は、食糧増産の為の稲の二期作普及活動です。稲の二期作は村人にとって初めての試みであり当然村人には理解してもらえませんでした。しかし、サバ州農業局から種籾や肥料の支援もあり、村人には初作目は自給用米、二作目は販売用米であると理解してもらえ、一部の村で試験的栽培をすることが出来ました。

生活は、明りは石油ランプ、飲料水は雨水、水浴は川でするという３年間の生活でした。盗難や悪戯など全く危害を加えられることはなく、「酒は飲む」、「豚も食べる」イスラムの掟に反する行為をする異教徒の日本人(草野)を村人たちは許してくれた、このイスラムの包容力の大きさを知ることができました。

＜20年ぶりのマレーシア＞

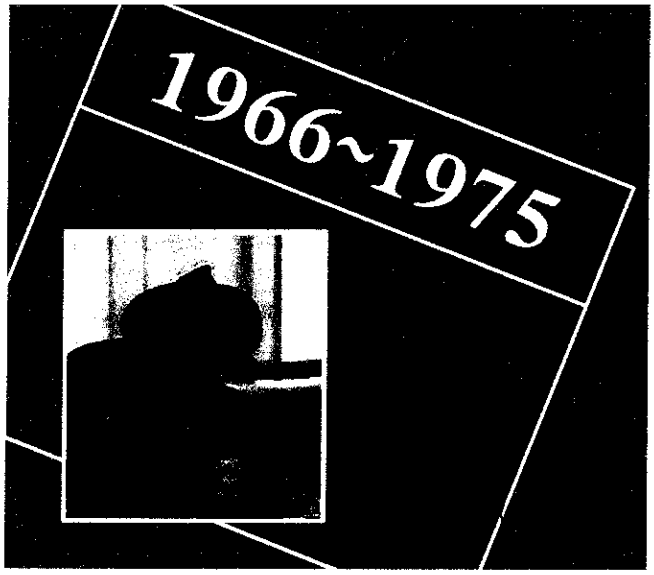
JOCVマレーシア派遣50周年記念式典出席のため20年ぶりにKLを訪れました。KL市内にはモノレールが走り、道路は立体交差が設備され、高層アパートが群立し、昔の植民地時代を思わせるような風景は一変しており驚きました。さらに、マレーシア人の意識の変化です。20年前中華系やインド系は「中国人・インド人」と意識していたのが、「マレーシア人」として意識するようになり、マレー系は「マレー人」として一層イスラム化が進んで「トドン」をかぶっている女性が以前より多く見かけられました。

坪刈り調査

活動中の隊員については、隊員たちが配属先や職種の壁を越えてお互い助け合いマレーシアの人々が必要としているものに幅広く協力活動している事を知り、望ましい協力の方法だと感心しました。残念なのは、安全の懸念があるサバ州の一部地域で隊員活動が制限されている事など、ISISの問題もあり隊員の安全確保も考えなくてはならない時代になったのだと、これからのJICAマレーシア事務所職員の皆様のご苦労を思うと隊員OBの一人として感謝の念でいっぱいです。

今後ともJOCVマレーシア隊員の活動を期待し支援していきたいと考えています。

耕うん機運転指導



マレーシア協力隊 五十周年式典に参加して

私は1966年~68年首都のクアラルンプールから南へ35kmにある、セランゴール州のセルダン農業試験場とセルダン農業学校（農業改良普及員養成校）の2か所で活動しました。初代隊員として5名が派遣されましたが、大変名誉なことでした。2年目に赴任したセルダン農業学校（農業改良普及員養成校）の男子生徒コースで、日本農業の紹介等を行っていました。

あれから50年。2016年1月11日、クアラルンプールで開催された「マレーシア協力隊派遣５０周年式典」に参加するため、福岡空港よりハノイ経由でマレーシアに向かいました。

首都クアラルンプールはホテルや高層ビルが林立し、高速道路ができ、昔の面影が残っておらず、マレーシアではなく他の国かと思う程、変化を遂げていました。驚くばかりの発展した姿を目にしました。現在JICAマレーシア事務所があるアンパン通りは、戦争中サクラロードと呼ばれていたらしいということを思い出しました。

1981年にマハティール首相が提言した「ルックイースト政策」により、工業化が進められ、中進国から先進国入り直前のマレーシアの姿を目にしました。

50周年記念式典は、現地政府関係者、日本国大使、日系団体等関係組織、ボランティア配属先、現役ボランティア、マレーシア在住ボランティアOB/OG、OB/OGのカウンターパート、JICA事務所関係者、日本からもマレーシア会や育てる会会員などが参加し盛大に行われました。

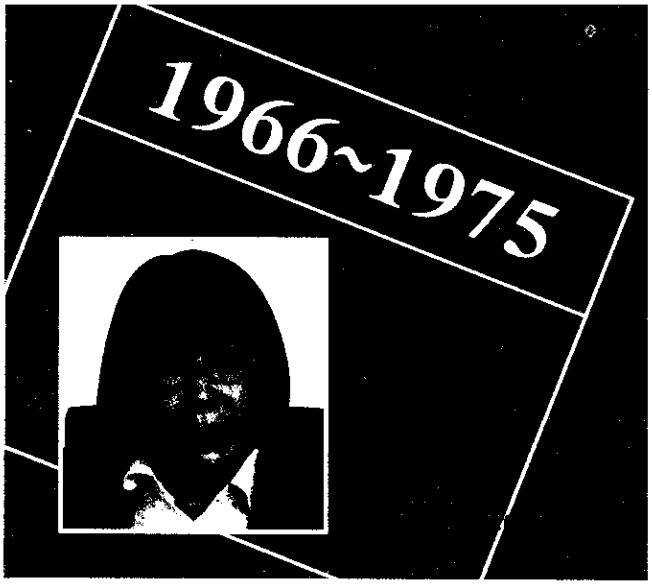
50周年記念式典が終了した翌日、50年前に赴任したセルダンの農業試験場を訪問しました。この一帯に「UPM」（マレーシア農業大学）の看板があったが、50年前はマレーシアには一つの大学（マラヤ大学）とセルダンにはカレッジの2校があるだけでした。

私が活動していた当時は男子生徒コースだけでしたが、現在は女生徒コースも編成され、6クラスになっていました。生徒の農作業に参加し、担当教師の進めにより50年振りの訪問記念として「原田バナナ苗1本」を記念植樹することになり、プラカードもつけ、生徒による「水かけ当番」も決まりました。今後50周年記念バナナとして大切に育てられることだろう。

実のなる頃、再度訪問したい。

50年前の赴任地、セルダン農業試験場を訪問（2016年1月13日）

生徒の農作業に参加（2016年1月13日）



あのころのマレーシアでの生活と日本語教育

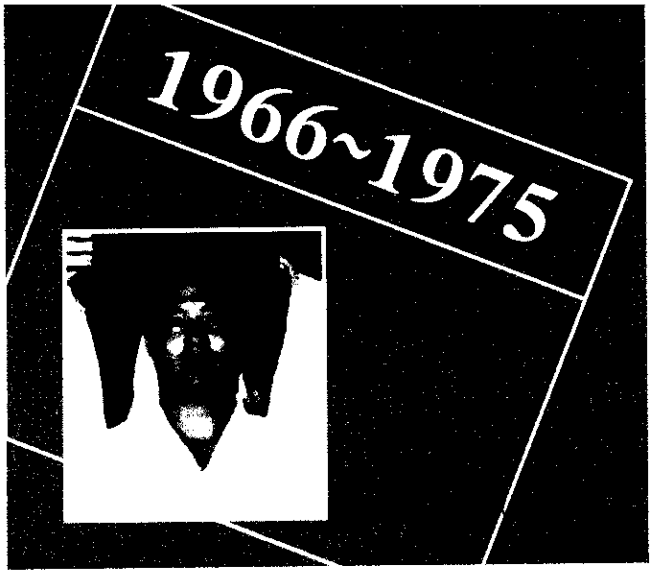
私が隊員として赴任したのは1968年1月から1970年1月の2年間で、すでに最初の隊員の交代要員でしたが、青年海外協力隊が始まる以前にジュニア・エキスパートというプログラムで日本語教師が派遣されていたので、通算3代目の隊員でした。どの期も女性が2人ずつ派遣されましたが、私の以前に派遣された4人は国際基督教大学で日本語教育を専攻した若い専門家でしたし、私は日本語教育が職業でした。この6人ともその後日本語教育及びほかの分野で活躍してきましたが、協力隊員であったということが人生の大きな基盤になったように思います。

派遣されたのはマラヤ大学文学部中国研究科で、そのほかに日本大使館主催の日本語クラスでも夕方の時間に教えていました。この当時は太平洋戦争の間日本軍がマレー半島を占領していたことがあったからだと思いますが、日本に対しての国民の感情にも厳しいものがあり、日本研究は行われていませんでした。中国研究科の主任教授が中国研究をするのにも日本語の知識が必要だとおっしゃったのをよく覚えていますが、この時の中国研究を東アジア研究と拡大解釈してもいいのかもしれません。

日本語の教え方は前二代の先生方が国際基督教方式とでもいえばいいのか、確固たる方法をきちっと敷いていってくださったので、それに倣って教えていました。古いことなのでよく覚えていないのですが、大学の学生に特に困った記憶がありませんから、それなりによく勉強してくれたのだと思います。ただ、イスラム教徒の学生は断食月の間は特に午後の授業ではエネルギーが足りないのか、授業についてくるのが困難な学生がいたので、次の年はすべての授業を午前中にするプログラムを組みました。学年の最後に“slow students”のために補講がありました。本来はマレー系の学生のためだと聞かされましたが、私の経験では実際には中国系の学生もインド系の学生も含まれていました。ブミプトラ政策が始まったのは70年代以降ですから、この当時の状況は異なっていたと思います。

日本大使館の夕方のクラスは主にYWCAで行われましたが、戦時中に日本占領下で日本語を習った人たちがかなりたくさんいました。強いられて習ったのに、習ったことには懐かしさがあるようで、日本語が好きな人がたくさんいました。経済企画庁のお役人や、中央郵便局の局長さん、校長先生や、有名な歌手や映画俳優もこの旧世代の学生には含まれています。小学校の時に習った日本の童謡を歌ってくれる人達もいました。日本語が趣味だという感じで、この大使館講座がマレーシア側に委譲されてからも日本語の勉強をずっと続けた人たちも少なくありません。もちろん新しい日本に興味を持って日本語を習いに来た人たちも多く、10代の学生もいました。私は任期終了後も何度もマレーシアに行きましたが、最初の頃は大使館講座の学生だった人たちに会う機会がありました。任期中この講座の人たちの食事会に呼ばれたり、授業の後スバン空港にアイスクリームを食べに行ったことを懐かしく思い出しています。大学の学生よりもこの講座の様々な人達がマレーシアを私に教えてくれたように感じています。

Photo credit to: University of Malaya Library



逮捕術の指導

精力善用　自他共栄

私は派遣が始まってすぐの昭和43年に、柔道隊員としてジョホールバルの警察に派遣されました。当時の派遣前訓練所は横浜の根岸にあり、朝6時に起床、当時の西村所長と共にラジオ体操をし、外人墓地を一周するなどして、3ヵ月間身体を鍛えながら語学の勉強をしてから派遣されました。

任地は、米子の自衛隊美保基地位の広さでしたが、自家発電のため夜はランプ生活で、水は地下水を利用しており、一度沸騰させてから飲んでいました。

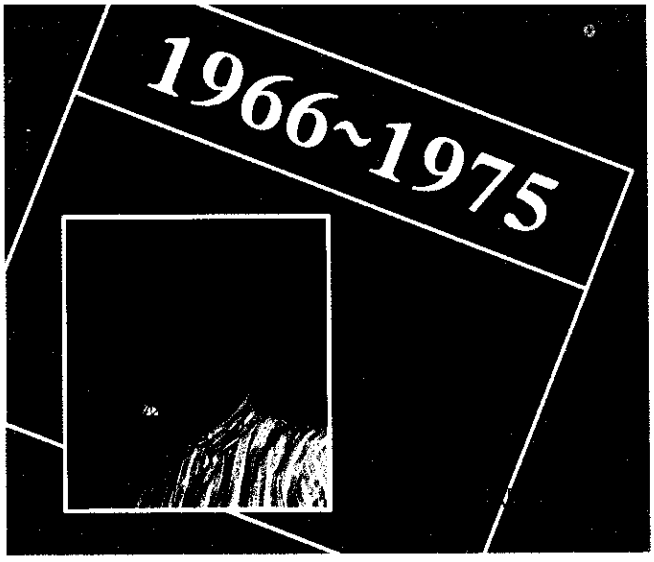
任地に着いてからの活動は柔道場作りから始まりました。自動車のタイヤを下に敷き、その上に板を敷き、畳を置いた立派な柔道場ができ、そこで柔道と逮捕術の指導をしました。

最初は、10人程の機動隊員に柔道を教え、私が帰国してからもその人達が教えられる様に1日2回の練習をし、他の機動隊員には逮捕術を指導しました。

マレーシアは多民族国家のため宗教もマレー系の人はイスラム教、インド系の人はヒンドゥー教、中華系の人は仏教、その他キリスト教等多様な宗教が混在しています。
インド系の人は牛肉を、イスラム教徒は豚肉を食べることは宗教上の理由から禁止されているため、生徒からは豚肉を食している人とは練習をしないと言われ、大変困惑したこともありましたが、鹿の肉でスキ焼をしてスキンシップを図り指導した事を思い出します。

最後に青年海外協力隊の益々の発展を祈念致します。

柔道場で生徒と共に（中央、本人）



青年海外協力隊と私

私と協力隊およびマレイシアとの係わりは40年前に始まる。1975年6月より約4か月のマレイシア語学習を中心とした派遣前訓練を広尾と代々木の訓練所で終了し、その後10月に野菜隊員としてマレイシア連邦土地開発公団（FELDA）に派遣された。

活動現場訪問

入植者家族と

FELDAでは新規入植者の食生活改善及び現金収入としての野菜栽培を指導することとなった。当時のマレイシアは外国企業の進出はあまりなく、スズや石油などの鉱物資源およびゴム、オイルパームなどの農産物の輸出が主に国の経済を支えていた。FELDAでは農家の二男、三男対策として、当時未開発のジャングルを切り開き、ゴムや油ヤシを植え付け、その後の管理と収穫のため若い夫婦の入植者を募り、200~300戸を単位として入植地を半島全域に開発していた。

私の仕事はネグリスンビラン州のPALONG1に派遣され、入植者の家庭訪問をしながら自家用野菜の栽培指導であった。トウガラシ以外余り野菜を食べることのなかった当時の入植者達に、野菜を食べることの重要性やその美味しさ、そして栽培法を教えることは簡単なことではなかったが、当時green book projectが全国で展開されており、私の任地でも裏庭などで自家用に栽培する人が増え、私は家庭訪問をしながら一緒に野菜作りに汗を流した。入植地内の職員住宅で同僚のマレー人と暮らしていたので、入植地内の色んな行事に参加する事が出来、入植者からは本当に沢山のことを教えてもらった。

二年の任期を終え、お世話になった入植者達に再訪することを誓い1977年帰国した。

マレイシアから帰国して10年経った1986年12月、勤めていた市役所を退職し、今度は家族同伴で、契約調整員としてJICAマレイシア事務所に赴任することとなった。

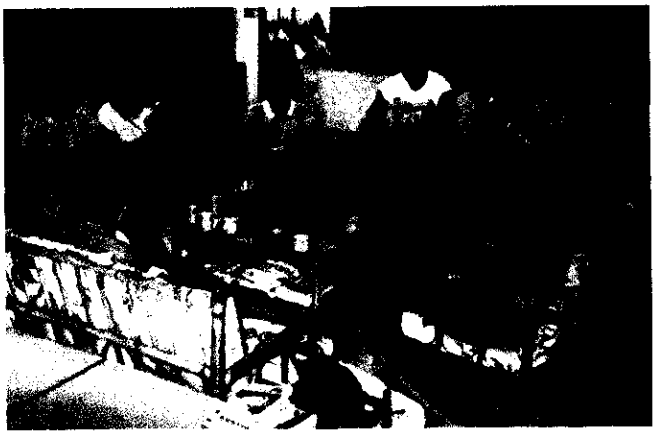
マハティール首相のルックイースト政策全盛期の1986年当時のマレイシアは、私の帰国直前のFEDERAL HIGH WAYが開通した頃とは大きく違い、日本を初めとした多くの外資系企業が進出して、一次産品に代わり工業製品が輸出の主役となっていた。

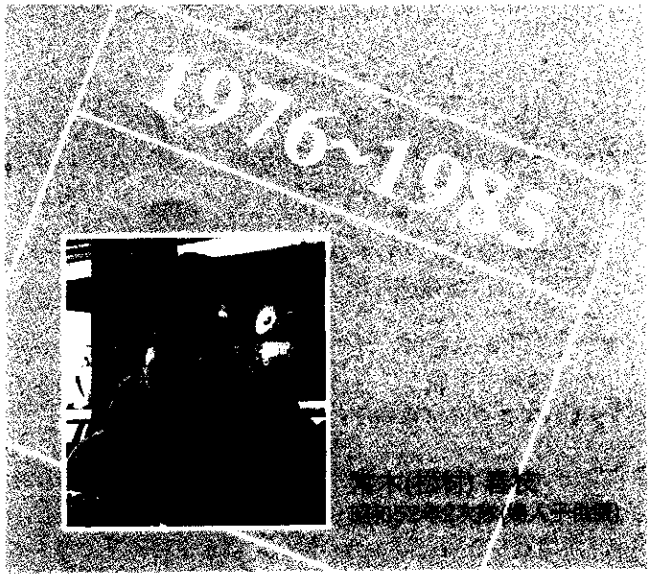
KLの街はきれいになり、多くのビルが林立していた。10年前には屋台村のあったBukit Bintangの交差点には伊勢丹ができていたし、ジャスコなどの日系スーパーが進出し、10年前には船便で送ってもらっていた日本の食材が簡単に手にはいる様になっていた。経済は活気に満ち国産車のプロトンサガや輸入新車などの自家用車が急速に増え、高速道路が全国で作られ始めていた。

協力隊も全国に100人近い隊員があらゆる分野に派遣されていた。思いつくままに派遣職種を上げてみると、日本語、体育、幼稚園教諭、保母、養護、理学療法士、電子機器、自動車整備、溶接、建設機械、SE、稲作、野菜、病虫害、食用作物、土壌肥料、家畜飼育、獣医師、村落開発、土木施工、家政、婦人子供服、等々。

当時のマレイシアにとって必要な多くの分野にわたって隊員は派遣されていた。

FELCRA SEBERANG PERAKの様に異なる職種の隊員をチームで派遣することも試みられていた。50年にわたるマレイシアの協力隊派遣の歴史の中で全盛期とも言える時代に調整員として少しでも隊員の活動をサポート出来たことを幸せに思っている。


連絡所で隊員達と



青年海外協力隊1期時代の思い出

1977年、日本を出発したのが夏だったこともあり、暑さに関しては、さほどの違和感はおぼえがなかったように思う。

訓練は終わったものの、随分こころもとないマレーシア語、英語とて和製英語のほうが身につきすぎていて、失笑ものの出来事が多かった。何といっても一番の言葉の上達に貢献したのは、現地語訓練でケダ州のアロースターでの家庭生活ではないかと思う。おばあさん、お母さん長女夫婦、彼らの娘(当時は2歳ぐらい)長男、次男、・・・と7人兄弟，しゃべる機会は多い。任地のペラ州トロラ・スラタン(フェルダの入植地、パームオイル)イスラム教徒がほぼ９９％、周りはいまだ開発中。内戦終了から間がなく、州都のイポーでは時として戒厳令も。しばらくの間はもっぱら、動物園のパンダ状態、付いたあだ名はトンボーイ。警戒感もなく近づいてくるのは子どもたちだけ。スタッフの子どもを手始めにして、入植者の子どもなどを介して、いろんな人々にであった。片言の妙な日本語であいさつをもらい、いろんな質問攻めにあって下手なマレー語では十分な回答になっていたのかは、今も疑問ではあるが・・・。その頃、同居せざるを得なかった女性スタッフや同居していた近くの村出身の学校教師、夜な夜な独身の男性スタッフ達が特別教室と称して開いてくれたマレー語教室であった。彼らの大半がペラ州ケダ州の出身だったこともあり、話は多岐に及び、私のホームステイ先≪語学研修先≫へハリラヤ(イスラム正月)の都度に帰省することに繋がった。

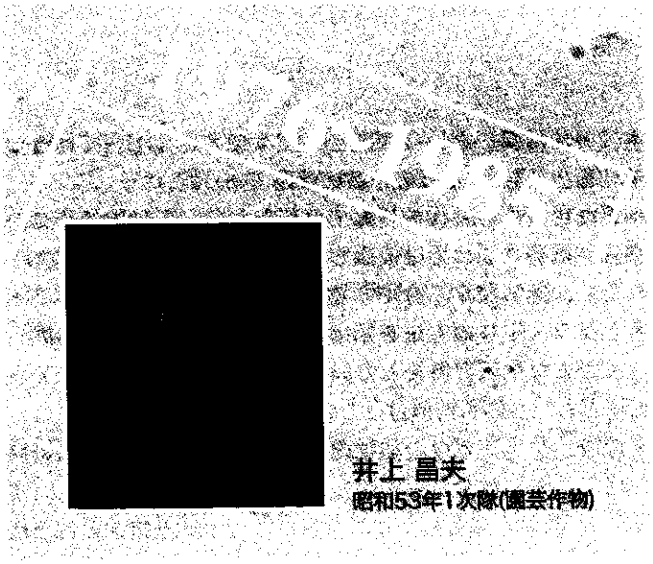
入植者は同じような州の出身者が多く、各班の班長の家に集まった婦人達に編み物、籠つくり、野菜栽培のはなし、こどもの教育の話など、たくさんの家庭生活に関係する話と指導をしてまわることが自分の仕事になっていった。これは任地派遣時にそのころの長官のダト、アラディン・ハッシム氏が「教育を受ける機会のなかった入植者及び入植者婦人に余暇時間の有効な使い方を考える役目として君たちが要る」という訓示がその要因である。そのこともあって、出張もたくさん経験した。ペラ州全域の各地区婦人会の学習会などにも駆り出された。その都度、歓迎のおいしい料理にもありついた。逆に彼女たちから貰ったものもたくさんある。断食中に家庭訪問をすると、彼等は飲食できないのに、そっと差し出してくれた飲み物、ハリラヤに届けられる手作りのたくさんのお菓子。文字も知らない、まだ収入もほとんどないのに、借りた材料費は確実に毎月きっちり責任をもって返してくる。その心は当時の日本では、ないがしろにされかけていただけに本当に今も強く心に残っている。

イポーへの入植者役員連と同行の車の中で「春はまだ独身だよな、恋人はいるのか。イスラムでは妻を4人までは娶れるから、お前は私たちの誰かと結婚しないか」と言われ「ちょっと待って、あなた達は、もうすでに奥さんがいるのに、私が初婚なんてフェアではないから、まず一度目の結婚をしてから、この中のだれかを二番目の夫に選ぶから、私が一度目の結婚をするまで待ってよね」と言って、大笑いをされたことなどを思い出す。
私の帰国時には、入植者、スタッフの有志が車を仕立てて、見送りに来てくれ、再来の祈りを込めたという指輪をもらった。たぶんその気持ちが次のプサトラティハン・トロラ≪技術訓練所≫の入植者子弟への訓練に関わることに繋がっていったのだと思っている。

１５年以上後に、同じ任地に幼稚園教育で派遣された隊員と偶然にも三重県ＯＢ会で出会って、その時の婦人会役員の娘さんが幼稚園教諭になっていて、もし私に会えたら、「今のトローラの状況とよろしくの言葉を伝えてください」とのメッセージが届いたことにも非常に驚いた。現在、私は高校の特別非常勤の福祉関係の教師、市の女性相談員、民生主任児童委員などを任されている。これらのすべてが、彼女達との出会いと深く繋がっていると思う。

当時のトローラ訓練所正門前

入植者婦人会、地域活動展示発表会にて



井上 昌夫
(昭和53年1次隊(園芸作物))

マレーシアJOCV50周年に寄せて

1978年8月、熱帯原生林を焼き払ったあとの、当時のFELDA入植地のひとつであるパハン州Jengka地区に赴任した。FELDA入植地では、換金作物であるオイルパームやゴムの苗木を植える。これが収穫できるまでの6~7年間を、野菜や果樹の栽培技術普及を通じて、住民の日々の暮らしを支えていくことが任務であった。

開発造成したばかりの入植地の道路という道路は、陥没や土砂が流されている箇所がいたるところにあり、土が乾燥してオレンジ色の土ぼこりが舞った。そんな中、JOCVから貸与された90ccのオートバイに乗り、灼熱の太陽が照りつける日中に、野菜栽培に関心を寄せ始めた入植者の家々を走り回った。毎日パウダー状の土ぼこりで全身オレンジ色に染まったが、貯めた雨水で水浴びしては生気を取り戻していた。

熱帯での生活も野菜栽培もすべてが初体験。好奇心が優っていたので何事も苦に感じなかったが、赴任当初、言葉が理解できなかったのはきつかった。これは時間の問題とあとで気づいたが…。また、乾季に水が枯渇寸前となったとき、農業用に掘った浸透井戸に溜まった水を生活用水に振り向けざるを得ず、植えたばかりのキャベツを全量枯死させる羽目になった。生活優先は当然であるが、当時の町テメローでの販売用に準備していただけにこれは悔しかった。それでもTidak apa apa.に救われた。

私の住まいはスタッフ用の高床式の家。現地スタッフ一人との同居生活だった。電気と水の配管は成されていたが全く使用できず、二年間ランプと雨水利用の自炊生活で過ごした。郷に入れば郷に従う。イスラムの教えに従い、入植地で生活している間は、豚肉とアルコール類は一切口にしなかった。断食も試みたが1ヶ月もたず。迂闊にも畑でスイカを味見して意思半ばで終わった。

当時はマレー系住民優先政策の最中。FELDAによる大規模なジャングル開発が進められていた。熱帯の大木を切り倒し、自然乾燥したところで火を放つ。鎮火したあとは、さながら大津波を蒙ったあとのような、荒涼とした風景が広がった。かのマハティール首相の「東方に学べ=日本」の意向を受けて、日本人の勤勉さや暮らしの知恵などの啓発を期待して、FELDAにも協力隊が派遣されたと聞いていたが、果たしてその一役を担えたのかどうか。

マレーシアでの2年半。できたてホヤホヤのFELDA入植地で、半ばゼロから形にしていく協働の暮らしは、ワクワクドキドキの毎日であった。「野菜を育てるのは、自分の子供を育てるのと同じことだ！」とっさに自分の口から出たつたないマレー語のこの言葉の意味が、素直に受け入れられたときは心底うれしかった。大切なのは命をつなぐ…ということ。小生と同年代であった当時の現地スタッフや住民たちも、今では次世代にバトンタッチしている年代だろう。どんな暮らしぶりなのか、機会が許せば、再び現地に足を運んでみたいと思っている。

ほうれん草栽培に挑む(2015年:山梨)

3人娘
木几ネ寸で幼稚園作りに奔闘

私たち3人が東マレーシアのサバ州ケニンガウに55年度1次隊として派遣されたのは、ちょうど1980年、今から36年前になる。任地は日本とかかわりが深いところで、ケニンガウの山奥から伐採された大量の材木は、州都コタキナバルの海岸沖から貨物船で日本へと運ばれていた。

その頃、私達を要請した建設大臣 タンスリー・ソフィアン・コロの地元であるこの地には、既にOISCAという農業を主とした協力を行っている団体が活動しており、その拠点に幼稚園の教室を間借りする形で活動は始まった。
青年海外協力隊でも東マレーシアに幼稚園教諭は初めての派遣であり、公立幼稚園が出来るのも初めて、先生もいなかった。但し、中華幼稚園、他の私立幼稚園は数園あったと思う。

初の公立幼稚園のかたちをつくるため、大臣の求める「日本式の幼稚園」という要望を、どう捉え応えて行くべきかが、私たち3人にとって一番の課題であった。
なぜなら、この時代の日本では私たち自身も幼児教育のかたちや指導については模索していた時期だったからだ。それでも、迷いながら今できることをカウンターパート7~9名とクラス作りの方法を始め、制服製作、おやつの時間、さまざまな生活習慣をとりいれた園での生活を、新米先生と子どもたちにも習慣付けできるよう指導していった。
その後、ケニンガウの幼稚園もさまざまな行事やミニ研修を経て、先生たちも園児達も落ち着いた頃、私達の1人(齋藤JV)が数か月過ごしたケニンガウからテューロンと言う伐採道路を一時間半程、砂埃にまみれて行かなければならないジャングルを切り開いた集落に幼稚園を開設することになり、任地はケニンガウとテューロンの2か所に増えていった。

テューロンの幼稚園の子どもたちとカウンターパートと新しい園舎の前で　ブルーのエプロンは、隊員の手作りの制服　子ども達のお気に入りだ!(1981年: サバ州、テューロン)

テューロンには、ドウスン族のカウンターパート2人と共に行った。子供は20名程いただろうか？村人はドウスン族であり、マレー語はほとんど通じなかった。もちろん学校等はなく、幼稚園と言っても小学校低学年の子供も数人いた。まずは基本的な衛生面での指導、歌や遊びを交えての集団行動等が日々の日課となった。それに加えて国語であるマレー語や数の数え方などが教えられるようになった。絵を描いたり、物語の読み聞かせ等、今まで経験したことのない幼稚園生活は、子供たちに刺激を与えたことと思う。ただ、カウンターパートは数か月のクアラルンプールでの研修を受けただけのために、学校教育と幼児教育との境をつかめずにいた。私も同様に何をここですべきなのか、言いたいことが言えずの日々を過ごした。

村には電気、水道はなく、唯一園舎に住む我々のために自家発電装置があった。川もなく直径5メートルの水溜まりが唯一の水源であり、そこは水浴、洗濯、食器洗い、子供たちの遊び場であった。その頃はまだ水がペットボトルで売られることもなかったし、濾過も出来ず、ゴミが見える濁った水を沸かし、コーヒーで色をごまかして飲んだ。雨が降ったら水を貯めて飲み水にした。食料は月に2回程ケニンガウの町へ行き、缶詰を仕入れた。一体何を食べて過ごしていたのだろうか？と、記憶が全くない。未だにコーヒーが嫌いになったのはその影響である。
子供たちの遊び道具は空き缶や枝等が主流だったが、古タイヤを利用して遊具を備え付けた。夕方まで遊びに来る子供たちも多かった。もっと出来ることはなかったのだろうか？等、悔やむべきことは多々あったが、中途半端なままこれらの活動は急遽取り止めとなってしまった。テューロン滞在は4か月程だったろうか？

テューロン幼稚園開設から数か月たったころ、3か所目のラハダトウにもふたつの幼稚園が同時に開設されることに

なった。また1人(近藤JV)がカウンターパート4名と共にこの地に入った。それぞれの園に2名ずつ配置し、要請先に必要な用具や机・椅子などを準備してもらった。遊具類は分けてもらった直径2m強もある大・小の古タイヤを先生達と汗を流して園庭を掘り埋めた。ブランコなどは地元の父兄の方たちが協力してくれて設置した。

ラハダトウの幼稚園を開設するに当たっては、役所等と交渉を重ね認可を貰ってはいたが、園舎が地元の集会所も兼ねたことが後に問題となって、数ヵ月後に先生方の仕事の継続が困難になり、テューロンとともに同じ時期に閉園となってしまった。

今でも残念な結果だったと思う。しかし、幼稚園独自の園舎でなかったという失敗から、後のサバ州教育省の政策において、各地の町村に幼稚園舎を新しくつくり、先生を各クラス2名程配置することを定めるといった結果に至ったのであろう。(私の想像の域を出ないが・・・)
ケニンガウでの活動は2年に満たずに中止となってしまい、新たな仕事として州都コタキナバルの建設省地域振興部門のような所へ配属され、サバ州全域における幼稚園教育開発管理事務所へと移転となり、さらに1年延長してボランティアを継続することとなった。

現地職員と共に3人でサバ州を3分割して管理し、建設された幼稚園がスムーズに運営されているか、また学期休みを利用しての先生達への講習会等を実施した。結果、子供達との接触より幼稚園運営、教諭育成と言う方に重点がおかれるようになっていた。

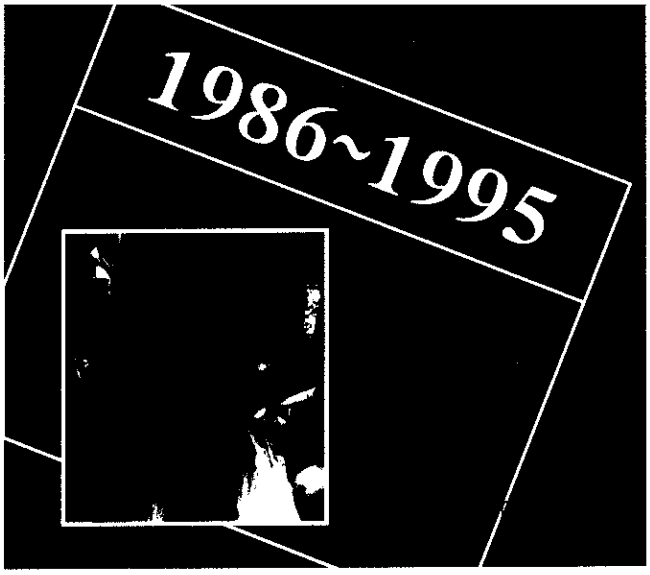
現在、マレーシアでは既に7~8年前にSVが幼児教育の協力支援に関する活動を終焉している。これからは私たちボランティアの活動の必要は無くなり、マレーシア独自の幼児教育が創造され、発展していくであろうことを期待したい。

ケニンガウの奥地にある山から流れてくる清流で乾いた洗濯物でファッションショー
大物の洗濯物でもあっという間に洗え、30分程で乾く　毎週のように洗濯ものを持って行っては洗っていた(1981年4月: ケニンガウ)

新しく出来た公立の幼稚園の先生達の研修中、グループで行う壁面構成の制作はたくさんのアイディアが飛びだした!

直径5メートル程の水たまりで子どもたちは水遊びをする　この水は雨が降らない時の生活の頼みの綱である
(1981年: サバ州、テューロン)

「タイヤ遊びのあとで、みんなで記念写真!!」
(1980年5月:サバ州ケニンガウの幼稚園:カウンターパート)



Belajar dari Mengajar

ちょうど今から30年前になる昭和62年(1987年)、自動車整備隊員としてマレーシアに赴任した。
当時のマレーシアは、人口も今の約半分にも満たない1500万人程度(日本の首都圏とほぼ同じ人口)だったが、マハティールモハマッド元首相のルックイースト政策(日本に見習え)の真っただ中で、国民が一丸となって経済発展に向けて必死になっていた。

その反面、闇の社会も急激に発展をし続けており、経済活動を失速させる麻薬に溺れる人々も年々増えていた。(1987年時点の麻薬依存症患者は約5万人)
マレー半島は、半島の中心が豊かな熱帯ジャングルに覆われ、半島南部もゴム園やパームヤシのプランテーションが連なっていたため、タイ北部のゴールデントライアングルと呼ばれる地域からヘロインの原料となる麻薬をマレー半島を陸路で縦断し、容易に香港・マカオの華僑マフィアに運ぶ麻薬密輸のハイウェイとされていた。

その密輸方法には残虐なものもあり、一部の地域では子どもを誘拐、殺害し、遺体に何十キロものヘロインを隠して密輸するという荒っぽい手口も使用されていた。それでも、マレーシア政府は麻薬患者を更生させ経済発展の一員として受入れるために自動車整備、溶接・板金、木工、印刷、洋裁、農業・家畜など更生後の社会復帰のための職業訓練を行う麻薬患者更生施設(Pusat Serenti Tampin)を設立し、そこが青年海外協力隊として活動する任地だった。
「職業訓練のための自動車整備指導」という聞こえは良いが、生徒達は入所前から仕事の経験があり、数々の修羅場を潜り抜けてきた技術者かつ麻薬を常習しながら仕事をしてきたつわもの達である。途上国の人たちは、貧しくて困っているし、技術も劣っているのだから、協力隊の隊員として現地に赴き日本の最先端の技術を指導する。それが援助である事を当時は信じて疑わなかった。

PST Tampin　任地

自動車整備隊員ーInputにバイク整備に行った(1988年)

生徒達と自動車の改造をしている(1989年)

今思えば、生徒たちと散々口論をしながら活動(指導)していたつもりだが、更生施設に入る前から自動車の整備をしていた連中を相手に「教える」などおこがましい話だ。(笑)
相手が相手だけに、自動車の基礎を教えることの限界から導き出した活動は、一足飛びに「改造車両」(流行りのチューンアップ)であった。おそらくそれは、麻薬患者の仲間たちと、ただ単純に楽しい時間を過ごしたい!!と思ったからであり、指導などという枠を超えた生徒(麻薬患者)との信頼関係を築きあげていったのだと振り返る。

派遣期間を1年半延長したあと「麻薬患者」とたどり着いた活動は、研修施設を実際の自動車整備工場として営業し、少しでも麻薬患者更生施設の運営資金を稼ぐという、もはやそこには、自動車整備技術の指導という形はないものの、絶え止まない麻薬患者の入所に楽しい時間と場所を提供する施設となっていった。
あれから30年、さすがに再入所を続ける連中がいないことを切に願う。

ボランティアツアーと称しマレーシアのJOCVが手前にある机・椅子・おもちゃを作ってくれた(1995年4月:セランゴール州チェシャーホーム)

NGOセランゴールチェシャーホーム

私は1994年7月に首都郊外のNGOに赴任した。身体障害者のための施設でリハビリ担当をしていた。施設内はごく穏やかなゆっくりした時が流れているが、その周りでは市場の喧騒や車のクラクションが鳴り響き、風向きによって肉やら魚やらいろいろなにおいがした。

当時は首都KLとその周辺には公共交通機関というとバスしかなく、一番多かったのがピンクのボディのミニバスだった。どこまで乗っても60セン、KLまで15キロもあるのにそれでも60センのバスは市民の貴重な足だった。込み合う時間には途上国ならではのドアに鈴なり状態での走行となるが、普段はのんびり、隣の人と話したり、立っている人の荷物は座ってる人が持つのも普通だった。そのミニバスで、同僚と特に用もないのにしょっちゅうKLに出てそこらをウロウロし、アイスカチャンとミーゴレンなんかを食べてふらふらしていた。KLにツインタワーはまだなかったが、プロトンサガがあちこちで走り始め、そごうやヤオハンはきらびやかで華やか、協力隊員の現地手当で手の出せるものはほとんどないので、毎度のウインドーショッピングを楽しんだ。

まだタイプライターを使っていた頃で、コンピュータを持ってる人はすごいね、という時代だった。もちろん携帯もないので、通信手段などないも同然だった。それなのに、赴任して数か月で起こった阪神大震災、そしてサリン事件、私にはどっちのエリアにも友人知り合いがたくさんいた。心配で、マレー語や英語や中国語の新聞を必死で読むがどうもよくわからない。とりあえずは知人はすべて無事だったことが分かったのは1か月以上もしてからだったと思う。親はあんたはこの時期にマレーシアに行ってて本当に良かったと言った。

私は1年延長して3年間の滞在となったが、その内に職場のオフィスにはタイプライターのほかにコンピュータが備え付けられるようになり、建て替えられた後は自動ドアとエアコンルームが出来上がっていた。それでも今と同じく障害者の施設で働きたがるマレーシア人は少なかった。そのため私の同僚は、フィリピン人、バングラデシュ人、スリランカ人など様々まじりあっていた。共通語が英語だったので、マレー語しかできない私は仕方なく英語学校にも通った。

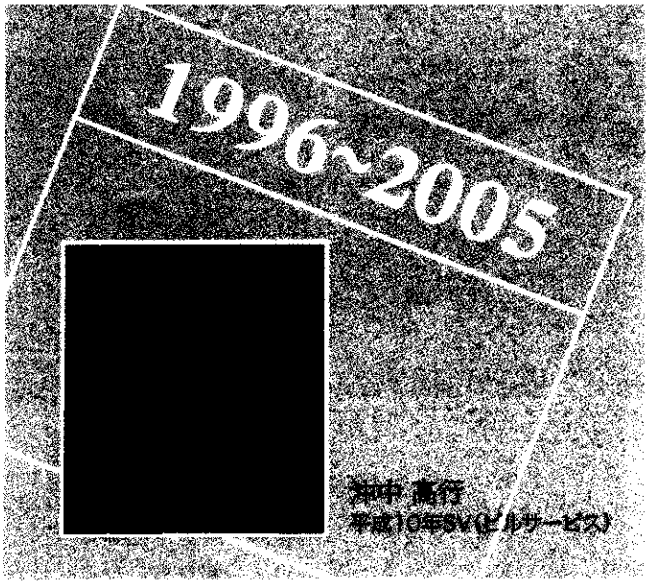
障害者は弱いと思われがちだが、施設に住む人たちはしたたかだった。利用できるものは外から来た人でも何でも利用し、車いすが体に合わなくても勝手に後ろ向きに乗ったりバイクや自転車屋で改造させたり市場の喧騒の中を果敢に値切りながら買い物していた。喧嘩もよくするし、よく言えばとても生き生きとしていた。時間はたくさんあるので、あれこれとよく面倒を見てもらった。よってたかって世話をされていたのである。

日本からの視察がやたらと多かったが、人が来るとみんな喜ぶので誰でも何でも受け入れて、また日本人に買い物補助をしてもらったりもした。いまから思えば、もしかして私がいて役に立てたことはそれだけだったかもしれない。

個別訓練中

地域に根ざしたリハビリテーション　プログラムの一環でプール訓練(1995年:セランゴール州チェシャーホーム)

保護者向けにリハビリの方法を指導中



時々思い出します、あの時出会った人たちはいどうしてるのかなと

私は1999年から3年間イポーというところに滞在しました。そこにあるポリテクニック、ウングオマールPUOで建築設計デザインの授業を受け持ちました。ちょうど建築学科が2年制から3年制へ移行する時で、カリキュラムやシラバスを充実させるための業務も含まれていました。日本もあの時はアジアを代表する経済大国として、勢いと熱気はまだ残っており、マレーシア人の日本に対する見方もそれを感じさせるものでした。建築デザインの分野では多くの日本の建築家が世界中で活躍しており、私はそれほど有名建築家ではありませんでしたが、その流れで建築デザイン教育における期待が大きかったです。

日本にいると日本という国は空気のようで特に意識することはありませんが、JOCVとしての派遣となるとパスポートからして公用旅券なので、自分は日本人だと改めて自覚した記憶があります。その時から私はひそかに外国でも通用する人間になりたいと思っていました。そのために外国で活動するとしても個人では簡単ではありませんが、その機会を与えてくれたのは母国の日本ということになります。

その後、マレーシアからインドネシア、中国と三か国にSVとして派遣されて、振り返ると人生の中で貴重な時期を過ごすことが出来たと思います。その後、外国で通用する人間になったかどうか分かりませんが、現在はボランティア活動を離れて外国で大学教師生活をしています。マレーシア派遣先での活動として高等教育省主催の全マレーシアポリテクニックの5年ごとの教育内容見直し会議に、外国人としては初めて出席したのはカウンターパートの配慮によるものでした。私がSVの立場で実行出来たのは、シンガポールのポリテクニックへ生徒と先生を連れて行き、ワークショップをやったことです。当時マレーシアのポリテクニックでは前例がなかったので、許可がなかなか出ませんでした。出発前日になってやっと高等教育省の許可が出て、校長を含めてみんなで喜びました。

さて、派遣先でのカウンターパートや先生たちは、その後どうしたかと最近知ることが出来ました。カウンターパートだったナイマやナナはマレーシア高等教育省の官僚になり、当時若い先生だったファティマはマラッカポリテクニックの建築学科長、ロスディアはPUOの建築学科長です。ロスディアは最近突然にメールをくれました。

私が教えた学生たちは、今はパパやママになり、私が知るところでは家を手に入れ車を所有する生活をしています。あれからずいぶん月日が経ちますが、マレーシアに行った時に連絡すると迎えに来てくれます。中国系の学生はPUOを卒業しただけでは先行き不安を感じるらしく、その後何人かは外国に留学しました。そのうちの一人はシドニーの大学卒業後はそこで働いているのですが二回ほど日本に遊びに来ました。

ウングオマールポリテクニックPUOの構内で建築学科学生たちと(2002年頃:イポーPUO)

あの時出会った青年海外協力隊の人たちは今どうしてるのかな。当時はSVとの交流は盛んで、多くのJOCVの若い人たちが遊びに来たり、旅行の途中に立ち寄ったりで、いっしょに飯を食ったり飲んだりしたけれど、今は連絡もなくなりました。

帰任後JICA東京事務所に何か問い合わせた時、「もう関係ありませんから」と言われて一抹の寂しさを感じたのと通じるものがあります。今回はマレーシアJOCV派遣50周年記念事業に参加するということで、マレーシアでの繋がりが再び巡ってきました。

当時を振り返ると派遣されていたSVやJOCVの人たちは、私の知る限りでは日本人持ち前のまじめさと一生懸命さで成果を上げていたと思います。今後のボランティア活動の展望はどうなるのか。現在日本はかつてのような勢いはなく、経済が落ち込みいろんな分野が衰退しつつあります。世相からいっても、日本人の気持ちに余裕がなくなっている現象が多くみられるようになりました。こういう状況になってくるとすれば、国際ボランティアも対外的にするのではなく、日本がされる側になることも将来の視野に入れることも考えられます。輸出があれば輸入があるように、国際ボランティアも日本から外国に一方通行だけというのは、実のところ不自然で不均衡な関係です。今までやJICAが行った途上国へボランティア活動に見合ったものを、力を付けたかっての途上国から返してもらうのです。どのくらいのものが還ってくるのか、そこで初めてやJICAが行ったボランティア活動が相手国にどれほど役立ったかという真価がはじめて分かるのではないでしょうか。

大澤(上松) 由佳
平成10年1次隊(日本語教師)

マレーシア日本語教育活動

月日が経つのは早いもので、私が初めてマレーシアの土地を踏んでから18年が流れました。任期を終え、任地をあとにしたのが2000年7月、その翌年に一度訪問したきり15年以上任地へは行ってないわけですが、この寄稿文を機に記憶の時計針を巻き戻してみることにしましょう。あの、太陽とゴム園と田んぼに囲まれたポコスナという町で日本語を教えた日々に。

私が派遣されたのは全寮制中高等学校。13歳から17歳までの全国から集まった子供たちが寮生活をしていました。日本語は第二外国語として1年生から4年生までを対象としていましたが、私が派遣された年は日本語導入初年度のため生徒は1年生のみ。カウンターパートになる日本語教師が長期病欠だったため、8月というのに日本語の授業はほとんど進んでいませんでした。カウンターパートと一緒に初めてクラスに入った時の印象はいまだ鮮明です。みな非常にシャイなのです。にもかかわらず、興味津々の輝く目、何か言いたげなはにかみ、すごい注目度に圧倒されました。本来1月から始まるはずの日本語授業でしたが、数週間前にようやく始まったばかりのため、私たちはスケジュールに追いつこうと必死に教えました。午後の補習は勿論、夜も遅くまで教えました。着任してすぐ夜の補習に出た際、ついに一人の勇気ある男子生徒が本を片手に質問に来ました。何かと思えば授業には全く無関係の質問で、手に持っていたのはなんと『ドラゴンボール』の漫画本！思わず爆笑！それを皮切りにクラスの生徒が一斉に私の周りに集まり、質問だか何だか一斉に喋りだしました。私はさながらファンに囲まれたアイドルか何かのよう。つまり今までは厳しいカウンターパートの先生が常に同行していたため、物珍しい日本人の先生には話しかけたくても話せなかったというわけです。

最後の授業1年生と

当時はマハティール首相のルックイースト政策提唱から20年が経とうとしておりその間日本に留学した日本語の教師たちが続々と帰国して教鞭をとっていたころでした。日本留学から帰った彼女らの熱意と日本語能力および日本文化の吸収には感心させられました。

文化祭のために日本関係の展示を深夜まで準備していたとき、疲れて途中で投げ出そうとした生徒たちに「日本人は今日できることは今日中にやる」と一喝したシマ先生。
(「Esok masih ada」と思っていた私にも「がんばりましょう」と喝！)。

日本文化の日(Ang先生と引率)

浴衣姿の生徒と

日本の民族芸能を生徒に教えたアン先生。妥協を許さない指導で数年後、日本公演まで導いた踊りの実力はあっぱれ！としか言いようがありません。(私はただの衣装係)。
歌、踊り、浴衣作り、寿司作り、ビデオ鑑賞、一緒にいろいろやりました。Yukaがいれば何でもできる、シマ先生はそう言ってくれました。未熟な日本語教師の私に。
地域や全国規模での日本文化祭のような大規模なイベントができたのもローカル日本語教師のやる気、協力隊員の好奇心、国際交流基金の知識などの連携プレーがあったからこそ実現したのだと思います。

私が教えた時代はいわば、協力隊による日本語教育の完成期。これまで協力隊が中心となって担ってきた中高等学校での日本語教育がローカル教師に完全に引き継がれようとしていたころでした。マレーシアから多くの生徒が日本に興味を持ち、日本で学び、自国の発展に貢献したことでしょう。私が携わった2年の日本語教育はマレーシアの人材育成と発展に参加したというにはあまりに短く浅く、おこがましい限りですが、その歴史に一瞬でも立ち会えたことに感謝します。

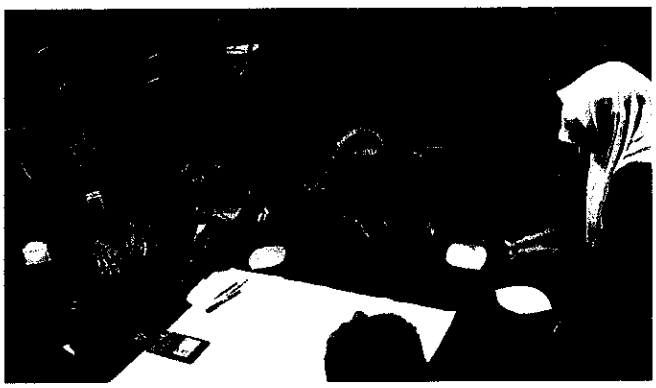
任地最終日

段 佳江
平成19年1次隊クランタン州
(ソーシャルワーカー)

マレーシア人から学んだ セルフアドボカシー

私はクランタン州で2年半、パハン州で半年、スランゴール州で1年間の活動を行いました。活動の柱は「知的障がい者によるセルフアドボカシー運動の推進。」セルフアドボカシーは知的障がい者が自分達の権利を主張し、獲得していくことです。自分達を理解してもらうためには自分達自身が声をあげていくことが大事という考えから始まった運動です。

当時はNGOでその活動がされており、各州にあるPDK（地域に根ざしたリハビリテーション）センターではセルフアドボカシーという言葉さえ知られていませんでした。PDKを巡回していた私はそれを広めていきたいと活動の柱にしました。当初NGOでの運動は、マレーシア全土において10くらいのグループで行われているのみでしたが、PDKでのグループも少しずつ増えていきNGO、PDKの垣根を越えて集うような広がりを見せていきました。色々な問題を抱えながら現在もPDKでの活動を続けているところ、また停滞しているところもあります。ボランティアが何をやったかと言われるより、現地の人が自然と続けられる土台を作れているかがボランティアにとっての真価が問われるような気がします。


パハン州で行ったワークショップ　皆で将来の夢について話し合いました
(2010年9月 クアンタン)

1回目の派遣先クランタン州には31か所のPDKがあり、そこには自分のことを自分で決める経験をしてこなかった、やる前からできないと決められてしまう知的障がい者もいる現状がありました。

それに違和感を感じている時、セルフアドボカシーの活動を知ったのです。その内容は学校へ行って自分達の障がいについて話をする、障がいについての勉強会を開く、自己表現をどのようにするか仲間同士で学び合う等でした。障がい者が発信する声には説得力がありました。私は彼らの活動によって自分の強み、弱みを知り自ら選択して生きていく「力」をつけることがどんなに大切かということを教えられました。

PDKへのアプローチ、特に支援者となるワーカーさんに関心を持ってもらうことはとても難しいことでした。定期的にPDKを訪問し、アプローチし続け、州内の全PDKを対象にワークショップも開催しましたが、その後のフォローアップは思うようにはできませんでした。それでも自分のできることを少しずつ、こつこつとやること、それしかできませんでした。パハン州での活動も同様でした。

セルフアドボカシーショートムービー撮影の一コマ (2012年12月 KL)

セルフアドボカシーを活動の軸にと決めた時からユナイテッドボイスとは情報を共有し、どのようにしてPDKでその活動を広めていくかというのを模索していました。NGOや私達隊員の働きかけから、社会福祉局もPDKでのセルフアドボカシーの推進を必要と理解してくれるようになりました。ユナイテッドボイスが全国のPDKを対象にゾーン別で講習会を開くことが決まったのです。その時私はユナイテッドボイスへ派遣されており、PDKでの経験を活かしながらその講習会で何を伝えていくか準備することができました。累計4年間の活動。私自身の言語力が足らず、もどかしい思いも思うようにできないこともたくさんありましたが、力になってくれる現地の人も確かにいて、その人達がいてくれたことが私の活動の大きな支えになりました。そして、その人達が今、活動を続けています。

セルフアドボカシーを実践している障がい者には自分らしく後悔のないよう生きていってほしいという思いと、またどこかで彼らの経験談を聞ける日が来ることを切に願っています。

小山 繁
平成21年2次隊(柔道)

視覚障害者柔道指導

畳を手でたたき柔道の受け身をし大喜びの重度障害の少年(2010年)

私は2009年9月より2年間クアラルンプールにある視覚障害者の社会・職業教育訓練を主業務としているNGOのマレーシア視覚障害者協会（英語略称 MAB）に配属され視覚障害者の柔道指導にあたりました。MABには宿泊・食事の施設も整っており学生のほとんどは合宿生活をおくっています。ここには約60枚の畳が敷かれた常設の柔道場があります。そして毎年男女合わせ20数名の新入生が柔道クラスに興味を持ち入門してきます。

私の第一の職務がこうした生徒達に初歩から柔道の指導をする事です。第二が柔道経験者や盲人柔道競技で更なる活躍を目指す者達の指導をする事です。

MABに着任するやマレーシアスポーツ局から盲人柔道チームのナショナルコーチに任命され、早速候補選手10名の指導にあたりました。候補選手達は皆マッサージの仕事を持っている為忙しく次第に稽古が続かなくなり10人いた候補選手も徐々に抜けて行き、マレー系、中華系、インド系それぞれ含む数名しか残りませんでしたが最終的に選手2名とアシスタントコーチを引率して2010年12月に中国の広州で開催されたアジアパラリンピック大会に出場しました。メダルは取れませんでしたがマレー系の選手は強豪国ウズベキスタンの選手から一本を取りかなりの存在感を示してくれました。

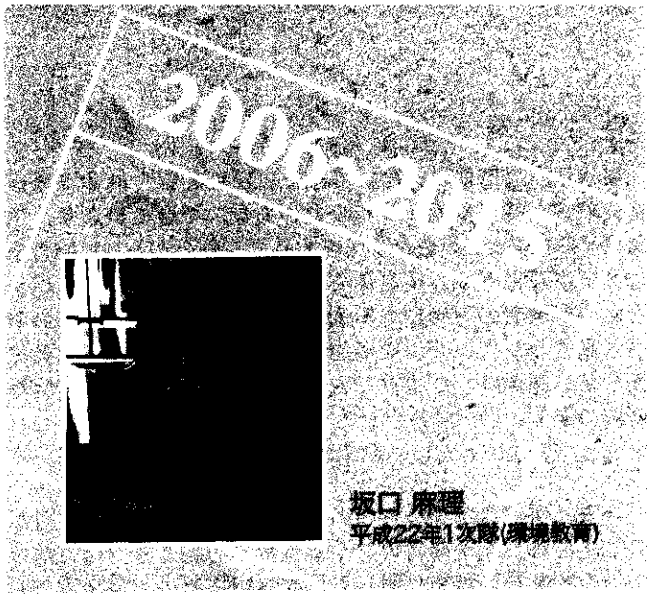
MABには視覚障害だけでなく自閉症や脳性麻痺等多重重度障害を持つ幼児・少年少女達も通ってきています。私は自発的にPRE柔道クラスをオープンし、こうした障害を持つ子供達にも楽しく身体を動かす事を教えました。保母さんや保護者の方々にも参加してもらい伴走しながらの前後に動くランニング、柔道の動きを取り入れた各種柔軟体操、補助運動等をプログラムに組み込みました。重度脳性麻痺の少年に受け身をさせると（腕と手で畳をたたく）ニコニコして喜ぶのも新しい発見でした。

一方、保護者は熱心さのあまり早急な成果を求めがちなので、こうした保護者のはやる気持ちを抑え、安全には最大の注意を払い指導しました。視覚障害者の柔道指導はもちろん手間がかかります。従って一人では限界がありますので、健常者との連携・協力関係の構築を視覚障碍者柔道指導及び普及の鍵と位置づけて取り組みました。即ち市内の柔道倶楽部で健常者に柔道指導をし、その生徒達に視覚障害者の柔道指導・手助けをして貰った訳です。加えて健常者の為の少年少女柔道クラスをMABに開き毎週土曜日は視覚障害者との合同稽古に充てました。健常者の少年少女達は積極的に視覚障害者の準備・補助運動の手助けをし、そして投げ技や寝技の乱取りで競い合うお互い切磋琢磨し合える場を作る事が出来たと思います。

私はマレーシアでの視覚障害者柔道の更なる普及の為MABにとどまらず、他の盲人学校への柔道導入を目指し毎年盲人学校の先生方約50名ほどをMABに招いて柔道のプレゼンテーションを行いましたが、先生方の大きな関心をひいたものの財政問題がクリアできず実現に至らなかったのは残念です。

PRE柔道クラスの生徒達と保母さん(2010年)

視覚障害者柔道クラスに参加のMABの生徒達(2010年)



坂口 麻理
平成22年1次隊(環境教育)

キナバル公園との共生、現地住民と環境教育 ~ボルネオ島の大自然の中で~

2010年-2012年の間、環境教育隊員として活動しました。任地はサバ州ラナウという場所です。首都クアラルンプールから飛行機で2時間半かけてコタキナバルへ飛び、そこからバスで3時間半、ようやくラナウに到着です。さらに職場にはそこから車で30分かかります。クアラルンプールからの移動には丸一日かけていました。広大な国立公園の付近とあって、ラナウは熱帯雨林に囲まれた大自然の中にあります。私は当時、一番の田舎隊員でした。JICA事務所で指定されたMaybankという銀行もまだ無かったため、着任早々に口座開設で困ったことを覚えています。

停電、断水、携帯の電波が無くなることもよくありました。断水せずとも、川から引っ張っている水道は、雨が降ったあとはよく泥水になっていました。それでも、現地の人は普通に生活しているので、郷に入っては郷に従え、とひたすら真似して生活していました。

配属先は『キナバル公園ポーリン支所』です。世界遺産の一つ、東南アジア最高峰のキナバル山がある公園です。私はそこでポーリン支所に来る観光客や、キナバル公園付近の村で自然との共生について環境教育をしていました。

キナバル山は国立公園かつ、世界遺産のため、敷地内の

村での環境教育活動風景ー水資源についてのアクティビティ(2012年6月:サバ州)

村での環境教育活動風景ー有機肥料作成後、肥料の出来高を確認・説明をしているところ(2012年6月:サバ州)

資源の搾取は禁止されています。しかし、まだまだその事を理解されずに、違法伐採を行っている現地人もいます。また公園内でなくても、川などの自然への汚染は続いています。そんな公園付近の村で、自然との共生をテーマに環境教育活動を行っていました。農業を生活の糧とする住人が多い村だったので、活動は主に夜行う事が多かったです。ちなみに電気がない村がほとんどだったので、毎回ジェネレーターを持参し電気を作っていました。正直、村での活動はうまくいかないことが多かったです。お互いに日時を決めたプログラムを、当日現地に到着後にキャンセルされた事もありました。時間に関してはとにかく日本との違いに驚くばかりで、その度に日本人がいかに時間どおりに動いているのか実感しました。訓練である程度、途上国の人たちの人となりを知識としては学習していましたが、体験するのとはやはり大きく違っていました。また一番大変だったのは言語です。公用語のマレーシア語ではなくドゥスン語という民族語を使う人々がほとんどだったので、当初コミュニケーションが中々取れなかったです。ですがその分、プログラムがうまくいった時の達成感は気持ちよかったです。お互い有意義な時間を過ごすことができ、また次へと繋ぐことができる活動になりました。

派遣中の2011年3月に日本で震災が起きました。しばらくは、日本は大丈夫なのだろうか、マレーシアでボランティアをしている場合なのだろうか、とか考える事もありましたが、配属先だけでなく、村の人達もみんな私の家族、友達のことを気にかけてくれました。日本へたくさんのメッセージもいただきました。感謝を込めて、隊員活動を全うすることで恩を返そうと思いました。

これがきっかけで、環境という分野に興味を持ってくれる村の人が少し増えました。津波の話しと合わせて、水の資源の話をすると興味をもってくれました。日本人の私だからこそできる話ができたと思います。キナバル公園と共生する事が現地の人にとって有益なことであり、自ら自然環境についても考えるようになってくれれば素晴らしいと思います。

2年間を通して、自分が残した成果は少なかったかもしれません。しかし継続していくことで、信頼関係、知識、スキルが積み上げられていくのだ、とわかってもらえただけでも、自分の活動に意味があったと思っています。

森下 正人
平成23年2次隊（青年海外協力隊）

目指せコンポストづくり

マレーシアのサラワク州クチン市は、ボルネオ島に位置する人口約60万人の州都ですが、近年、急激な人口増加などにより、未処理の生活排水の混入による水質汚濁や家庭ゴミの収集が行き届かなく、ゴミの不法投棄が増え、衛生環境が悪化しています。

平成23年10月、私はクチン市に拠点を置くサラワク州資源環境審議会（NREB: Natural Resources & Environment Board）にシニア海外ボランティア（SV）として派遣され、クチン市が抱えるそうした問題に関する調査や政策立案、住民への環境啓発活動などの事業を支援するため、活動を開始しました。

赴任して半年ほど経った頃、偶然にもJICA草の根技術協力事業「クチン市における廃棄物管理」が始まり、この活動を支援することになりました。同事業は、市内の北部海岸近くにあるバコ村をモデル地区として、家庭ゴミの不法投棄の減少を目指すものでした。これは私にとって大変好都合な活動でした。つまり、私が、それまで興味を持って取り組んでいた活動のひとつが、生ごみからのコンポストづくりであり、開発途上国で使われるチャンスがなかった作成技法を、この機会にバコ村の住民に広めることになったのです。

クチン市バコ村で住民を対象にコンポスト作りの講習を行っているところ
（2012年11月：クチン市）

2012年11月、バコ村の20人余りのボランティアを対象に現地でコンポストづくりの講習会を開催しました。参加者は興味津々の様子で取り組み、様々な質問がでましたが、彼らにそのつど実演を交えてわかりやすく説明するなどして、クチンで利用できる発酵食品を利用した造り方を伝授しました。

ところが、きびしい現実が待っていました。約1カ月後、コンポストづくりの状況を視察指導（monitoring & guidance）するために村を訪れたところ、誰も家庭でコンポストづくりをしていませんでした。ちょっとしたショックでした。どうしたのでしょう？

しかしながら、ここであきらめることなく気を取り直して、当日参加した前回の受講者たちを対象に、再度コンポストづくりについてのノウハウの教授や質疑応答を実施しました。そしてコンポスターを自宅に持ち帰ってもらい、各自でコンポストづくりに取り組むよう念押しをしました。

年もあけた2013年1月、かすかな期待を持ちながら受講者の家を回り、巡回指導を行いました。5家庭ほど訪問しましたが、コンポスターには生ゴミが常時投入されている様子は見えませんでしたが、発酵床(fermentation bed)の管理自体は良好だったので、生ごみの投入方法などについて細かく教えました。

バコ村で住民の家庭を訪問しコンポスト作りの指導を行っているところ（2013年1月：クチン市）

そうして、ようやくコンポストづくりを継続する人が現れ始めたのは、さらに1カ月経って行った3回目の視察指導の時でした。やっとこちらの努力が実りました。

そうするうちに、任期終了間際にクチン市で開かれた国際環境シンポジウムには、バコ村のコンポストづくりを行っているボランティアたちも出席し、自分たちのコンポストづくりを紹介し、さらにはお茶の時間には自作のコンポストで栽培したスイカを振る舞ってくれました。これは、自分の持つ知識や経験が役立ったことを実感できる、とてもうれしい瞬間でした。

こういった活動がバコ村のみならず、クチン市全体に広がって少しでもゴミの減量化に寄与することを願いながら、2013年10月に任務を終え帰国しました。

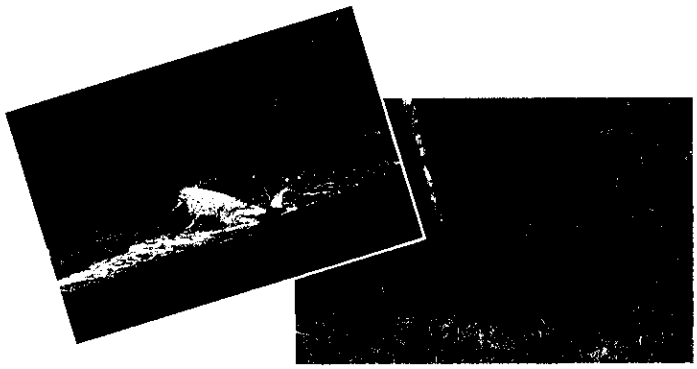
帰国後は、北九州市内に拠点を置く特定非営利活動団体「紫川を守る会（Beautiful & Clean Murasaki River）」の顧問として国内外の環境ボランティア活動に従事しています。マレーシアでのSVとしての任務は終わりましたが、引き続きクチン市の環境改善に微力ながら尽力したいと考えています。

Photo Graffiti

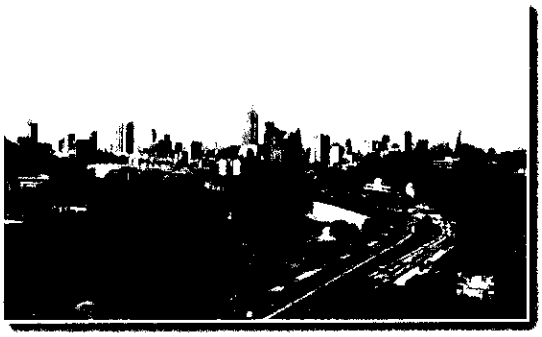
家の裏口に広がるゴム園(2000年:ケダ州:大澤〈上松〉由佳)

ポコスナの全寮制の中学校(2000年:ケダ州:大澤〈上松〉由佳)

Penjara Puduの壁画(1990年:KL:田島義明)

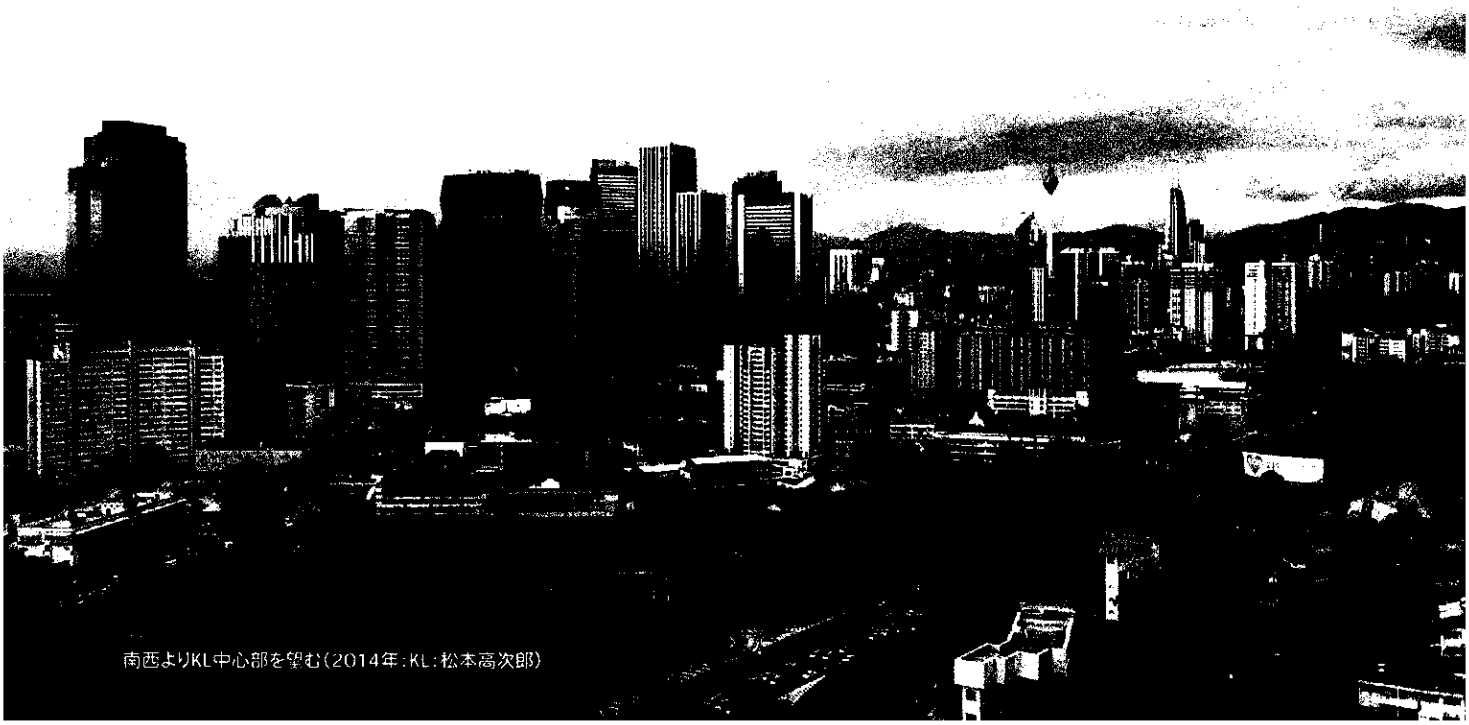


キナバタガン川に生息するゾウとワニ。森林保全の啓発キャンプへの参加で撮影(2007年:サバ州:河合〈大町〉恵子)



Wisma Beliaより撮影したKLの街並み(1989年:KL:田島義明)

ナイトマーケットとカラフルな食材(2015年:KL:松本高次郎)



南西よりKL中心部を望む(2014年:KL:松本高次郎)

マレーシア青年海外協力隊50周年記念式典

マレーシア青年海外協力隊（JOCV）は、1966年に初めてのボランティアが派遣され、今年で50周年を迎えました。これを記念し、2016年1月11日にマレーシア青年海外協力隊５０周年記念式典がクアラルンプールで開催されました。
マレーシア首相府大臣ダト・スリアブドル・ワヒド・オマールさま、在マレーシア日本国大使宮川眞喜雄さまをはじめ、今までJICAをサポートしてくださったご来賓の方々にご臨席賜りました。日本から参加してくださったOB・OGのボランティアのみなさま、普段ボランティアが活動を共にするカウンターパートのみなさまもご列席下さり２５０名の式典になりました。

Taming Sari Grand Ballroom : The Royale Chulan Kuala Lumpur

祝 マレーシア青年海外協力隊50周年記念式典

第一部 式典

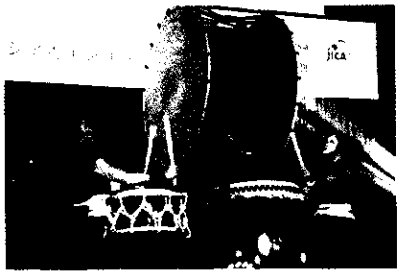
第一部では、ご来賓の方々からのスピーチ、JOCVの歩みを紹介するスライド・プレゼンテーション、物故ボランティア追悼の黙祷。今は懐かしい当時の情熱とJOCV活動の歴史を振り返りました。

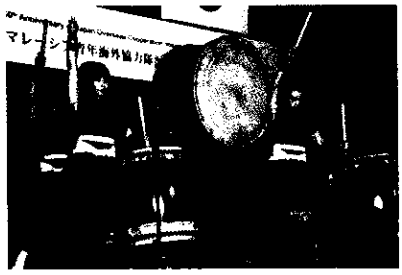
Ms Kae Yanagisawa
JICA Vice-President

Yang Berhormat Senator
Dato' Sri Abdul Wahid Omar
Minister in the Prime Minister's Department

Dr. Makio Miyagawa
Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary of Japan to Malaysia

Mr. Tadayuki Kusano
First Member (1966: Rice Culture)

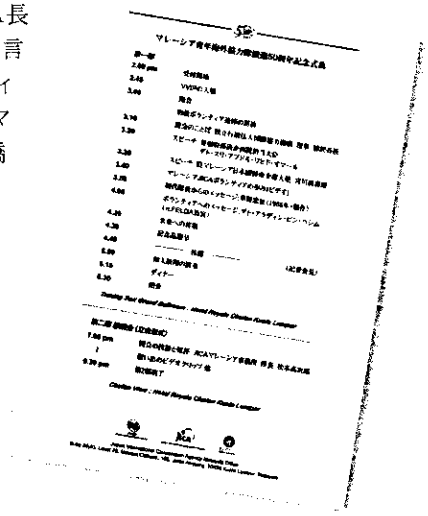




YBhg. Datuk Alladin bin Hashim
Former Director General of FELDA

その後、初代隊員からのメッセージ、元FELDA長官からのメッセージ、そして現役隊員の未来への言葉、記念品贈呈の後、懐かしいマレー料理のディナーをいただきながら、日本の和太鼓パフォーマンスを楽しみました。マレーシアと日本の懸け橋となるべく草の根活動を続けているJOCVの半世紀が、苦難を乗り越えここにその成果を確かめ合うひと時でした。

Satoshi Watarai
Current JOCV

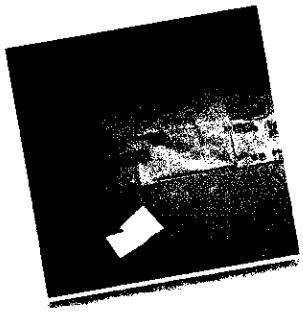


第二部 懇親会

第二部の懇親会は、和気あいあいのにぎやかな立食パーティーでした。弾む会話・沖縄出身隊員の三線演奏、歌や踊りが飛び出す躍動感あふれる会となりました。

Chulan View : The Royale Chulan Kuala Lumpur

Photo Graffiti



JICAは、これからもJOCVの活動を通して、開発途上国が抱える課題に
草の根レベルで取り組み、経済や社会の発展に貢献していきます。

History

- JOCV・JICAの活動記録
- マレーシアの出来事
- 日本・世界の出来事

Chapter

II

History

1957・マラヤ連邦がイギリスから独立
・初代首相にトゥンク・アブドラ・ラーマンが就任
1963・9月16日マラヤ連邦にサバ・サラワク・シンガポールが統合されマレーシアが成立した

西暦	JOCV/JICAマレーシアの50年	マレーシアの出来事	日本・世界の出来事
1965	・第1回選考試験開始 463人が応募 (合格40名、内5名マレーシア) 機関紙「若い力」創刊 「日本青年海外協力隊」(Japan Overseas Cooperation Volunteers) が海外技術協力事業団 (OTCA)の外局として創設 (昭和40年) 派遣前訓練開始 マレーシアと隊員派遣取極め締結 ジョギング中の初代隊員候補生	・シンガポールがマレーシアから分離独立 ・スバン国際空港が開港	・日韓条約成立 ・朝永振一郎博士ノーベル物理学賞を受賞 アメリカがベトナム戦争に直接介入
1966	・マレーシア派遣第一次隊着任 (5名:体育1名、稲作2名、野菜2名) セルダン農業試験場、農業高校、青年スポーツ省青年訓練所サバ州農業局へ派遣 ・日本青年海外協力隊マレーシア事務所を日本大使館内に開設 ・初めての協力隊駐在員がマレーシアへ派遣される 	・マレーシア政府とインドネシア政府がボルネオ島対決の終息宣言	・ビートルズ来日 中国の文化大革命(~1977年)
1967		・ASEANの設立:マレーシア・インドネシア・シンガポール・フィリピン・タイが最初のメンバーとなる	・第2次佐藤内閣発足 欧州共同体 (EC) 成立 東南アジア諸国連合 (ASEAN) 結成
1968	 「若い力の歌」(日本コロンビア) 協力隊隊歌「若い力」発表 中米に初めての派遣開始(エルサルバドル) 東京広尾に協力隊事務局庁舎完成、広尾訓練所開所	・共産主義者の反乱 (1968~1989)	・3億円強奪事件 ・日本初の心臓移植手術 ・東大紛争 ・川端康成ノーベル文学賞を受賞 メキシコオリンピック
1969	帰国隊員によって「日本青年海外協力隊OB会」が発足	・マレーシア史上最悪の民族衝突であるマレー人と華人の間の衝突(5月13日事件) ・ラジオ・マレーシアとテレビ・マレーシアが合併し、RTMとなる	・「サザエさん」放送開始 ・東名高速道路全線開通 アポロ11号月面着陸
1970	・マレーシア派遣予定隊員、来日中のラーマン首相を表敬 ・アジア地区駐在協力隊員会議がマレーシアで開催 JOCVニュース、創刊	・第2代首相にアブドゥル・ラザク就任	・大阪万国博覧会 ・よど号ハイジャック事件 ・70年安保闘争

JICA全体の活動　世界の出来事

マレーシア青年海外協力隊の歩み

西暦	JOCV/JICAマレーシアの50年	マレーシアの出来事	日本・世界の出来事
1971 (昭和46年)	・サバ州コタキナバルにはじめて調整員が派遣される	・クアラルンプール大洪水	・第3次佐藤内閣 ・ニクソンショック (金ドル交換停止)
1972	・クアラルンプール(Jln. Nipah)とコタキナバル(Luyang)に協力隊マレーシア事務所と隊員連絡所併設(クアラルンプール事務所はこれまで大使館内に、隊員連絡所は調整員住宅に併設されていた)	・英国のエリザベス女王2世、最初の公式訪問	・元日本兵横井庄一さんグアム島で発見 ・札幌冬季オリンピック ・連合赤軍浅間山荘事件 ・沖縄返還 ・田中内閣発足 ・日中国交正常化 ミュンヘン・オリンピック パレスチナゲリラによりイスラエル選手11人が殺害
1973	オリンピック記念青少年総合センターでの現地語重視の語学訓練開始 訓練期間が広尾2ヶ月、代々木2ヶ月の4ヶ月となる	・KFCが、クアラルンプールにオープン ・P.Ramlee 伝説的な歌手/俳優が病死	・ドバイ日航機ハイジャック事件 ・第一次オイルショック ・変動相場制へ移行 (ドル一円)
1974	「日本青年海外協力隊」から「青年海外協力隊」に改称 国際協力事業団設立(海外技術協力事業団および海外移住事業団を統合)	・クアラルンプールが連邦の直轄地となる ・国民戦線 Barisan Nasional (BN与党連合)を形成 ・マレーシアの石油・ガス会社ペトロナス設立	・田中首相アジア歴訪・反日暴動(インドネシア) ・小野田元少尉フィリピンで発見、30年ぶりの帰国 ・三菱重工ビル爆破事件 ・佐藤栄作元首相ノーベル平和賞を受賞 ・三木内閣発足
1975	・FELDA(連邦土地開発公団)への隊員派遣開始 第1号隊員・野菜隊員が派遣された。その後幼稚園教諭・手工芸・保健婦などの職種も派遣されるようになる 青年海外協力隊創設10周年(記念事業として映画「アサンテ・サーナ」が製作される) マレーシア事務所開設(マレーシア政府承認) 映画「アサンテ・サーナ」製作	・クアラルンプール事件:日本赤軍がクアラルンプールの米大使館とスウェーデン大使館を襲撃 ・独立記念碑(国定公園内)が共産主義テロリストによって爆破された	ベトナム戦争終結
1976	社団法人「協力隊を育てる会」発足	・第3代首相にフセイン・オン就任	・田中首相逮捕、ロッキード事件 ・福田内閣発足 モントリオール(カナダ)オリンピック
1977	菜園で試植栽培中のキャベツ(1997)	・日本航空715便が、スバン国際空港で墜落事故 ・MAS653便がハイジャックによりジョホール州に墜落	・ダッカ日航ハイジャック事件

JICA JICA全体の活動　世界の出来事

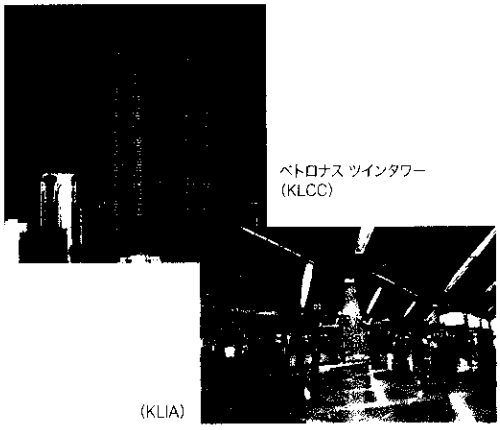
西暦	JOCV/JICAマレーシアの50年	マレーシアの出来事	日本・世界の出来事
1978 (昭和53年)	ODA第一次中期目標発表(ODAを3年間で倍増) 国際緊急援助を開始(カンボジア難民支援に医療チーム派遣) 南米への派遣を開始(パラグアイ)	・シャーアラムが、セランゴール州の州都となる ・カラー放送がRTMチャンネル1から放映開始	・キャンディーズさよなら公演 ・新東京国際空港(成田空港)開港 ・日中平和友好条約締結 ・大平内閣発足
1979	青年海外協力隊駒ケ根派遣前訓練所開所 JOCV機関紙「若い力」が「クロスロード」に改題	・セランゴール州シャーアラムに松下電器産業が工場を開設	マーガレット・サッチャー、ヨーロッパ初の女性首相
1980	・54年4次隊で初めてFELDAに幼稚園教諭配属(以後1991年まで47名派遣)	・モスクワ・オリンピックをボイコット ・サバ州とサラワク州にRTMによるカラー放送が開始 ・マレーシアの高速道路公社が設立	・鈴木内閣発足 ・山口百恵さよならコンサート モスクワオリンピック不参加、IOC加盟国148か国中67か国が不参加
1981	・協力隊事務所とJICA事務所を統合しAmpang Hilirに移転 ・FELCRA(連邦土地統合整備公団)への派遣開始 第1号隊員・野菜栽培隊員が派遣された その後手工芸・保育士・稲作などの職種も派遣されるようになる	・第4代首相にマハティール・ビン・モハマド就任(-2003年)、東方政策を提唱	・ピンクレディー解散コンサート
1982	・JICA事務所がJalan Yap Kwan Sengの元日本大使館情報文化センターへ移転、(隊員連絡所もNipahからJln. Amanへ移転) ・東方政策研修生受け入れ開始	・マクドナルドが、Jln Bukit Bintangにオープン	・中曽根内閣発足 フォークランド紛争
1983	協力隊事務局派遣隊員3年倍増計画開始	・中曽根首相御夫妻来馬	・三宅島大噴火 大韓航空機撃墜事件
1984	・隊員連絡所Jln.AmanからJln.Damaiへ移転 ・レジデンシャルスクールへの日本語教師派遣開始(以後2001年7月まで約96名派遣) 広尾・駒ケ根両訓練所2ヶ所で同時訓練が開始(それまでは訓練期間が広尾訓練所2ヵ月、駒ケ根訓練所3ヵ月となっていた) 青年海外協力隊の累計派遣人数が5千人突破	・クアラルンプールの有名なランドマークDayabumiが完成 ・TV3が開局	・グリコ森永事件 サラエボ冬季オリンピック ロサンジェルス・オリンピック
1985	・サバ州村落開発プロジェクトとして初めてのチーム派遣開始59年3次隊で7名が派遣される(チームリーダー、家畜飼育、土木、保健師等をチームで派遣) 海外開発青年(現「日系社会青年ボランティア」)制度開始 青年海外協力隊創設20周年 有田JICA総裁が鈴木元首相とともに来マ。隊員と会食 タンザニアバス事故で6名の隊員が事故死	・初のマレーシアの国民車、プロトン・サガ発売開始 ・ペナン・ブリッジが、オープン ・プトラ世界貿易センター(PWTC)、マレーシア初のコンベンション&エキシビションセンターがオープン	・日航ジャンボ機が墜落
1986		・プドゥ刑務所の受刑者による人質事件	・社会党初の女性委員長土井たか子就任 スペースシャトル「チャレンジャー」爆発 フィリピン革命、マルコス国外脱出
1987	10月6日を「国際協力の日」と制定 国際緊急援助隊発足	・Maybankタワー完成クアラルンプールで最も高い建物となる	・国鉄分割・民営化、JRスタート ・竹下内閣発足
1988	インドネシア派遣開始	・マレーシアで最大のモスク、スルタン・サラディン・アブドゥル・アジズ・モスクがシャーアラムに完成	冬季オリンピック・カルガリー(カナダ) イラン・イラク戦争終結 ソウル(韓国)オリンピック

JICA全体の活動　世界の出来事

1989 - 1994

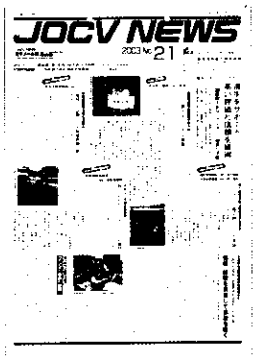
西暦	JOCV/JICAマレーシアの50年	マレーシアの出来事	日本・世界の出来事
1989	 JICA関係者とマレーシア人の交流運動会(PJ)	・マレーシア政府とマラヤ共産党は、タイ政府の仲介により武力抗争停止協定に調印	・昭和天皇崩御 ・バブル経済 ・美空ひばり死去 ・宇野内閣(69日)、海部内閣発足
(昭和64年) (平成1年)	JICA 日本のODAがアメリカを抜いて第1位に (1991-2000年まで供与額世界第1位)		世界 ベルリンの壁崩壊 世界 天安門事件
1990	・FELDAの民営化方針が打ち出され、隊員の派遣終了に向かう JICA「移住シニア専門家」制度開始(現「日系社会シニア・ボランティア」) JICA シニア協力専門家派遣制度開始(現「シニア海外ボランティア」) JICA 隊員派遣累計が1万名を突破	・「1990マレーシア観光年」がスタート(マスコットはオランウータン) ・ムルデカ広場に95mの国旗掲揚台完成 ・マハティール・ビン・モハマド首相EAEC(東アジア経済協議体)を提唱 ・サラワク山中の北カリマンタン共産党が武装闘争終結に合意	・大学入試センター試験スタート 世界 東西ドイツ統一 世界 ゴルバチョフがソ連で初代大統領に就任
1991	・スブラン・ペラ稲作セミナー開催 (5年にわたるFELCRAと協力隊のスブラン・ペラ開発プロジェクト) ・マレーシアへのシニア海外ボランティア派遣開始 ・事務所はJln.Raja Laut のWisma Sime Darbyへ移転	・マハティール・ビン・モハマド首相の提唱によりビジョン2020プログラムが開始(2020年までに先進国になることを目標) ・天皇皇后両陛下ご訪問 	・バブル経済の崩壊により4大証券が巨額の損失補填 ・宮沢内閣発足 世界 湾岸戦争勃発 世界 ソ連崩壊独立国家共同体が誕生
1992	・FELDAでの協力活動終了 JICA 旧社会主義国への協力隊派遣開始 (モンゴル、ハンガリー、ポーランド、ブルガリア、ルーマニア、キルギス、ウズベキスタン) JICA 派遣中止後22年ぶりに、カンボジアへの派遣再開 JICA「ODA大綱」制定、4つの理念「人道的考慮」「相互依存」「環境の保全」「自助努力」	・新しいスローガン「マレーシア・ボレー」 ・バルセロナ・オリンピックでバドミントン男子ダブルスプレーヤー、Razif SidekとJalani Sidekが初のメダルを獲得 ・ブラックアウト1992:マレーシア半島の停電	・PKO協力法案成立、自衛隊カンボジアへ初の派遣 ・日本人初の宇宙飛行士毛利衛氏宇宙へ 世界 冬季オリンピック・アルベールビル 世界 バルセロナ・オリンピック
1993		・マレーシア初の格安航空会社エアアジア設立 ・ウル・クランにあるハイランドタワーの崩壊、48人死亡	・非自民政権細川連立内閣発足 ・皇太子が小和田雅子さんと結婚 ・サッカーJリーグ開始
1994	 二本松青年海外協力隊訓練所 JICA 青年海外協力隊二本松派遣前訓練所開所	・マレーシア最大のシャーアラムスタジアムが、オープン	・細川内閣が崩壊 ・羽田内閣発足(64日) ・自社で村山政権発足 ・日本人初の女性飛行士として向井さん宇宙へ ・松本サリン事件 世界 冬季オリンピック リレハンメル(ノルウェー)

JICA JICA全体の活動　世界 世界の出来事

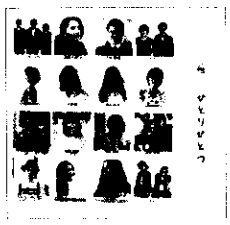
西暦	JOCV/JICAマレーシアの50年	マレーシアの出来事	日本・世界の出来事
1995 (平成7年)	 青年海外協力隊創設30周年記念切手 JICA 青年海外協力隊創設30周年	・広告でのタバコのパッケージ表示が、連邦政府によって禁止 ・新しい連邦政府の行政都市プトラジャヤの開発が着工 ・STAR LRT(ライトレールトランジット)が、KLで業務を開始 (Ampang - Sultan Ismail)	・阪神淡路大震災 M7.3 ・地下鉄サリン事件発生、オウム真理教摘発
1996	JICA 協力隊事務局が広尾からJICA本部のあるマインズタワーへ移転 JICA 「シニア協力専門家」を「シニア海外ボランティア」に名称変更	・衛星テレビプロバイダ、アストロが放送開始 ・KLタワー(421m)がオープン ・マイケル・ジャクソンが、クアラルンプールで初めてのコンサートを開催	・橋本内閣発足 世界 ペルー日本大使公邸人質事件 世界 アトランタ・オリンピック(アメリカ)
1997		・ペトロナスツインタワー(452m)世界で最も高いビルとして完成 ・アジア通貨危機	世界 アジア通貨危機 世界 ダイアナ妃、パリで交通事故死
1998	 ペトロナス ツインタワー(KLCC) (KLIA)	・マレーシアは独自の金融政策「資本取引規制・固定相場制」を打ち出した ・クアラルンプールシティセンター(KLCC)がオープン ・クアラルンプール国際空港(KLIA)がオープン ・コモンウェルスゲームズ、アジアで初めてクアラルンプールで開催(1988)	・長野オリンピック ・和歌山カレー毒物混入事件 ・小渕内閣発足 世界 サッカーW杯開催、日本初出場
1999	・事務所はJalan AmpangのCity Bankビル(当時Menara Lionビル)へ移転 JICA 国際協力銀行(JBIC)発足	・ダト・スリ・アンワル・イブラヒム元副首相、有罪となり6年の刑宣告 ・Formula One(F1)セパン・インターナショナル・サーキットで開催	・初の脳死判定による心臓・肝臓移植
2000	JICA 青年海外協力隊の累計派遣人数が2万人突破	・サバ州にあるシパダン島で21人が、フィリピンのテロリストグループアブサヤフに誘拐 ・「キナバル自然公園」「グヌン・ムル国立公園」が世界自然遺産として登録	・2000年問題(コンピューターの誤動作) ・森内閣発足 ・雪印乳業集団食中毒 世界 プーチン大統領就任(ロシア) 世界 シドニー・オリンピック
2001	・レジデンシャルスクールへの日本語教師派遣終了	・KLセントラル駅開業 ・LRT Putra全線開通	・小泉内閣発足 ・池田小学校乱入事件 世界 アメリカ同時多発テロ 世界 アフガニスタンのタリバン政権崩壊
2002	・2002年コタキナバル事務所閉鎖	・マハティール・ビン・モハマド首相が辞任を表明	・ゆとり教育スタート ・小泉首相が日本の首相として初めて北朝鮮訪問(北朝鮮から5人の拉致被害者が帰国) 世界 欧州12カ国で単一通貨ユーロ流通開始

JICA JICA全体の活動　世界 世界の出来事

2003 - 2009

西暦	JOCV/JICAマレーシアの50年	マレーシアの出来事	日本・世界の出来事
2003	JICA 特殊法人国際協力事業団から独立行政法人国際協力機構へ移行 (平成15年) JICA「ODA大綱」改訂キーワードは「人間の安全保障」「平和構築」	・第5代首相にアブドゥラ・バダウィ就任 ・小・中学校の数学と科学の授業に英語教育を導入 ・重症急性呼吸器症候群(SARS)発生 ・KLモノレールの運行がはじまる	・個人情報保護法が成立 ・芥川賞に最年少受賞者金原ひとみ20歳、綿矢りさ19歳 ・イラクで武装勢力が日本人のボランティア活動家ら男女3人を拉致 世界 イラク戦争開始
2004	JICA スマトラ地震に対して国際緊急援助隊派遣、緊急物資供与を始め、被災地の復旧、復興を継ぎ目なく支援	・ダト・スリ・アンワル・イブラヒム元副首相が6年の実刑から釈放 ・スマトラ島沖地震発生 M9.0 マレーシアでは、ランカウイ、ペナンで津波、KLでも揺れを感じる	・愛知万博が開幕 ・小泉首相の靖国参拝に抗議し、北京で1万人規模の反日デモ ・新潟県中越地震 M6.8 世界 アテネオリンピック
2005	JICA 青年海外協力隊創設40周年 2005年の「ヘイズ」	・マレーシア中央銀行は通貨リンギの固定相場制を廃止 ・クアラルンプール、セランゴール州で「ヘイズ(煙害)注意報」を宣言	世界 ロンドン同時爆破テロ
2006	JICA JICA地球広場の開設に伴い、青年海外協力隊広尾訓練所閉所	・低コストキャリアターミナル(LCCT)が正式にセパンにオープン ・ジョホールにイスカンダル開発特別区	・東京三菱銀行とUFJ銀行が合併、世界最大の銀行に ・秋篠宮妃が親王を出産 ・第1次安倍内閣発足
2007	JICA 青年海外協力隊とシニア海外ボランティアの合同訓練開始 JICA 青年海外協力隊の累計派遣人数が3万人突破	・マレーシア独立50周年 ・クアラルンプール スマートトンネル開通	・安倍首相、辞任表明 福田康夫内閣発足 ・郵政民営化スタート
2008	・隊員連絡所がVista Damaiへ移転 JICA 科学技術振興機構(JST)とJICAの連携で地球規模課題対応国際科学技術協力(SATREPS)を開始 JICA 国際協力機構は国際協力銀行の一部と統合、新JICAへ(JICAが円借款、無償資金協力、技術協力を一元的に担う、世界最大規模の二国間援助機関となった。)	・マラッカ、ジョージタウン(ペナン)が世界文化遺産となる ・マレーシア総選挙で与党連合・国民戦線の獲得議席が2/3を割り込む	・東京・秋葉原で無差別殺傷事件 ・アップル社の「iPhone」が日本で発売 ・麻生内閣発足 世界 北京オリンピック開催 世界 リーマン・ブラザースが経営破綻 世界 米大統領選、バラク・オバマが当選。初のアフリカ系大統領
2009	 2009年頃 JICA JOCV NEWSがJICAボランティアNEWSへ移行	・第6代首相にナジブ・ラザク就任 ・1 Malaysia(ワン・マレーシア)のスローガンがはじまる ・インフルエンザ(H1N1)が流行	・裁判員制度がスタート ・衆議院選挙で民主党が大勝し政権交代　鳩山由紀夫内閣発足

JICA JICA全体の活動　世界 世界の出来事

西暦	JOCV/JICAマレーシアの50年	マレーシアの出来事	日本・世界の出来事
2010		・マレーシア国民電子ID「MyID」が開始 ・マレーシアデーが祝日になる(9月16日)	・鳩山首相、普天間問題で引責、退陣表明 ・菅直人が民主党代表に、菅内閣発足 ・尖閣諸島付近で中国漁船が海上保安庁の巡視船に衝突 世界 ギリシャ財政危機
(平成22年) 2011	 東日本大震災の復興支援で活躍 JICA 東日本大震災被災地での復興支援活動で、帰国隊員および一時帰国隊員が活躍 JICA 二本松青年海外協力隊訓練所は避難所として住民を支援	・違法Bersih 2.0ラリーが、クアラルンプールで行われた ・マレーシアリンギット紙幣と硬貨の新シリーズ導入	・東日本大震災 M9.0 東京電力福島第1原発で初の「原子力緊急事態宣言」発令 ・野田内閣発足 ・女子サッカーなでしこジャパンW杯優勝 世界 タイ洪水で首都バンコクも冠水 世界 北朝鮮、金正日総書記の死亡と三男金正恩の後継を発表
2012	・Vista Damaiの隊員連絡所閉鎖 JICA 民間連携ボランティアの派遣が始まる	・英国デビッド・キャメロン首相が、マレーシアを訪問	・東京スカイツリーが完成 ・尖閣諸島の土地を政府が購入、反日デモ過激化 ・第2次安倍内閣発足 世界 ロンドン五輪
2013	JICA 元広尾訓練所内にあった地球ひろばが、JICA市ヶ谷内に移転 JICA 復興庁が協力隊経験者を東日本大震災被災地自治体へ派遣	・エジプトが非常事態を宣言、3300人のマレーシア人がエジプトから脱出	・2020年夏季五輪・パラリンピックの開催地が東京に決定 ・富士山が世界文化遺産に決定
2014	JICA ODA60周年、1954年のコロンボプランに調印後の協力開始から60年経過（マレーシアへの協力は1956年から開始） 映画「クロスロード」製作  協力隊50周年イメージソング「ひとりひとつ」発表	・マレーシア航空370便が、行方不明 ・KL市内の131校が、ヘイズ（煙害）のため休校 ・マレーシア航空17便が紛争中のウクライナ上空で撃墜された	・『STAP細胞』真偽騒動 ・御嶽山の噴火 ・消費税8%スタート 世界 韓国で旅客船「セウォル号」が沈没 世界 イスラム国に米軍がイラクで空爆開始 世界 ノーベル平和賞にパキスタンのマララさん
2015	JICA 青年海外協力隊創設50周年 JICA 青年海外協力隊の累計派遣人数が4万人突破	・マレーシアの物品サービス税（GST）開始 ・サバ地震により日本人1名を含む18名が死亡	・イスラム国(IS)日本人殺害 ・ラグビー W杯イングランド大会で、日本は歴史的な3勝 ・安全保障関連法案が成立 ・マイナンバー始まる ・TPP大筋合意 世界 パリ同時テロ
2016 (平成28年)	・マレーシア青年海外協力隊派遣50周年記念式典クアラルンプールで開催	・環太平洋パートナーシップ協定(TPP協定)に署名	・SMAP解散騒動 ・長野スキーバス転落事故 ・日銀マイナス金利導入 世界 ベルギー同時テロ

JICA JICA全体の活動　世界 世界の出来事

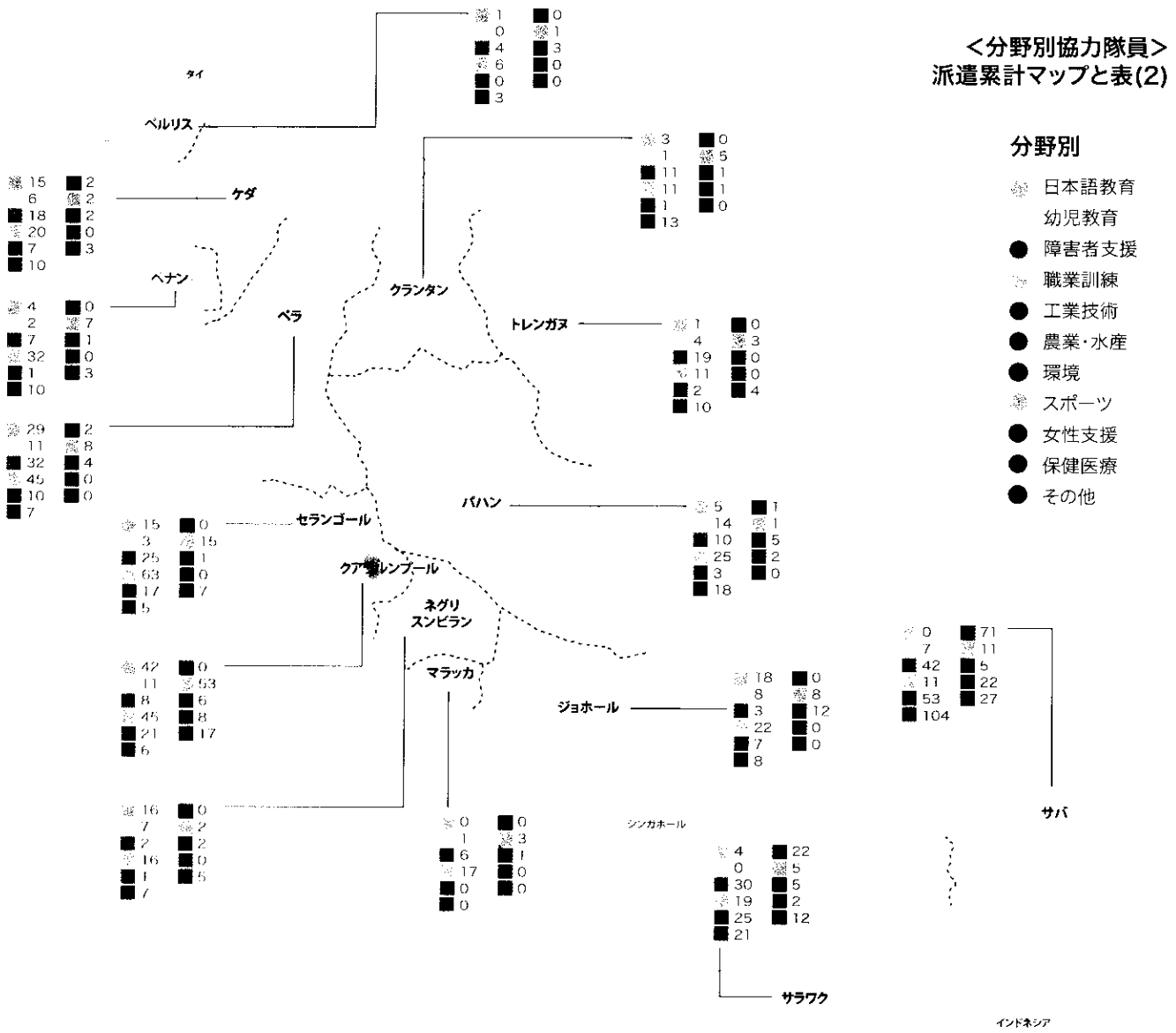
共に目指したゴール

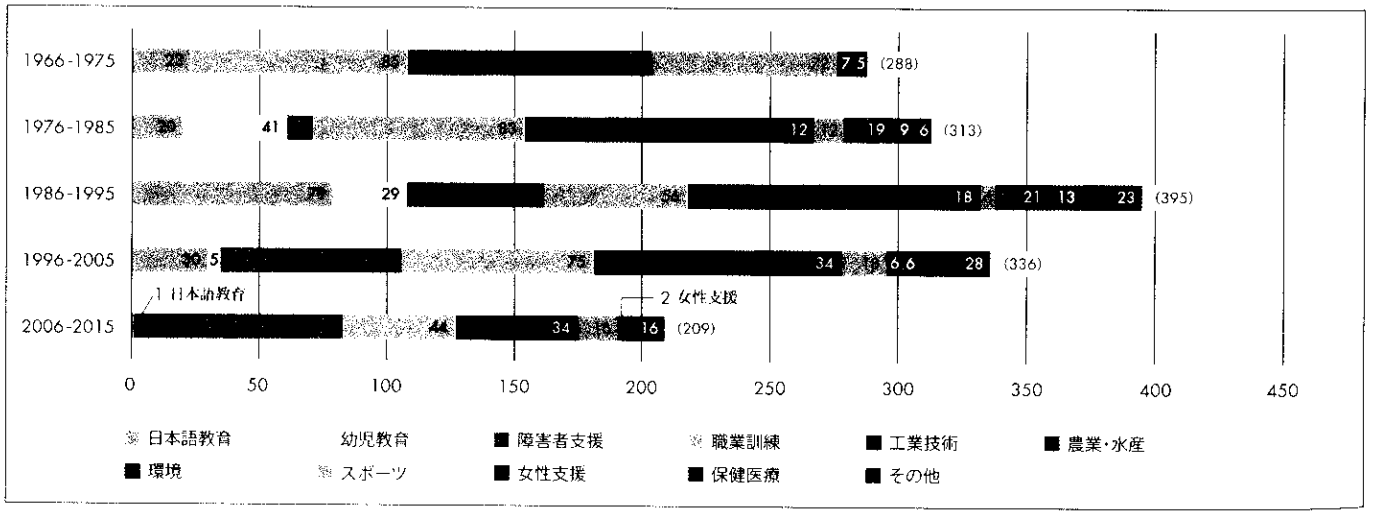
- 日本語教育
- 幼児教育
- 農業
- 障害者支援
- 環境教育

Chapter

III

<分野別協力隊員>
派遣累計マップと表(2)





※ 1966年~2015年

日本語教育

1960年代後半から80年代初めにかけて、日本は高度成長期に入り、日系企業の東南アジアへの進出も大幅に増えてきました。マレーシアでは日系企業に勤める人たちや日系企業への就職を望む人たちの間で、日本語学習熱が高まり、日本語教育機関も次々と開設され、それに伴い日本語教育ボランティアが派遣されるようになりました。その頃の主な派遣先は、マラヤ大学、マラヤ工科大学、マレーシア農科大学等の高等教育機関や行政機関、国立行政研修所、日本大使館日本情報センター等でした。

その後1982年に当時のマハティール首相が提唱した「Look East Policy（東方政策）」（日本、韓国など東方の国に学び、マレーシアの発展に役立てようとする政策）による日本の大学や高等専門学校への留学、産業技術研修生派遣が増加し、日本語教育にも大きな影響を与えました。同年にはマラヤ大学に日本留学準備のための日本留学予備教育課程が設けられ日本への留学が本格化してゆきました。

1984年にはマレーシアと日本の架け橋となりマレーシアの発展に寄与する人材の育成を目的として、マレーシアのレジデンシャルスクール（以下RS・全寮制中等学校）に日本語科が開設され、同年、RSとしては初めてのボランティアが派遣されました。その後RSのカリキュラムに沿った日本語教育シラバスを完成し、共通テストや作文コンテストなどが初まり、その後のRSにおける日本語教育の礎を築いた時期でした。このシラバスは現在でも日本語教育向けシラバスの基となっています。その後もシラバスに合わせた教科書「にほんごこんにちは」が作成され、次いで教科書に対応した「練習ノート」が完成しました。

そして5年間の留学による日本語教師養成プログラム（1990~2008）を終えた現地日本語教師第一期生が帰国し、RSへ配属になったことを機にJOCV主体による日本語教育は終結し、新たな方向へ向かう過渡期に入って行きました。1998年には教育省により、「現地教師＝主体、JOCV＝サポート」という方針が打ち出され、これによりRSにおける日本語教育はマレーシア政府による運営へと移管されることとなりました。この時点で当初6校から始まった日本語課は20校規模となっていました。そして2001年、RSへの日本語教師派遣が終了しました。

RS以外への日本語教育ボランティアの派遣の動きとしては、1990年シニア海外ボランティアの派遣が開始され、翌年から2001年まで10名のシニアボランティアが人事院公務員研修所（INTAN）、職業訓練指導員上級技能訓練センター(CIAST)、ウンクオマール技術工芸短大、マラ工科大学に派遣されています。

その後、2015年にマレーシアにおいて日本型の工学系教育を行う教育研究機関「マレーシア日本国際工科院（MJIIT）にボランティアの派遣が再開され、新たな日本語教育が展開されることとなりました。

ルックイーストマレーシア
中等教育での日本語

吉田（谷口）曜子
昭和61年1次隊（日本語教師）

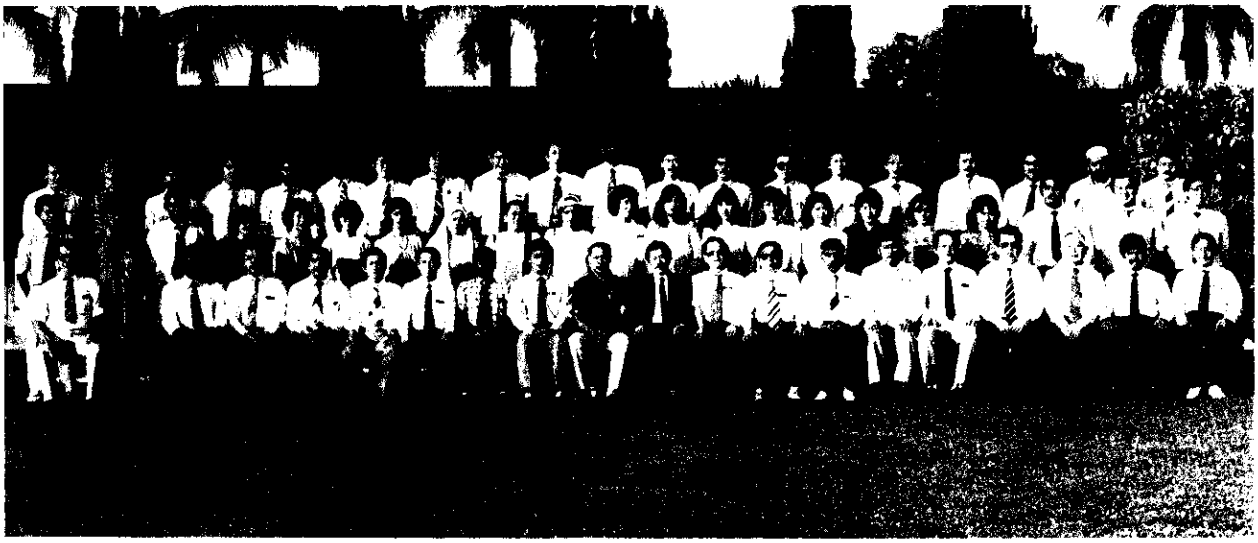
「どうして日本語の先生は　いつも走っているんですか。」とたびたび注意を受けるほど忙しかった。そこで立ち止まれば、もう先に進んでいけないほど心も体も忙しかった。広々としたキャンパスの中に三階建の教室棟と学生寮があり、13歳から18歳の男子学生がそこで学んでいた。小学校を卒業する前に全国統一試験を受け、そのなかから選抜された学生だけに入学が許可される全寮制の学校であった。入学したばかりの13歳の生徒は最初の1週間はしくしく泣く子もいたが、ひと月もたたないうちにすっかり学校になじみ腕白になっていった。うまくクラスコントロールが出来なかった私はしばしば高学年の生徒の助けを借りた。ひたすら授業の準備と実施。ひとクラス30人を8クラス、朝7時から夜8時まで　ずっとクラスを回っていたこともあった。優秀な先輩隊員の後を受け継いで、後任隊員が来てくれるまでの1年間、私は本当に孤独で何度も泣いたはずなのに、学食のミールブスの味しか覚えていない。

ルックイースト政策によって日本語が選択科目として導入された当時、生徒たちは全員イギリス留学を目指していた。また世界でも外国人向けの日本語教育を実施している機関は少なく、まして中学・高校生向けの教材はほとんどなかった。どうしたら、日本に興味をもってもらえるのか、いったい日本の何を伝えたらよいのかなど悩んでいる暇もなく、ひたすら休日は長距離バスで首都に出向き、他校に派遣されている隊員と教科書作成に向けて協議した。インターネットもなければパソコンもない時代の教科書作り。口を開けばお互いため息ばかり。けれども当時の私たちは、自分たちの作った教科書がやがて全土に広がり2,000名を超える高校生に使用されることになろうとは夢にも思っていなかった。

帰国して何年か後、トランジットでKLに立ち寄ったついでに、かつての配属先を見に行くことにした。タクシーでキャンパスまで行き校舎を見てすぐ帰るつもりだった。車のドアを開けたとたん、グラウンドの向こうから私の名前を叫びながら走ってくる女性がいた。かつての同僚だった。久しぶりの再会。この15年間、私はまったくなんの連絡もしていなかった。涙、涙で言葉にならない挨拶をして抱き合って泣いた。

この時初めて、私がここで2年間やってきたことの意味がわかったような気がした。

その後、いろいろな壁にぶちあたるたびに、この時の涙を思い出す。今、していることが良いか悪いかは、ずっとあとにならないと見えてこないのだということをルックイースト政策は教えてくれた。



with STAR Ipoh School Teachers in 1987

学生との関わりの中で起こる変化

吉田 真裕美
平成26年3次隊(日本語教師)

現在、私はクアラルンプールにあるマレーシア日本国際工科院(MJIIT)に日本語教師として派遣されています。この大学はマレーシア政府と日本政府の共同事業として、2011年にマレーシア工科大学(UTM)の一部として設立されました。

学生たちは1年の後期から2年の前期・後期までの1年半、週に3時間日本語を学ぶことが必修となっています。大学が彼らに求めている日本語能力は日本人教授やインターンシップ先の日本人と簡単な会話ができることです。この目的のための授業としては読み・書きより聞く・話すに重点を置かなければなりません。しかし、以前までは文法を学習するのみで会話練習を行うことができていませんでした。また、クラス外で日本語を使用する機会がないため、学習したものが身につかないという問題点もありました。そこで、その状況を変えるために私は活動をしています。

その活動は大きく分けて3つあります。1つ目は会話中心のチュートリアルクラスの運営、2つ目は授業外で日本語を使ったり、日本語について質問したりできるヘルプデスクの運営、3つ目は日本文化体験のイベント開催です。これらの活動を行うことは容易に見えて、いろいろ苦労することがあります。

その中でも一番大変なことは学生にモチベーションを与えることです。この大学の学生たちの専攻は工学ですので、実際日本語を学びたいと思って学んでいる学生は少ないのが現実です。派遣された当初はこのことを知らず、みんな日本語に興味があると思っていました。そのため、会話の例文を提供してそれを元に学生たちと会話練習を行うという単純な授業を行っていました。しかし、授業内でやる気のある学生とそうでない学生が明白になってきて、この現状を知ることになりました。

彼らのモチベーションをあげるために必要なことは日本に興味を持ってもらうことが一番だと考えました。授業外で日本文化体験の場を設けていますが、私の主な活動はクラス運営ですので、イベント開催の頻度は少なく、体験できるものも折り紙や浴衣の着付け、書道など準備しやすいものに限られてしまいます。そこでクラス内で会話練習の時間の他に文化紹介の時間を設けることにしました。お正月やひな祭りなどの年中行事、運動会や卒業式などの学校行事、東京タワーや浅草寺などの観光地に関するビデオを見せるようにしています。

これが彼らのモチベーションにつながったのかどうかは定かではありませんが、前よりみんなが積極的に授業に参加するようになりましたし、日本や日本語についての質問も増えました。また、日本でのインターンシップを目指し、日本語能力検定試験(JLPT)を受けるために勉強する学生も以前に比べて多くなっています。これは日本語教師、そして、ボランティアとして目に見える嬉しい変化です。

多くの隊員が口々に言うように2年間という時間はあっという間に過ぎていきます。私の任期も既に半期を終えました。この1年間で行ってきた活動をよりよいものにするため、また、私の派遣が終わった後も継続して行くことができる活動を考え、実行するために突っ走っていきたいと思います。

Japan Day という学校のイベントで学生たちが書道体験をしているところ(2015年12月19日:MJIIT建物前)

文法クラスで学習したことを復習しているところ(2016年3月21日:MJIIT教室内)

幼児教育

マレーシアにおける幼稚園教諭の活動は1980年4月から始まり、2003年4月に終了しました。この期間中に、連邦土地開発公団（FELDA）へは総勢46名（シニア隊員1名を含む）の隊員が半島及びサバ州に派遣されたことが特筆できます。1985年には最大21名の幼稚園教諭隊員がFELDAで活動していました。当時、FELDAは入植地における幼児教育に関する責任を担っていました。

また1984年からは連邦土地統合整備公団（FELCRA）にも保育士が派遣されるようになり、1997年までに14名が派遣されました。

当時マレーシアでは保育園は、託児所と捉えられており、保育所での生活習慣の指導や遊び等の指導も行われていませんでした。そのような中、ボランティアは子供の成長にあった生活習慣（食事・排泄・衣服の着脱等）の指導と保育園の意義や活動の紹介などを講習会の開催や教本作りなどを通じて行ってきました。

また、1980年当時のマレーシアの幼児教育は、様々な組織・団体（軍隊・教育省・地方開発省等）が独自のカリキュラムで幼稚園を運営しており、無認可の幼稚園も数多く存在していました。その頃の幼稚園は小学校に入学するまでの予備学校というイメージが大きく、教師及び父兄や保護者からは「読み・書き・算数」が大事とされており、幼稚園でも文字や算数等を中心に指導を行っていました。そのような中、ボランティアは一貫して「遊びながら学ぶ」の重要性を訴え、活動を行っていました。

FELDAにおける活動では、1984年にボランティアによるマレーシアではおそらく初の貴重な実態調査である「マレーシア幼児教育の考え方と現状」や「就学前教育カリキュラム」（マレーシア教育省）をベースとしてFELDA本部と全隊員の協力により作成した「新幼児教育参考資料集」が成果としてあげられます。

FELDAにおける11年の協力活動の一つのまとめとして1990年にはセミナーを開催しました。このセミナーを通じて、FELDAの幼稚園運営に関わる関係者・教育省・国立大付属幼稚園関係者等を対象に「遊びを通して学ぶことの重要性－幼児にあった指導法」を映像によって訴えたり、活動をデモンストレーションで紹介などを行い幼児教育の重要性について理解を深めることができました。

1991年には、幼稚園の管轄がFELDAから国家開発省社会開発部（KEMAS）へ委託されることとなったため、FELDAにおける隊員活動も終了しました。しかしながら、ボランティアと共に働いたFELDAの幼稚園及び幼稚園教員の質の高さは、その後各種評価においてKEMASからも認められることとなりました。

その後活動は農村開発省に引き継がれ、1995年~2003年4月まで3名のシニア海外ボランティア（早期幼児教育）が同省の社会促進局幼稚園課に配属される形で現職教員の指導に関わってきました。さらに同省が日本との協力により設立した幼稚園に協力隊員が配属され、モデル園となりました。

カンポン サヤ
フェルダ クマイ

石井 範子
昭和58年1次隊(幼稚園教諭)

私は1983年7月25日、同期隊員9名とともにマレーシアに到着しました。私はFELDA隊員と呼ばれていました。FELDA隊員には幼稚園教諭、野菜、婦人子供服、木工、きのこなど様々な職種がありました。

FELDA (Federal Land Development Authority) とは、マレーシア連邦土地開発公団のことです。この公団は、マレーシアがイギリスから独立する前年1956年に施行された土地開発法令に基づいて設立された政府系開発機関です。

FELDAは1スキーム(一つの村)をおおむね270家族(のちに、400家族)として、その開発地区内に、共同搾油工場、店舗、学校、道路、水道などの施設が含まれていました。私が活動していた1983年にはFELDAには220スキームあったと記憶します。

私の任地はパハン州FELDA Kumaiです。KLからマレー半島を横断、東に120kmバスで2時間、テメロで南に向かうトリアン行のバスに乗換えます。テメロから10km、20分ほどトリアンに向かって走ったところにある分岐点で下車、そこからは公共交通機関はありません。村に向かう一般車に相乗りし、山に向かいどんどん走ること15km、30分のところにありました。森の横にある静かで、のどかな、FELDA Kumaiです。村から分岐点までは公共交通機関はないため、任地に入ったら任地から出る方法がなく、慣れるまでは大変でした。

私の任地FELDA Kumaiは新しいFELDAでしたので、村には水道も電気もなく、もちろん電話もありませんでした。緊急の連絡は電報でしたが、届いた時にはすでにその用件は終わっていたことが度々ありました。日中は暑いですが、陽が落ちると風が涼しく、街頭もなく夜は満天の星、月がきれいでした。私の宿舎はスタッフハウスでしたので、夜だけは電気がありました。でも、我が家には冷蔵庫、洗濯機、TVはなく、電化製品は扇風機と日本から持ってきたラジオだけでした。料理にはケロシンストーブを使いましたが、自分ではほとんど料理せず、同僚のタイピストの家で御馳走になっていました。今でも彼女のマレーシア料理が食べたいと思う時がよくあります。

クマイの幼稚園で子供たちのワークショップ(1984年10月:FELDA)

活動は、赴任当初は幼稚園で各教室に入り、先生の補助をしました。子供達の容赦ないマレー語を浴びる毎日でした。赴任数か月後には先生方と毎日、10分15分の振り返りを行い、土曜日は先生みんなで雑談しながら翌週の準備を行いました。1年後くらいからは任地の周りにある7園の幼稚園の先生達と勉強会を月1回行いました。そして、各幼稚園を巡回し、勉強会のフォローアップ、学期休みには12園の幼稚園教諭を対象に勉強会も実施しました。勉強会の内容は、日常に使える、歌、指遊び、遊戯、ゲームなどから絵画指導、体育指導、年間計画、教案作成方法などでした。遊びを通して学ぶことの大切さを伝えました。勉強会は私がいつも話すのではなく、幼稚園教諭も自分の得意な分野を教えるなど先生が主体となるよう工夫しました。FELDAは生活環境が厳しく、水や電気がない園舎も多くあり、屋根はトタンで雨が降れば声が聞こえなくなり、登園しない子供も多くいました。窓を閉めると暑く、真っ暗になり何もできません。園舎の前に駄菓子屋があり、園児はおやつの時間になると買いに行っていました。幼稚園教諭は子供連れでの通勤など、今思えば、大したことではないのですが、当時の私には驚く出来事でした。

また、幼稚園教諭経験が3年しかない私には、協力隊隊員で定期的に集まり、指導活動集を作成することは荷の重い活動でした。自分の経験のなさ、知識不足を思い知りました。

活動を振り返れば協力隊として何ができたわけでもなく、反対に子供達、父兄、同僚の先生、カウンターパート、友人たちに助けてもらった2年半でした。私と接した園児がたとえ一人でも自分の子供に「幼稚園に日本人の先生がいて、楽しかったよ」と話していたら、それが私の活動の成果なのかもしれません。

マレーシアでお世話になったみなさんの幸せそして、マレーシアの発展を願っています。

FELDA幼稚園教諭のアンカーとして

坪川 紅美
昭和63年2次隊(幼稚園教諭)

Googleマップでマレーシアを検索していると、ゴムやパーム椰子の中に自分が住んでいたPalongの村々が映し出され、バイクで27園を巡回指導するため走り回っていた日々が懐かしく思い出されました。

幼稚園教諭として6代目であり、FELDAが規格化した園舎もあり、環境的には、初代の先輩隊員方が苦労した状況からはるかに整ってはいました。そして部屋にはゴミ箱が設置され、壁面には、折り紙等の作品が飾られ、積み木のような物もある。いたる所に、先輩方の足跡が残っており、先生方の意識も、人形を使うことは教育的に必要と感じていること、手洗いも必ず行うなど、10年の歳月によって大きく進歩していました。しかし、村人から、「クミお前は何を教えに来た？」と問われて「幼児教育の指導に来たの。」と答えても？が頭の中で飛んでいる状態で、現場の先生方は、授業を行うことをまず第1と考えていました。

このような状況の中で感じたことは、目に見える所から変わっていくが、目に見えない部分、例えば、遊びの大切さ、子どもの発達を見通すなどの視点は難しいがゆえに、最後まで残っていることを感じさせられました。現場は新しい教材作りを求めましたが、その教材を子どもにおろすことなく、定められたカリキュラムをこなし、新米の先生も古参の先生も日案は、一字一句同じで、日案を書き上げると、翌日の保育準備は終わったとみなされていました。

その中で見出した課題は、保育技術を伝えることよりも、先生方に保育の応用力をつけることが大切と、公開保育を開き、先生同士が意見交換をし、私自身も保育者として先生方に保育を見てもらい、たくさん突っ込まれながら、なぜ遊びが大切なのかをどうすれば伝えられるかを悩みながら活動していきました。ワークショップをコンプレックスごとに開き、その後のフォローアップに各園を回るということが後半の活動の中心となりました。また、日本で言う実習生使用の日案だったため書く内容を簡略化し、その分、教材の準備に当てられるようにしたいと、新しい日案のフォーマットを提案したりしましたが、そこで、FELDAの幼稚園部門がKEMASに移管され、全ての活動がストップすることになりました。

KEMASに移って勉強中心のカリキュラムとなり、先生方からこの内容では子どもたちには良くないと訴えられたことが昨日のことのように思い出されます。所属が変わってしまったがために、先生方のために何もできないことを申し訳なく思いながら、しかし、なかなか遊びの大切さが伝わらないと思っていたけれど、状況が変わることで先生方に遊びの大切さがしっかりと根付いたことへの悲しい喜びを感じるそんな幕切れとなりました。

技術専門委員の視察への同行

農業

農業分野へのボランティアの派遣は、1966年、青年スポーツ省セルダン農学校・ブンボンリ農学校・サバ州農業局農業事務所に初代隊員として、2名の野菜栽培隊員と2名の稲作隊員が派遣されたことに始まります。

当時のマレーシアの主要産業はゴム・錫・木材等の第一次産業で、農業面ではゴム・カカオ・油ヤシが主流で、換金のための野菜栽培は首都近郊で小規模に行われ、家庭においての自家菜園は果物が主でした。

これに対し、マレーシア政府は食生活、栄養改善のための野菜栽培（自家菜園の普及）を目的として「グリーンブックプラン」政策を打ち出し、教育現場（公立の小中高）においても野菜栽培が奨励されました。この様な状況を受け、JICAは1975年に連邦土地開発公団（FELDA）へ初めて野菜隊員3名を派遣しました。

FELDAは栽培技術の普及を促進する役割を持ち、州農業局、国家農業開発研修所（MARDI）等の応援を得て、市場性のある作物の栽培、市場の確保を進めており、政府の政策及びボランティアが派遣されたことにより、家庭菜園は普及するようになりました。

稲作隊員の活動は、稲の二期作をサバ州内に普及しようという目的で派遣要請があり、1966年の第一陣から継続的に派遣され、1986年頃まで続きました。食糧増産の為の二期作普及を目的とした活動を行いましたが、当時のサバ州内の稲作は、雨季に1回の栽培で「稲の二期作」はどこの村でも行われていませんでした。サバ州農業局から種籾や肥料の支援もあり、村人には初作目は自給用、二作目は販売用米であると理解して貰え、ある一つの村で試験的栽培を行いました。

その後「Paddy board」という公団が設立され、水稲の二期作について種籾・肥料の無償配布、田んぼの耕耘機貸し出しなどサービスがされるようになったので、個人農家も水稲の二期作実施が可能となりました。

当時のボランティアの派遣先としては青年スポーツ省、サバ州、クムブ農業開発公社、FELDAや連邦土地統合整備公団（FELCRA）が上げられます。また、小規模ゴム産業開発公団への派遣も行われました。なお、FELCRAへはスブラン・ペラ稲作開発プロジェクトが実施され、5名がチームで派遣されました。

その後、マレーシアの経済発展と共に農業も大規模化、ハイテク化を目指し、農業の機械化や管理運営面における改善と生産、食品加工分野などに重点をおくようになり、1990年にシニアボランティアの派遣が開始されると、農畜産物加工、流通、害虫駆除、農業一般として開発センターや訓練センターなどに派遣されるようになりましたが、マレーシアの工業化政策に伴い、農業分野へのボランティア派遣は少なくなりました。

思い返せば

古賀 正孝
昭和50年1次隊(野菜)
古賀(大野)田都子
昭和51年1次隊(野菜)

1975年8月15日私はマレイシアにやって来た。配属先はFELDA Jengka地区事務所社会開発部、この部門は入植者家族への社会生活向上のための支援、乳幼児福祉・衛生教育等いろんなプログラムを実施していた。このFELDA(連邦土地開発公団)は世銀から支援を受け、ジャングルを切り開き換金作物の油ヤシ・ゴム・ココ等を植え、低所得者層を入植、農場管理させる。一つの村の規模は400戸ほど、4000~6000エーカーの農場、Jengka地区は23村ありシンガポールと同面積であった。

FELDAの要請；FELDAが開発・植林(油ヤシ・ゴム)した農場に主にマレー系貧困家族を入植させ油ヤシやゴム農園を管理させる。作物の収穫が始まるまでの5~7年は入植者へ月額100リンギットの生活費補助がある。これで米、野菜、魚などの食費、生活必需品を賄うことになる。そこで生活費の節約に野菜だけでも自給できるようにと野菜栽培の隊員が要請された。またFELDA副長官アラディン・ハッシムの意向は、入植したばかりの新たな人生を歩む人たちに「鉄は熱いうちに打て」と、日本人から刺激を与え入植者の意欲・意識向上に協力して欲しいとのこと。

副長官と隊員(野菜・家政・木工)との3ヶ月に1回の会議での野菜隊員への指示は各任地で村をブロックに分け入植者と共にデモンストレーションファームを作り、全入植者を対象とし指導せよ。カウンターパートに人選してもらいながら数ブロックで畑を開き彼らと葉菜・果菜・豆類などを植えていった。しかし入植者の興味はすぐに薄れていき継続されなかった。全体に公平に指導する(種、肥料の配布)ことを止め村人の中から野菜を作りたい人、また実際に作っている人を指導の対象に変えていった。

このことをHQの会議で副長官に承認してもらうことに大変苦労した。駐在員(粕谷さん)・調整員にこの会議に入ってもらい不足がちな言葉を補って頂いた。自分たちの考えや、実績を示し会議を重ねていきようやく了解を得た。

さて今度は我々の力の見せ所、各自隊員の特長を出して行った。シンガポールへ野菜を出荷する者、採卵養鶏を始めるものと様々な結果を導いていった。

自分の場合は、村全体への地道な社会開発活動はFELDA職員に任せ、限られた2年間の中で成果を上げたいと言う気持ちが強く、やる気のある村人を応援することにした。入植地ではキャベツ1玉2リンギットと高いので数人とキャベツ栽培に挑戦した。

コタバル出身のおじさんとMohamatさんでスイカを作る。Matさんの黒皮スイカ割ってみたら中身がピンク、評判悪くKLから台湾種を導入し再挑戦した。トレーラーにスイカを山ほど積み各村に売りまわるほどになった。MatYusoffさんはインゲン、菜心、胡瓜、茄子を少しずつ地道に栽培し村内の店で販売していっ

トマトの誘引作業(雑誌から)

よくお昼をご馳走になった入植者の家の前で

た。野菜作りでもお金を稼げること、生活の足しにできることを示せた。

人を動かすにはやはりお金を握らせねば、口ばかりでは人は動かん。現状から一歩前に出れば次にまた欲が出てくる。もっと安定した収入をもとめる。野菜の売上でカブ号を買い野菜の引き売りを始めたり、店を出したり。野菜つくりで村人に動機付けをすることができたと思う。

入植以前のカンポンでの暮らしは飢える事はないが現金収入の道が少ない。そういう人々に国が土地と作物そして住居を準備する。山を開き換金作物の油ヤシ・ゴム・カカオを植え管理させ、数年後には一戸当たり10エーカーの農地を分配、その農場から収穫が始まれば、そこから20年で開発費用を返還させる。その入植村には農場管理を指導し、新しい村での生活指導する職員を配置し、この国策が成功するよう職員を教育・指導していくシステムがうまく機能していた。この国策に我々隊員が協力できたこと非常に嬉しく思います。

今でも悪かったなと思う失敗談、Jengka 9で Dato Hussein Onn首相を迎えFELDAの活動を紹介するプロジェクトが組まれた。村上（花木）、大野（野菜）と私3人もそれぞれ担当することになった。当日首相は油ヤシ農場見学が終わり、我々の畑に来られた。腕ほど大きくなった胡瓜や長いササゲを手に取られ、キャベツ畑に回ってこられた。着物姿の大野隊員が首相を畑の中に導き収穫方法を示し、首相自らキャベツを採ってもらった。首相へのお土産に村人が栽培した産物（スイカ・メロン・野菜数種）を送ろうとしたが、上司が店からの方が安心ではないかと話が出た。しかし、この村の人が作った野菜、スイカが熟れていようがいまいが食べてもらう、彼らの努力を贈ることが価値あると理解してもらった。このセレモニーが終わり、何時も世話になっているとなり村の人にキャベツ１個ヒョイっと採ってやった。解散後にこのことがきっかけで畑の野菜全て（キャベツ、胡瓜、ササゲ、メロン、など）持っていかれた、sapuされてしまった。大失態。

赴任して半年ほど、日本人の勤勉さを示そうと真昼何日間か鍬で畑を耕した。その後3日間熱射病で動けず。マレー人はなまけものとは言えなくなってしまった。

還暦を迎えた年赴任地を訪ねた。入植時の小さな木造の家はコンクリートのカラフルに嗜好を凝らした大きな家に建て変わり、家の前にはベンツやらBMWなどが並んでいた。入植者は農園のオーナーとしてインドネシア人を労働者として雇いtaukeになっていた。

帰りに同僚の里だったFELDA Sungai Buayaに行ってみた。もうFELDAの事務所もない、もう必要なくなったのだろう。プロトン・サガの工場が近くにできたとかですっかり様変わり、家を訪ねようにも以前のような開けた開拓地の感は全くなく、木々が生い茂り静かな住宅地になっていた。道沿いの家人に話を聞いてみたが同僚のことは分からなかった。Malaysia sudah maju ya！Oh ya sudah maju. と、言葉を交わした。

古賀農園サポ-タ-(応援団)による長ネギ播種作業

滴下栽培技術

佐藤 純一
平成18年SV(農業生産技術)

農業

農業省農業局の商品開発センター(Pusat Pembangunan Komoditi (PPK) Jabatan Pertanian)は、新しい農産物の普及や、その栽培技術の指導を行っている国の機関です。そこでクリーンな作業で若者に魅力がある、ハウス内で行う養液栽培の(滴下栽培、Fertigation、FertilizerとIrrigationの合成語)普及に力を入れ、高品質な日本品種のトマト、キュウリ、メロンなどの施設栽培技術導入のため、JICAに協力要請していることを知りました。

筆者は以前に、隣接するMARDI(Malaysia Agriculture Research and Development Institute)にプロジェクト専門家として参加した経験があったので、土地勘もあることから、早速応募し、2006年から活動しました。

当時、マレーシアのトマトは、中の種が多く皮も硬い品種で、またキュウリは、丸々と太って中の種がブツブツしているローカル種ばかりでした。桃太郎やスマートな節なりキュウリなど、日本品種の栽培を紹介すると共に、高品質の代表格でもある表面にネット模様のある日本品種のメロン栽培を通して、滴下栽培の施設改良や管理栽培技術の指導に当たりました。

ネットメロンは、1本の株に1個の果実のみを育てるため、自動施設による養液の正確な施用や、受粉や摘果、玉吊りなどの管理作業が多く、その指導はもちろんのこと、作業は毎日、1つ1つの株の面倒を見る作業が必要なことから、作物を会話しながら育てる農業精神(Farming mind?)の必要性も強調したものです。

受粉作業《日本では、飼育しているマルハナバチを、メロンハウスの中に放して受粉の媒介をさせる》(2007年)

ただ、ネットメロンのマレーシアでの市場状況については、やや残念な方向になっています。すなわち、マレーシアには日本のように、高品質な農産物をブランド化したり、品質をしっかり評価出来る卸売市場が無く、高品質メロンを受入れられる市場が発達していませんでした。一般にマレーシアの農産物の流通は、中間業者(ブローカー)が、農家の畑に出向いて買い上げる方式で、それも、糖度やサイズ、完熟程度など関係無く、目方で買い上げるため、手間ひま掛けた高品質メロンと、1本の株に2~3個以上成らせた末端の"うらなり"や、サイズだけ大きくなってまだ糖度が低い未熟メロンも、全部混ぜてRM/kgと安く買い叩きます。したがって現在は、未熟なネットメロンばかりが店頭に積んである状況になってしまっているようです。

技術の指導・普及について考えてみると、品質の良い農産物を栽培する生産場面での技術向上は必須であるが、普及には流通システムや販売の環境など、大きな枠組みの力をつくづく感じた次第です。

ネットメロンは一般に高価ですが、その味だけでなく食べる前から楽しむと、その価値を十分評価出来るのではないのでしょうか。ネットメロンの楽しみ方を紹介すると、

①見て楽しむ:ネットメロンは完熟で収穫しますが、食べ頃になるまで1週間から10日間の追熟が必要です(日本では食べ頃の日にちが示されている)。居間の目立つ所に花や置物の様に飾って、ネットの美しさを目で楽しんでください。

②香りを楽しむ:室温で5日目頃から良い香りが漂ってきます。特に、朝起きてベッドルームから居間に出てくると、これがメロンの香りだと感じます。

③食べてその美味しさを楽しむ:約1週間ていど飾っておくと、香りが少し強くなって来るので、お尻をチェック。指で押して少し柔らかいかなと感じたら食べ頃です。食べる3時間前に冷蔵庫に入れて、冷やして味わいます。スプーンですくって食べる場合、蔓のついていた頭の方から食べると甘みが増してゆくので、最後まで美味しく食べられます。

収穫したメロン(2007年)

障害者支援

マレーシアへの福祉関係ボランティアの派遣は、協力隊派遣開始10年後の1976年に作業療法士分野で派遣したのを皮切りに現在まで活動が継続されています。派遣当初から1986年位までは、施設を中心に、施設の衛生状態の改善、プログラムの充実、リハビリ機材や玩具などの充実のための活動を行っていました。1983年にはトレンガヌ州で福祉局によるマレーシアで初のPDK（地域に根差したリハビリテーションのマレー語）パイロットプロジェクトが開始されました。

マレーシア政府の障害者支援の強化政策（PDKプロジェクト）に呼応して、1986年頃から派遣者の数が急速に伸び、この時期には同時期に5－8名の隊員が各州の福祉局や福祉事務所に所属しつつ、PDKを実践する公私の施設に配属されて、指導者としての活動を行うようになりました。

1994年には福祉局から、PDK活動をマレーシア全域に広めるために、養護・理学療法士・作業療法士、各1名の計3名を各州に配置したいという計画が出されました。3職種同時確保は困難でしたが、各州に1人、いずれかの職種を派遣し州内にあるPDKを巡回する活動を行いました。

このような草の根レベルでの協力に加え、2005年からは障害者の社会参加を促すための政策、制度つくりを支援するための技術協力プロジェクトが3年間実施されました。ボランティア事業ではこのプロジェクトと協働する形で、障害者当事者派遣が進み、様々な障害を持ったボランティアを派遣しました。さらに2名の障害当事者が個別の支援者(必要なガイドや介助を行う人)付きでボランティア事業に参加することも実現しました。

また、その後、障害者の雇用促進や関連する各種政策やサービスの向上を目的とした、技術協力プロジェクトが2009年から6年間実施されました。ボランティアの派遣もそれに合わせ、リハビリ志向に代わって社会参加を直接支援する支援者として、ソーシャルワーカーや青少年活動隊員が派遣され、知的障害者の本人活動を支援する活動や、一般就労を支援する活動が多くなりました。

その後も技術協力とボランティアの連携により、地方でのジョブ・コーチ(職場での適応を支援する専門職)の人材育成、実施、障害理解を促がす障害平等研修の促進がなされ、全国レベルでの雇用促進と社会参加への取り組みを実施しました。全国のPDKで、多くの職員がジョブコーチ研修を受講し、就労支援を始めたことで、ボランティアも就労への取り組みだけでなく地域での社会参加と自立に向けた、様々な活動をカウンターパートと共に行ってきました。また教育現場では、就労移行のための教育の導入を提案する活動も始まっています。

CBRとの出会

久野 研二
平成3年1次隊(理学療法士)

私はH3-1の隊員として、1991年7月にサラワク州の社会福祉局に理学療法士隊員として派遣されました。当時あった障害児の早期療育プログラムでの活動でした。前任はVSO(英国のボランティア)が一人いて私の赴任時にもまだもう一名VSOの言語聴覚士が同じプログラムに関わっていました。

このプログラムの一環で地域社会に根ざしたリハビリテーション(Community-Based Rehabilitation: CBR)に関わったことが私の一生を変えるきっかけとなりました。その結果、現在もJICAの国際協力専門員として「障害と開発」に携わっています。

赴任前、私は日本の大学病院に勤め、急性期医療また多数の職種からなるチームリハビリテーションの一員としての仕事をしていました。それは今振り返れば障害者の方のある一部分にしか関わっていないものでした。しかし、CBRでは障害者だけではなくその家族や地域社会の人々の生活や人生そのもの全体と向き合うことが求められました。それはある意味自分の知識や経験の限界を思い知らされる体験でしたし、同時に医療という介入そのものも客観的・分析的に見直す機会となりました。それは私にとっては自分の行動の土台であったものがひっくり返される体験でしたが、同時にそれは新しい挑戦への刺激をくれるものでした。

JOCVの活動も延長し2年半の任期が終わった後、もっとCBRを知りたい。それも地域社会開発としてのCBRを学びそれを実践できる人になりたい、と思い、当時そういう地域社会開発型のCBRとして有名だったインドネシアのNGOに入り現地で2年半活動しました。この時は現地のNGOの職員となったので、給与は月120ドル(当時1ドル78円まで円高ドル安となった時でした)だけだったので協力隊以下の生活でしたが、それはそれで楽しいものでした。

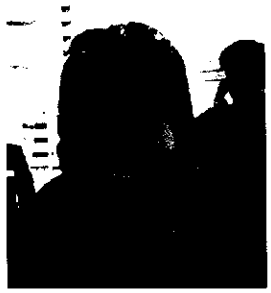
その後、サバ州にあるスリムンガシセンターというNGOがCBRを開始したいという要請があり、JICAの事業として始まった特別短期緊急派遣の1回目の派遣でこのセンターにJOCVとして2回目の赴任をすることになりました。その後留学などを経て、JICAの企画調査員や専門家などとして、結局マレーシアの「障害と開発」に15年以上関わることができました。

この体験からの学びを「リハビリテーション国際協力入門(三輪書店:2004年)」としてまとめましたが、その1章でJOCVが直面する様々な失敗場面(しかしそれが重要な学びの機会でもある)を含んだ"物語"をまとめていますが、これは自分がマレーシアのJOCVで体験したものがベースとなっていて、それだけ私にとっては学びのあるものでした。この失敗と学びは、今JICAの専門員として世界中で実施している「障害と開発」関連のプロジェクトに還元することができています。

協力隊の活動:障害児早期療育プログラムでの活動(1992年: サラワク州クチン)

JICA専門家としてマレーシアのプロジェクトでの障害平等研修ファシリテーター養成講座
(2015年: クアラ・ルンプール)

再びのマレーシアにて



川上 かよ
平成25年3次隊(障害児支援)

私は縁あって、シニアボランティアとしてマレーシアに2回派遣させてもらいました。障がい児支援という職種です。1回目はペラ州タイピン、2回目はマラッカ州マラッカでした。配属先は違いましたが、活動自体は大差なく、地域の学校の中の特別支援学級を巡回し、現地の先生方と協働しながら特別支援教育のレベルアップを図ることでした。また、先生方や保護者対象に研修会やワークショップを開催し、障がい児者理解にも取り組みました。勿論文化交流も大切な活動の一つでした。

私がなぜもう一度マレーシアを希望したのかと申しますと、1回目派遣の時、任期もあと半年という時期に、特別支援教育に携わっている方や保護者に向けて、障がい児者理解につながるリーフレットのようなものを作成して配布したいと思ったのでした。しかし半年で実現するはずがないと判断し、断念し帰国しました。でも1年たってもその事が心に引っかかっており、結局再度応募したという次第です。

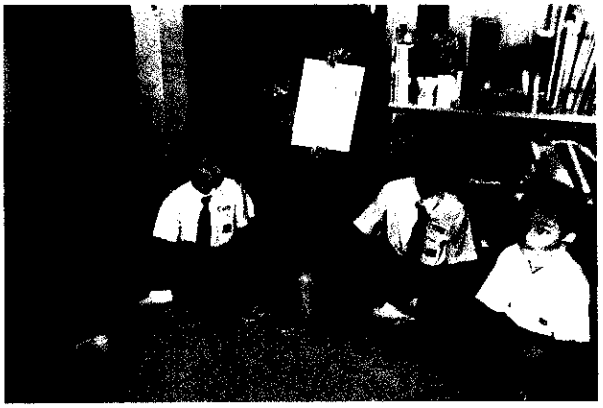
1回目の経験から、今回はカウンターパートに自分の考えや思いも素直に伝え、じっくりと話し合い、二人三脚で取り組んでいきました。例えば上記のリーフレットについても話し合い、任地のニーズとすり合わせ乍ら進め、最終的には「支援学級で使える手作り教材集」を、任地の先生方と協働で作ることが出来ました。作成に当たっては、紆余曲折しながらも、帰国1週間前に完成しました。現地の先生方やカウンターパートの協力なしでは完成できなったと思います。私の考えていたものとは少し違いましたが、任地のニーズに沿っていればこそ、本を手にして下さるであろうし、授業にも役立ててもらえると思います。ミニ教材集なので、50個しか載っていませんが、この本をきっかけに先生方が連携しながら、子ども一人ひとりの困難さに沿った教材を更に工夫して作ってくださることを願っています。

さて、人それぞれ違うと思うのですが、私の場合、活動させてもらう中で無くてはならぬものの一つに「福祉分科会」がありました。これは、先輩隊員の皆様が立ち上げた、自主サークルのようなものです。主に、福祉部門・医療部門・教育部門の職種のボランティアで構成されており、年に数回持たれました。其々の活動報告や研修会、ワークショップ、交流会、協働活動、活動参観等々…。任地では一人ぼっちで、迷ったり、悩んだり、行き詰ったりすることも多かったのですが、この会に参加させてもらうことによって、数えきれないくらいのヒントやアドバイス、そして何より安心とやる気と勇気をもらいました。私が活動を最後まで全うすることが出来た背景にこの「仲間」という大きな支えがあったからだと確信しています。

最後になりましたが、このボランティア経験で学んだことを財産に、これからも生涯現役で(ただし、自分のペースで)これからも歩んでいきたいと思っています。

ありがとうございました。

"dengan ippei"配属先の方と



支援学級の児童への指導風景

環境教育

環境分野は大きくわけて、自然環境の保全活動に関わる自然環境保全分野と廃棄物管理など生活環境に関わる環境管理分野に分けることが出来ます。

自然環境分野へのボランティア派遣は、森林の持続的な管理や生態系調査といった形で1980年前後からサバ州森林局に派遣されたことに始まります。ボルネオ島は世界的に重要な自然資源の宝庫として知られ、サバ州ではキナバル国立公園が、サラワク州ではグヌン・ムル国立公園が世界自然遺産に登録されていますが、一方で森林資源はマレーシアにとって重要な輸出資源として今なお重要な地位を占めており、この森林を保全し、持続的に活用してゆくためにボランティアの派遣が1990年代前半まで続けられました。
また、このような貴重な自然環境を活用しサバ州及びサラワク州では観光に力を入れており、エコツーリズムの観点からも環境保全が必要とされ、環境教育を中心とした多数のボランティアが1990年後半からこれまで派遣されてきました。また、ボルネオ島を中心として森林局、公園局、野生生物局や地方自治体など様々な組織においても、生態系保存、エコツーリズム促進、マングローブの保護等に関して住民への啓発活動や自然や文化を活用した生計向上等を行うボランティアが継続的に活動を行っています。

一方、環境管理分野においては、マレーシアでは、1960年代後半から外資導入による急速な工業化を進めた結果、1970年代以降、社会の発展に伴う家庭廃棄物の急増などの社会問題が顕在化してきました。これに対し、JICAでは技術協力プロジェクト等により、廃棄物管理やリサイクルによる廃棄物の減量への取り組みを支援してきました。また、これら技術協力プロジェクトと並行する形でボランティアでは環境教育の一環として市民レベルでの廃棄物の適切な処分に対する啓発活動を推進してきましたが、2000年代半ばからは、廃棄物管理や廃棄物処理への支援を主目的としたボランティア派遣を開始し、草の根レベルでの活動を強化するようになりました。
なお、マレーシアでは2015年9月から家庭のごみの分別回収が義務化されたことに伴い、有価ごみの有効利用も始まりつつあり、ボランティアも３Ｒキャンペーンや有機ごみのコンポスト化などへの協力を行っています。現在、町中に有価ごみをカンやビン、紙などに分別して回収する３Ｒステーションの数も徐々にではありますが増えてきています。

熱帯雨林保全の現場で学んだ グローカルな協働の大切さ

二ノ宮リム さち
平成10年2次隊(環境教育)

1999年1月、私は、憧れのボルネオでの二年間に心躍らせながら、マレーシア初の「環境教育」隊員としてサバ州森林局に赴任しました。

「環境教育」という分野、JOCVの職種として新設されたばかりの当時はもちろん、今も「なにそれ？」という方も多いかもしれません。廃棄物、自然環境破壊、気候変動といった環境問題の解決や、よりよい社会の実現へ向けて、行動する「人」を育て支える活動ですが、扱う問題・テーマも対象・方法も幅広く、同じ環境教育隊員でも国・機関・地域等によって、いろいろな活動のかたちがあるようです。私の場合は、サバ州森林局普及啓発部で、現地職員や先輩の映像制作隊員とも協力して、森林保全に関するパンフレット作成、展示会での出展、ポスターコンクール開催、学校での出前授業、森林ギャラリー整備などに取り組みました。特に、サバ州の主要産業としての林業を支えた森が、無計画な伐採やプランテーション開発などにより破壊されてきたことを踏まえて、森林の適切な区分や状況把握、環境保全型伐採方式などの導入・徹底による「持続可能な森林管理」に舵をきろうとする森林行政について理解を広げることが求められました。

地球の肺とも呼ばれる熱帯雨林と多様な民族の文化に恵まれた、私にとってまさに憧れの地、ボルネオで、「熱帯雨林をまもる！人々の暮らしをよくする！」と妙に力が入り、未熟さ故の生意気と根拠のない自信に満ちていた自分を思い返すと冷や汗が出ますが、森林局のみなさんは、一緒に出版物や掲示物を作ったり、時には何時間もかけて森の奥まで連れて行ってくれたりと、気にかけ協力してくれたのでした。

赴任後、驚かされたのが、森林局の環境教育施設「Rainforest Interpretation Centre（現在は Rainforest Discovery Centre: RDC）」のすばらしさ。工夫をこらした展示や、森林の中を歩くトレイルが整備され、意欲的でアイディアにあふれた所長をはじめとする精鋭スタッフが、子どもたちや学校の先生から、プランテーション企業のリーダーまでを対象に、さまざまなプログラムを実施していたのです。そうした活動に参加させてもらいながら、「途上国だから何もかもが遅れているにちがいない」という偏見を本当に捨てて、学ばせてもらうこと、協力させてもらうことの大切さを学びました。

「環境教育」は、そもそも短期間で成果が見えることの少ない仕事ですが、私が二年間活動するなかでも、森林保全という大きな目標につながる手ごたえを感じることはなかなかできませんでした。活動の終わりを迎えた私は、自分の非力を反省すると同時に、「問題を解決する主役はそこに暮らし続ける人々。私自身は足元の問題について何ができるだろう？」と考えました。満杯の廃棄物処分場、荒廃する人工林、最近では放射能汚染…日本にも多くの環境問題があります。まずそれらに向き合うこと、そして各地のローカルな取組が先進国・途上国の境なくグローバルにつながって、よりよい未来へ向けた「グローカル」な協働が広がる、そんな将来を思い描きました。

帰国から１５年が経ち、私は今、日本の大学で「環境教育」、そして視野を社会・経済などにも広げた「持続可能な開発のための教育」に取り組んでいます。マレーシアをはじめとするアジアの大学との交換留学事業にも携わってきました。日本とアジア地域の学生が、お互いに刺激を受けあいながら成長する様子をみていると、当時思い描いた、人々や取組がグローカルに広がりつながる未来が実現しているようで、感動します。先述のRDCも、今では（その後RDCに配属された環境教育隊員のみなさんの尽力で）日本の環境教育団体と共同でプログラムを実施し、学びあいを進めています。

昨年、上司として活動を励ましてくれたPuan Masniah Hj. Othmanが急逝されました。当時、若いリーダーとして周囲に信頼されていた彼女は、私がこれまで出会った中で最も尊敬する上司の一人でした。この場を借りてご冥福をお祈りするとともに、彼女をはじめとする素晴らしいマレーシアの人々との出会いに、あらためて感謝いたします。

森林火災防止や森林公園に関するパンフレット～ 一緒に作成した同僚職員と（1999年：サバ）

環境教育プログラムに参加した高校生たちと（1999年：サバ）

3Rを実践するために

塚本 真衣
平成26年4次隊(環境教育)

2015年9月より、マレーシアでもゴミの分別が始まりました。半島マレーシアの6つの州と2つの都市で行っています。マレーシアの分別はとてもシンプルで、リサイクルできるゴミを、紙・プラスチック・その他の3種類に分けます。この3種類に分けることでも、「なんで分別しなきゃいけないの？」、「業者がやればいいじゃない？」と不満が出ているようです。また、制度が導入されてからすでに半年が経つものの、ゴミの分別が制度化されたことを知らない人が多く、周知・啓発活動の課題が残っています。

私の配属先である、SWCorp(廃棄物管理公社)は、廃棄物処理を管轄する機関です。私は社会教育部にて、ゴミの分別を含めた3Rに関する啓発活動を行っています。学校や地域コミュニティ、企業での講義や展示会を通じて、3Rの大切さとゴミの分別の必要性を伝え、人々がゴミのことを考えて行動できるようになることを目的としています。私はその中で、日本の取り組みや自身の経験について話をしています。マレーシア人は「日本はきれいな国」というイメージを持っており、興味を持って私の話を聞いてくれます。

そもそも、なぜ今マレーシアで3Rやゴミの分別が必要なのでしょうか。マレーシアでは、ゴミのほとんどを埋め立てしています。人口増加と経済発展に伴い、政府の予測を上回るスピードでゴミの量が急激に増えています。そこで、ゴミの処理費用の削減と処分場の延命を主な理由に、ゴミの分別が始まったのです。

私は、マレーシアに来た当初、マレーシア人の大学時代からの友人に、マレーシアでどんな活動をするか話をしました。その時に、「環境教育は、今のマレーシアにとって、とても重要だよ。でも、すごく難しいと思うよ。重要性はわかっても、やるかな？」と、みんなに口を揃えて言われました。3Rやゴミの分別について話をすると、生活に密接に関わっている事柄なので、しっかりと聞いてくれる人が多いです。しかし、「話を聞いてわかる＝実践する」には必ずしもならないということを痛感しました。例えば、地域コミュニティでのゴミの分別のイベントを行い、講義をしたのにも関わらず、ゴミ箱の表示をしっかり確認せずに異なる種類のゴミ箱に入れたりしていました。話を聞いてもらうだけではなく、自分がどのような行動を取っているのか、それが正しい行動かどうかを考えてもらわなければいけません。そして、自分の行動を改めようと思い、実行してくれなければ何も変わりません。さらにそれを毎日続け、習慣化させる必要があります。講義や展示会は1回きりのことが多く、その後、人々が果たしてちゃんとゴミを分別してゴミ箱に捨てているか、ゴミを減らそうとマイバックを持ち歩いてくれているのか、実際のところわかりません。習慣化できるまで継続的に行える方法を考えることが、これからの取り組みのポイントになると感じています。

そこで、私は「まずは身近から」と思って、自分の身で実践している姿を見せるようにしています。職場では、リサイクルできるゴミは必ず分別ゴミ箱まで持っていく、ご飯は残さず食べる、買い物用マイバックを持ち歩くなど、小さいことですが、これも積み重ねだと思っています。私の任期は2年と限られています。私の配属先の同僚や友人の考え方・行動が変わり、彼らが実践し示していくことで、より多くの人々に影響を与えてくれたら嬉しいです。

コンポストに関するアクティビティを実施　講義で習ったことを復習

ゴミに関する講義の後、生徒たちとの交流

多様なニーズの多民族社会

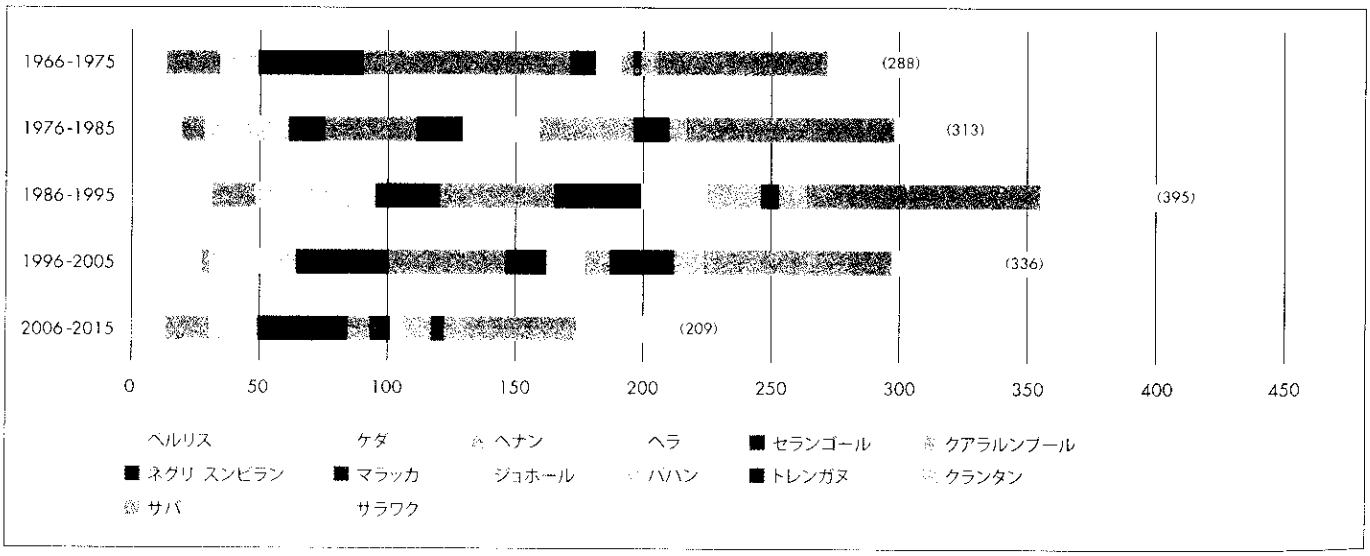
・ペルリス
・ケダ
・ペナン
・ペラ
・セランゴール
・クアラルンプール
・ネグリ スンビラン
・マラッカ
・ジョホール
・パハン
・トレンガヌ
・クランタン
・サバ
・サラワク

Chapter

IV

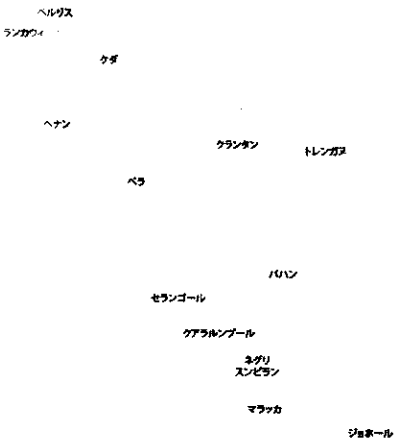
<地域別協力隊員>
派遣累計マップと表(3)

	ペルリス	ケダ		ペラ					ジョホール					サラワク	Total
1966-1975	5	8	21	15	41	81	4	6	10	5	3	7	66	16	288
1976-1985	6	13	9	33	14	36	14	4	30	37	14	7	81	15	313
1986-1995	1	30	17	47	25	45	30	4	26	21	7	11	91	40	395
1996-2005	5	22	3	34	36	46	10	6	15	10	25	12	73	39	336
2006-2015	1	12	17	19	35	9	0	8	5	11	5	10	42	35	209
Total	18	85	67	148	151	217	58	28	86	84	54	47	353	145	1541



※ 1966年-2015年

Perlis
ペルリス州



大切な場所フェルダ "ツブ・チュピン"

高澤 栄子
昭和59年2次隊(幼稚園教諭)

私が配属されたのは、ペルリス州にあるフェルダ"ツブ・チュピン"(以下チュピン)だった。ペルリス州はマレーシア最北で最小の州。隣国タイと国境を接しており、当時は、カワサンヒタム(危険地域)とよばれるほど、タイ共産党ゲリラの出没、毒蛇の多いことでその名を全国に知られていた。

KLからチュピンまでは車で一日がかりだった。迎えに来てくれたカウンターパート(以下CP)たちと、朝早くドミトリーを出発したものの、チュピンに着いたのは夜も更けてからで、周囲を見渡しても暗闇が広がるばかり。心細さでいっぱいだった。

わが家には小学生もよく遊びに来ました　一緒に折る折り紙が楽しみだったようです(1985年8月：フェルダ ツブ チュピン)

今日は運動会　先生たちも子どもたちもはじめての経験です(1985年10月：フェルダ ツブ チュピン)

翌日、"ここが住まい"と案内された職員住宅には、2ヶのドラム缶と中古の冷蔵庫を準備してくれていた。けれど、水道はあっても常時出ない水に、電気は夜だけの自家発電。そんな状況がわかってきたのは数日後で、ドラム缶は大切な生活用具だったのだ。

CPの名前はCik Fatimah。チュピンの生活向上や改善指導が本来の仕事だったので、当初から彼女は私を、近隣フェルダの婦人たちの集まりや研修会、宗教行事など、いろいろな場所へ連れて行ってくれた。彼女の行くところ私ありで人々との友好も深まった。

おかげで短期間のうちに名前と顔が知れ渡り、チュピンを拠点にペルリス州とケダ州にあるフェルダの幼稚園を巡回し、現場の先生たちへの講習や研修を行なう私にとって、それらの活動がしやすくなったのはいうまでもない。

チュピンは数あるフェルダのなかでも唯一のサトウキビ生産地。職員数も多く、トラクターの修理工場もあって、この工場で、鉄棒やジャングルジムなどの遊具を作ってもらうことができた。ほかにも、砂場や古タイヤ利用の遊具など、"幼稚園を楽しいところに"と提案したことのほとんどを実現できたのは、CPをはじめ周りの人々の理解と協力があったからこそ。チュピンの人々に助けられての私の仕事だった。

現場の先生たちには、子どもたちが楽しく遊べ・学べるように、教材や教え方など自ら工夫する力を身につけてほしいと願い活動した。私はその工夫のいろいろを伝授。音楽や運動も積極的に取り入れ、先生たちのやる気が育っていくことに重点をおいた。

玉入れの玉作りなど、準備段階から保護者にも手伝ってもらい開催できた運動会。かけっこやラササヤンの音楽に合わせて踊ったダンス、先生たちが考えた種目もあって、運動が苦手だった先生たちの奮闘ぶりが今も目に残っている。

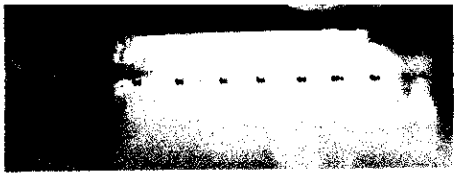
今回、JOCV派遣50周年記念式典への出席を機に、30年ぶりにチュピンを訪ねた。フェルダが運営母体だった幼稚園は公立化され、新たな場所に立派な幼稚園が建っていた。当時いちばん若く、しっかり者だった先生が園長として活躍していて、感激の対面となった。

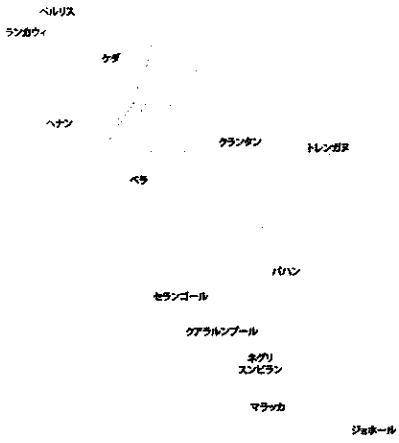
子どもたちが涼しい木陰で遊べるようにと、JOCVの支援で園庭に植えた苗木。元の場所で大きく育ちいっぱいの葉を茂らせていた。他の木は切られていたけど1本だけ残してあったその木は、"これはEikoが植えた木"と残しておいてくれたのだろうか。

CPとも再会できた。彼女からの連絡で、すでに定年退職し近くの町に住んでいる元職員や友人たちが集まってくれ、30年前がつい昨日のように思われた。

ペルリス州はイスラム色の強いところだったが、文化、宗教、習慣などの違いを違いとして認め、丸ごとの私を仲間として受け入れてくれたチュピンの人々。チュピンで過ごした2年間は、いつまで経っても私の大切な「たからもの」だ。

Kedah
ケダ州





ケダの思い出

石本 馨
平成7年1次隊(作業療法士)

ケダ州といえば広大な田園風景。私の配属先は州都アロースターにあるケダ州福祉局で、11か所(1995年当時)のP-PDK(Pusat Pemulihan Dalam Komuniti：地域に根差したリハビリテーションセンター)を巡回指導していたので、バスで州内くまなく移動する毎日だった。夜明け前に自宅を出てバスターミナルまで歩き、始発のバスに乗ってP-PDKに行く。車窓から見える遠くの山並みと日の出、眼下に広がる田園風景がきれいで、見るたびに眠気が吹き飛んで、「さあ、今日もがんばるぞ！」と思えたものだ。ほぼ毎日、時には100km以上をバスで移動していたが、車窓から見るケダの風景は見飽きることがなく、長い移動距離も苦にならなかった。

ケダ州福祉局には、私と、同時派遣の養護隊員が初代隊員として派遣された。ケダ州はマレー系住民が7割近くを占め、職員もP-PDKに来る子供たちもほとんどがマレー系。赴任当初は職員のほとんどが若い女性で、自分の仕事に自信を持てない人が多かった。また、開設間もないP-PDKはまだ地域になじんでおらず、時には近隣住民からクレームが来ることもあった。活動では職員と一緒に障害を持つ子供の家を訪問することも多かったが、農村部のP-PDKの職員の中には村からほとんど出たことがない人もいたので、最初は私のような外国人と一緒に歩くのも戸惑う様子だった。

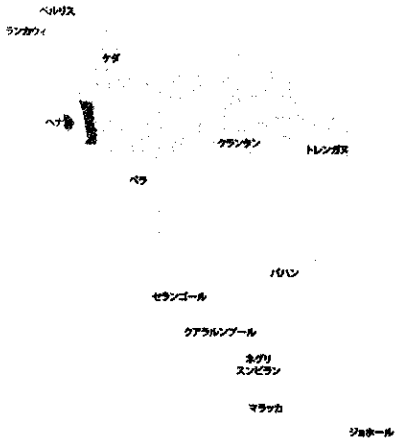
そんな状況から始まった活動だったが、「職員も子供たちも楽しく過ごせる場づくり」と「地域の人にもっとP-PDKを知ってもらう」ことを念頭に、日常の活動プログラム作り、オープンハウス等での広報支援、地元の保健師と共同での活動、他のP-PDK職員と情報交換する機会の提供、などを行った。自分の活動中は目覚ましい変化は見られなかったが、隊員の派遣は10年程続き、後任隊員の活躍で、現在では地元の企業や関係機関とも連携する、地域に溶け込んだP-PDKになったと聞く。後任隊員の活躍は人づくりにもおよび、私の赴任時には自信なさげに仕事をしていた女性職員が、今では子供たちの親にも地域住民にも信頼される存在になった。職員の成長が一番の派遣効果と言えるだろう。ひとりひとりの活動は小さいものでも、それが集まることで大きな成果につながるのだと実感した。

今から振り返ると、自分の活動は多くの人に支えられていたと、改めて思う。同僚やP-PDKに来る子供たち、地元の方々、上司など、右も左もわからない外国人を嫌がることなく受け入れてくれたことがありがたかった。また、同じケダ州に派遣された同期・先輩・後輩隊員の存在が精神的な支えになった。いつも明るく、前向きな彼らのおかげで、任期を全うできたと言っても過言ではない。現地の人も隊員も仲良くなれる、そんな距離の近さがケダの特徴といえるだろう。

P-PDKでの活動の様子(1995年10月：ケダ州ヤン地区)

P-PDKの遠足で子供たちと水浴び、左から2人目は同時派遣の新居真由美隊員(1996年：ケダ州ヤン地区)

P-PDKが運営する雑貨屋。売り子さんはP-PDKに来ている生徒で、近所の幼稚園児と親が買いに来る(2005年：ケダ州メルボック地区：任期終了後に訪問)



ペナンにて

浅野 善博
平成23年3次隊(理数科教師)

若かりし頃自転車旅行で立ち寄ったことがあるペナン島に懐かしい思い出と共に到着。RECSAMのドライバーさんが迎えに来てくれていた。配属先はASEANの教育省が理数科教育の質向上を目的に設立したセンターで研修部、研究部、宿泊部に分かれている。私は研修部に配属となり、主に小中高の数学と理科の現役教師の研修指導に携わった。カウンターパートはレイ・クアン氏。ニューズ・ウィークの表紙を飾ったこともある聡明でアジア人らしい細やかな気配りをしてくれる女性で、職場の要として多忙な仕事をこなしつつ2年間私に適切なアドバイスをして下さりました。13名の同僚はマレーシア国籍者と外国籍者が入り混じったバラエティーに富んだ構成で、私もストレス無く溶け込み気楽な日々を送ることが出来た。活動はASEAN諸国教師の研修を企画実施するのであるが、時としてJICAとのコラボでアフリカ、南アジア、西アジアの教師の研修も行う。特に理科の研修は実験の講座を担当して毎回ワクワクしながら多様な生徒(?)達とエキサイティングな時間を共有できたのは幸せ至極。

インドネシアの中学校の数学教師を対象とした数学のトレーニング風景
(2013年11月7日:ペナン)

マレーシアの中学校の理科教師を対象とした理科実験のトレーニング風景
(セルフタイマー)(2013年11月11日:ペナン)

ペナン州は人口160万、島は75万、内日本人3500人、中には福島原発事故から逃れきた母子も・・。観光客は年間280万。が現在、東洋の真珠と呼ばれた過去の状況とはかけ離れており、海の汚染は目を覆うばかり。同僚との雑談時も、高度な下水処理施設の拡充が急務であるのだが・・とため息が聞こえていた。ペナン島は多様な人種構成を反映してレストランの種類も多様である。特に中国系の人口比が大きさを反映してか、中華レストランの質と数は特筆に値する。年間を通して最高気温は30°以上。ムッタリとした暑さではあるが、海風がそれを和らげてくれる。私は時々現地の学校に出前授業に行ったが、出っ張った屋根の梁が直射日光を遮り、窓からの風で教室はクーラーが無くても十分快適であった。しかも、この暑さのお陰であの果物・・ドリアンが旨い。猫山(MAOSANG)なる品種はペナン名物で奥深い味は絶品。是非一度お試しを。

混じり合わない3民族(マレー系、中国系、インド系)で構成される多民族国家のこの国に住んでみると、随所で軋轢も見受けられた。2013年の国政選挙ではペナン島に於いては与野党間の鬩ぎあいも激しく、信じられないような噂も度々耳にした。しかし、軋轢を回避すべく日々の細かい努力もなされている。RECSAM全体では100人程度の職員がいるのだが。毎月講堂で会合を開き、その月が誕生日の職員を祝いその後パーティーを開き交流を促す、1年に1度は職員全員で1泊旅行に出かける、等々何かあるごとにパーティーを開き意識的に交流の場を持つ。日本人の私にはえらく煩わしいことであったが彼らは意識的にこれを行っているようであった。幼稚で悪質なヘイトスピーチ等にでくわすことは無く、それを容認する様な国から来た私の目からは現状を直視した生活者同士の地道さが見て取れた。

私の活動がRECSAMに於いて何か根付いたものがあるかどうかは分からない。ただ、2年間私が彼の地でワクワクした日々を送り、同僚や各国の現職教師と交流を通じて、少しではあるがお互い楽しみながらシンパシーを持てたのではと思う。

ペナンの高校で出前授業を行った時生徒との記念撮影(2013年3月7日:ペナン)

Perak
ペラ州

ペラにいた頃

小田島 成良
昭和61年2次隊(稲作)

ペラ州はマレー半島西海岸の北部に位置しています。30年以前の当時は隊員が州内に多く配置されていたこともあり、ペラの豊かな自然の魅力を多く発見する機会に恵まれました。特に深い熱帯雨林を切り拓いた私の赴任地スブランペラは凄かった。何しろ赴任当初は農園内にまだ野生の象がいたくらいです。ドリアンの開花時期ともなると、花蜜を求めて翼長2mにも及ぶオオコウモリが大空を埋めて飛来しました。夜になると、開拓地内を縦断する高速道路上に大蛇がうっとりと寝ている。そこへすっ飛んできた車が大蛇に乗り、跳ね上げられる。ペラ川と支流にはワニがウロウロしているので、小舟に乗る時は鶏を一羽持つことが常識、などなど。こうした話は隊員仲間の誰にも信じてもらえませんでした。誰でもいつでも見られるものではなかったからです。私たちが発見したペラ川沿いの蛍の群棲だけは、私たちの紹介で多くの邦人や外国人が観察に訪れました。新月のペラ川の支流を遡上すると、蛍がさながら電飾のトンネルの様に瞬き私たちを迎えます。後年、これがマレーシアを代表する観光資源として世界に紹介されたことはみなさんもご存じでしょう。

こんな魅力的なペラ州には、1990年前後の一時期は二十名を超える隊員が配置されていて、半島部で最大の勢力でした。1990年には、この勢力を活かして隊員主催の餅つき大会をスブランペラで開催しました。隊員、JICA職員、大使館、配属先総出のお祭りです。入植地の人たちは初めての餅、茶会、芸能、隊員の屋台に大いに盛り上がりました。辺鄙な開拓地の開催に不安もあったのですが、仲間と配属先の協力に支えられた成功でした。

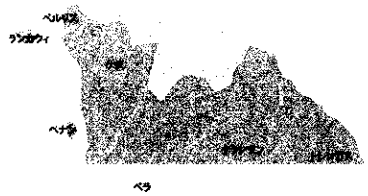
私が赴任したのは、ペラ川河口域に連邦土地統合整備公団(Felcra)が開拓した入植地スブランペラです。田んぼの地平線に陽が沈む様なところです。此処では水稲圃場4,600㌶を油椰子やカカオ同様に直営方式で管理していました。水稲にとっては世界的にも珍しい管理手法ですが、Felcraは敢えて直営に挑戦したのです。当初私は単独で派遣されたのですが、その稲作規模の大きさから関連専門分野を網羅した隊員の活動を計画して進めました。Felcraの受入れ態勢がしっかりしていて圃場環境も整いつつあったので、隊員にありがちな活動以前の問題に煩わされることは少なかったと思います。赴任から3年足らずの1988年になると収量が国内平均の2倍近くに増収し、マレーシア中の稲作関係者が驚くことになります。この成功要因は、圃場基盤の完成と直営管理の安定化が進む時期に技術的な改善が効果したことです。私たちが直営方式を意識した提案を行ったことが、技術的な改善の部分に多少なりとも貢献したのでしょう。又、カウンターパートや助手を計画的、継続的に本邦研修へ派遣したことは、隊員派遣終了後の人材育成に貢献したと考えます。当時のカウンターパートや助手職員とは、30年経った今でも稲作の情報交換を行い、相互に往来する関係が続いています。91年のグループ協力終了を最後に、マレーシアに於ける稲作分野の協力が終わりました。

協力隊活動を通じてペラ州任地の人々と共有した時間は僅かですが、今考えるとペラ州での協力隊経験は私の出発点となりました。その後様々な国で多くの人たちと共に同様の活動を続けてきましたが、初めの国マレーシア、ペラ州、出会った人々があっての活動だったと思います。マレーシアと日本の仲間がペラの地で出会い共有しあった時間こそ奇跡であり、いまだ色あせない協力隊の日々です。

餅つき大会(1990年12月:ペラ州スブランペラ)

隊員通信編集作業:ペラ会の編集委員が集まって作業中
(1991年5月:ペラ州テロインタン)

積み上がった籾袋:そのまま出荷される



ITMの遠い日々

若木 仁
昭和49年2次隊(日本語教育)

Selangor州からKuala Lumpur(以下KL)がFederal Territoryとして分離した年、1974年10月に新州都Shah AlamにあるITM(Institut Teknologi MARA)の語学センターに4代目日本語講師として赴任し、以後3年間日本語教育に携わった。ベトナム共産党革命の前年で、KL、Ipohの郊外でマラヤ共産党兵士と政府軍との市街戦が起きていた時代である。

当時のShah Alamは建設が始まったばかりの新生都市で、実質的州都はSultanの宮殿があったKlangであった。まだ、Darul Ehsanというアラビア語がつく前のSelangor州のことである。今のShah Alamからは想像もつかないであろうが、フェデラルハイウェーの北側の丘にITMのタワーが聳えていたのみ。ハイウェーの南側にできた工業団地は入居者もまばらで、商店街には食堂が2軒しかなかった。タワーの周囲には、学系棟に学生寮、職員用宿舎(平屋のテラスハウス)が散在し、後は、辺り一面ゴム園と油椰子畑となり、タミール系住民が家畜と共生していた。(頁上の挿入写真を参照)

ITMの前身はPetaling Jayaに1956年に設立されたRIDA Training Centreという職業訓練校で(RIDA: Rural & Industry Development Authority)、RIDAがMARA(Majlis Amanah Rakyat国民信託評議会)に発展すると共に、MARA Collegeとなりそれから ITMへと変遷した。ITMは、高卒レベルのBumiputraに英語による実務教育を施すDiploma中心の全寮制専門学校で、当時3学系20学科ほどあった。1976年に文部省直轄となりビジネス系の学位取得課程も創設され大学への一歩を踏みだした。今や、名前もUniversity iTMとなり3学系27学科を擁す総合大学に発展している。

語学センターはこれらの学生に第二外国語教育(フランス語、ドイツ語、ロシア語、タミール語、中国語系3言語-広東語、福建語、標準中国語、それに日本語の8言語から一語選択)を施す機関で、ネイティブを含む講師30数人とアドミニ、ランゲージラボ技師を入れて総勢40人を超える組織であった。

日本語を学ぶ学生は、社会科学系と経営学系300人弱と、社会人向け集中コースの10人ほどであったと記憶する。1クラス(30名ほど)週3コマ、履修期間3年、集中コースは毎日4コマ、期間は6ヶ月であった。私は前任の上洋子さん、佐藤陽子さんと半年から1.5年重複し、当初の講師陣は日本人フルタイム3人、日本人パートタイム2人、マレーシア人1人の総勢6人であった。授業のコマ数も多く、シラバス編成、教材作成、試験等々で結構忙しかった。後半は、5代目 加納千恵子さん、革命のあったラオスから任地替えとなった中山幸子さんが着任し、マレーシア人2名(謝漢さん、呉文政さん)も新たに加わった。帰国間近には、6代目 渡辺京子さん、シニアの伝井かほるさんが加わり、日本語コースは語学センター最大の陣容となった。その後、Mahathir元首相が政界に復帰して文部大臣に登用され、ITM三代目学長をも兼務したが、私の任期の最後の方は、正に、Look East政策の夜明け前であったと言えよう。

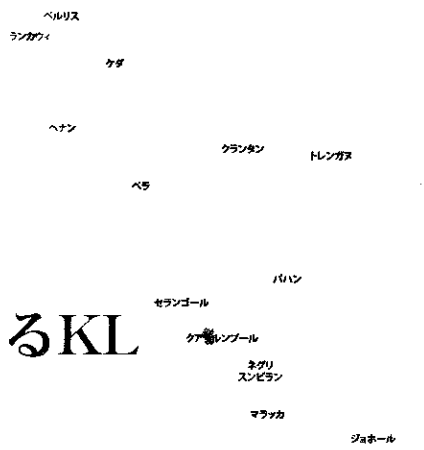
語学センターは年一回文化祭を開き、昼は展示会中心、夜は、Malam Bahasa(語学の夕べ)と称する各語学コース対抗のカルチャーショーとなり、展示品集め、学生への歌や盆踊り指導、演劇の脚本作り、演出等に多忙を極めた。又、日本語を学ぶ学生が運営する日本語クラブとKL日本人会のコラボで日本人家庭に3泊のホームステイをするAnak Angkat(養子)というプログラムが年一回実施され、赴任早々、二回目のイベントに携わった。このプログラムは苦労も多かったが30人ほどの学生が参加する最大の年間行事となった。

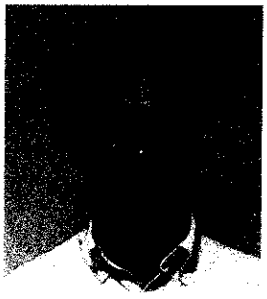
日本語を学ぶ学生が一番多かった学科はHotel & Catering Managementで、帰国後、所用でマレーシアに行く度にKLの国際的ホテルで働く卒業生、レストランを経営する卒業生らによく出会ったが、私とたいした齢差もない彼等は、既に一線を退き第二の人生を送っていることであろう。

ITM 日本語クラブ集会で 黒のドレスは佐藤陽子さん 前列左から3人目が会長のNazrin(1975年10月: ITM)

Malam Bahasa 日本語を学習する学生による合唱付き演劇脚本、演出は筆者(1976年9月: ITM)

Kuala Lumpur
クアラルンプール





1980年代中頃の変動するKL

前島 明
昭和57年3次隊(自動車整備)

◆地域の特色 (Kuala Lumpur)

私がKLに着任したのは1983年1月でした。(日本では東京ディズニーランドがオープンした年)スバン空港に降り立って最初に驚いたのは、冬でも暑い所がある事に驚きました。

街全体は大都会には違いないのですが、何となくこじんまりと感じた。KLの街全体を包むJln Pekeliling(現Jln Tun Razak)の外側はまだ未開発地域がほとんどで、郊外には錫の露天掘りの跡の大きな穴がいくつもありました。

商業施設や繁華街で主だったのは KLの東側に位置するAmpang パークショッピングコンプレックス、北側にはChow Kitそして何と言っても最大の繁華街はKL中心を通るBukit Bintang 通り沿いに建つSungei Wang Plaza. Bukit Bintang PlazaがあるBukit Bintangエリアです。

ただ建設途中の高層ビルがいくつもありこれから一気に増えるだろうと予測が出来た。そして驚いた事にKLにも温泉がいくつか点在していることです。

◆セントラルマーケット

現在のセントラルマーケットはお土産品店やバティック等衣料品店がほとんどですが、当時は食料品(肉、魚、野菜)を販売するお店などがほとんどでKLの台所と言われておりました。

◆交通機関

移動手段としてはミニバスとタクシーが主流でした。

◆通信

電話はまだ普及してなくて日本に電話をするにはテレコムに出向いて1-2時間待たなくてはなりません。(私の赴任先の学校でも電話回線は一本しかありませんでした)

◆服装

今と違いKLの街の中でも男性は腰にカインを巻いてTシャツそしてスリッパジュプン(ビーチサンダル)といういでたちで少しも恥ずかしくはありませんでした。

◆戦争認識

街を歩いていて私が日本人だとわかると極端に敵意を抱いてくる人。またその真逆の人もおりました。私の知らない第二次世界大戦、ここマレーシアが激戦地であった事、改めて戦争認識をした。

◆自分の活動と地域に根付いたもの

自分自身の活動と言うわけではありませんがソフトボールが挙げられます。マレーシアのソフトボールの起源ははっきりわかりませんが、間違いなく先輩協力隊隊員の余暇活動が今のマレーシアのソフトボールの普及に影響してると思います。

第二次世界大戦中、日本軍が駐留していたとされる文化青年スポーツ省職業訓練校Duaun Tuaの敷地内にある温泉　日本名が付けられた石碑が残っています　石碑の後ろにある井戸みたいなところから温泉が湧き出ています　それを溜めて入浴中!

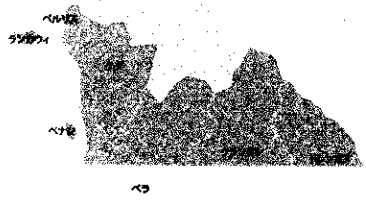
ソフトボール ナショナル トーナメント:Puduraya 大会

私も余暇を利用してプルリスチームの一員としてプレイしておりました。

また1985年ナショナルチームを結成して草薙球場で行われたアジア大会に参加した実績もあります。現在も毎年ナショナルトーナメントが開催されております。そして2012年夏、私が一緒にプレイをしていた友人の娘さん(小学校の先生)が生徒を引率して世界少年野球(WCBF)三重大会(熊野市)に参加しております。いずれにしてもマレーシアのソフトボールの普及はJOCV隊員が居なければ根付いていなかったと断言しても良いと思います。

◆カウンターパートとの関係

私とカウンターパートとの関係はとても良い関係です。私が着任した職業訓練校は職種は違いますが何代もの協力隊の隊員が赴任しておりました。その為日本人との付き合い方が慣れていて非常に活動がやりやすかったです。30年経った今でも連絡は取り合っております。昨年にはそのカウンターパートが来日して歴代のJOCV OBとの再会を致しました。



セレンバンの思い出

福井(水谷) 容子
平成1年1次隊(日本語教師)

協力隊でマレイシアに赴任していたというと、「どこ、クアラルンプール？」と聞かれる事が多いのですが、「ヌグリスンビラン州のセレンバン」と答えると、決まって「聞いたことないな」という顔つきをされます。確かに、有名観光地のマラッカとKLに挟まれ、地味であったことは否めません。しかし、セレンバンの魅力は暮らしてみないとわからない、どころか、ここで私は命拾い（？）したのでした。

セレンバンは当時（30年前）からスーパーマーケットが3軒もある地方中規模都市。赴任前のホームステイ先では、「セレンバンはミナンカバウ訛りじゃなきゃ通じないかも」と言われ、訛りを練習していきましたが、普通のバハサはもちろん、皆さん英語を流暢に話し、任地の学校に至っては、生徒が夏休みにパリやロンドンに遊びに行ってたなど、日本で自分がいた環境よりもはるかに国際的だったといえます。茶の湯が禅から来ていることを教えてくれたのも、セレンバンで知り合った人でした。

さて、赴任先の学校は、月曜日は朝礼から始まります。その日、朝礼で校長先生の話を聞いていた私はひどい頭痛と寒気を感じて帰宅しました。体温計は40度。薬を飲んでも下がりません。調整員に相談しKLの病院で見てもらったところ、風邪でしょうということで薬を処方してもらって帰宅しました。ところが、次の日も、その次の日も熱が下がりません。朦朧として寝ていると、近所の人が「もう2日もあなたが家から出てこないから来て見たのよ。やっぱり病気だった。」とお粥を持ってきてくれました。ありがたく、お粥を食べて寝ていたところ、再びノックの音が。今度は別の家の人が「昨日も学校に行く姿を見なかったから、来て見たのよ。やっぱり病気だ。」とお粥を持って立っています。「体力の回復には、今すぐ食べたほうが良い」、「いや、今はちょっと・・・」、「食べたほうが」、「今はちょっと」というやり取りの後、ありがたくもらって布団に戻ったところ、再びノックの音が・・・ギクッ。それは、食べ物を持った別の近所の人だったのでした。「すぐ食べたほうがいい」、「いや、さっきお粥を頂いて食べたのでおなかがいっぱいで」、「あそこの家のを食べて、なぜ、うちのは食べられないのか」、「いや、お宅のご飯がどうというわけではなくて」・・・。

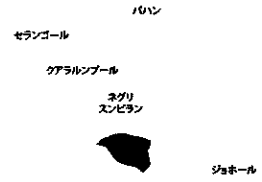
恐るべし、セレンバン住宅街の見守り体制。お陰で、栄養と水分が十二分に補給され、翌日再び調整員に連絡してKLの病院に行ったところで、「これはTyphus（チフス）ですね。即入院です」と診断され、そこから5日間、病室で昏々と眠る日々を過ごすこととなったのでした。

赴任先トゥンククルシア校の授業風景（1990年：セレンバン）

トゥンククルシア校学校祭の日本語生徒による日本展示（1991年9月：セレンバン）

ああ、それなのに。本来であれば、菓子折りのひとつも持ってお礼に行くべきところ、私はご近所の皆さんに洗った鍋を返しつつ「Terima Kasih」の一言で済ませてしまったのでした。それにもかかわらず、ご近所の暖かい、そして密度の高い親切は任期終了まで変わることはありませんでした。○○の歩き方にも載っていないセレンバン、住宅街に住んで（チフスになって）みなければ、その奥深い魅力は味わえないのかもしれません。

アローガジャ　マラッカ



山本 隆
昭和44年3次隊(工作機械)

私は1970年4月坂本駐在員と運転手のアルフィンとで赴任先のSecondary Vocational School Alor Gajah に向かいホテルを出発しました。

途中Kajangで名物のサティを食べてから、峠を越えSerembanにマレー鉄道の線路を左側に見て走ります。1時間程でTampin方面Malacca方面への分岐点をMalacca方面に低い峠を上り、下り始めた所が赴任先の学校があるアローガジャの町です。

学校ではイスマエルが待っていてくれ彼の案内で宿舎に。そこは裸電球一つに机、その脇にスプリングのベッドだけの6畳間ほどの部屋で多分そこは倉庫だったのだろう。駐在員と町の食堂で軽い食事をして別れました。その後イスマエルが床屋、食堂などを案内してくれた後、部屋に戻り持って来たジュラルミンのスーツケースと茶箱の中の物を整理しました。

翌日の朝礼での生徒への紹介、カウンターパートを紹介され実習場を見学してこれからの実習内容を話し合って、次の日から、ボランティア活動が始まったのである。

この半年間で溶接科に赴任の吉本氏、彼は現在も年に何日かはアローガジャで生活をしていました。その後、電気科に赴任の小林氏、アローガジャに日本人が3人集まったので賑やかになりました。街でもうわさに成った様でした。何人かで食事をしていると現地の人に取り囲まれる、これを動物園状態だと云ったものでした。

私はここの生活に慣れたひと月後に月30リンギで長屋に引っ越しました。そこはシーメタル科のOoiのアパートに近くタ食は家に食べに来いと誘われていた。そこには倉庫番をするキャリアパン、電気科のジョーとパロムが、Ooiが中華料理をパロムがインド料理を作って4人での食事、その後Ooiがギターを持ち出し歌が始まります。何ヶ月か続いた楽しい時でした。皆独身であったが、この二年の間にOoiを始め友人が結婚をしていくのです。

アローガジャからマラッカまでは16マイル(約25km)、月に何回かは買い物などでマラッカにいきました。バスまたは乗り合いタクシーで、町中央のガソリンスタンド近くが乗り場です。ゴム園の中を走ります。現在は片側2車線の良い道路が出来ていますが。

マラッカも世界遺産に登録されてからは賑やかで華やいでいます。オランダ広場、セントポール教会、サンチャゴ砦などは大きい公園に成っていました。以前は建物に沿った2車線の道路がセントポール教会の丘を囲む様にサンチャゴ砦方向に向っていました、道路の向こうには何軒かの食堂が有りその前は海岸でしたが、現在は何キロか先まで埋め立てられて高層ビルが建ち並び昔の面影はありません。車の少ない通りをベチャが走りのんびりとした町で、良く散歩に来た小生のお気に入りの場所でもありました。

Secondary Vocational School では最終試験も終って帰国に向け忙しい時期になりました。

この2年弱の間、材料の手配の事では倉庫番のカリアパンとはよく材料の発注の事で話し合いました。彼はプライベートでも良き友人でありました。焼き入れ炉を作る時は学校の植木屋が作ってくれました。このように現地の人々の様々な協力があったからこそ二年間を過ごす事が出来たのです。赴任当初の実習用機械では、修理してからの使用になったから訓練は遅れただろう。新しい機械が入った時は安心しました。

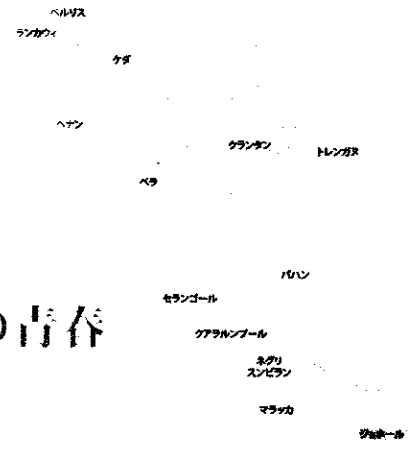
マレーシア側も力を入れてくれました。カウンターパートも進言してくれたと思っています。小生の後任を要請して実現させた事でも技能系の育成に力を入れていた事が分かります。

感受性に富んだ時期に、この国に赴任して様々な経験が出来たことがその後の自信に繋がった事は確かです。それに加え異国での生活の中で物事を客感的に見ることも学びました。これらは私にとって大きな収穫でした。

試験が終わり生徒全員でのスナップ

日に3人から4人での技能試験　最終試験は当時の日本での旋盤技能検定2級試験にメスのテーパー加工を外して、加工交差を少し甘くしました

Johor
ジョホール州



Johor Bahruでの2年半の青春

堀田 悦史
昭和48年2次隊(電気機器)

1973年10月から1975年末までJohor Bahru Vocational School(ジヨホールバル職業訓練学校)に電気制御の指導員として派遣され南国の地での青春時代を過ごしました。地理的に Johor Bahru は Malay半島の先端に位置し、隣はSingaporeとの国境です。

当時のJohor Bahruにはもちろん高速道路もなく、市街地とSingaporeに通ずるメインストリート、平行してマラヤ鉄道、両側に商店街、モスクが立つ公園、唯一オキドホテルが市街地の中心にあり小さな地方都市で、車で10分も移動すれば郊外、ゴム・オイルパーム園いわゆるジャングルです。

私の派遣先Johor Bahru Vocational Schoolは、職業訓練学校で中学卒業後2年間技術・商業を学び社会に貢献できる人材の育成でした。当時マレーシアは、まだまだ開発途上国で若い技能人材が不足していたための教育の一環でした。訓練学校には、商業、自動車、電子、電気、建築、溶接、機械科の7学科があり一般教養としてマレー語等を学ぶ学校です。マレーシア国は、国語としてマレー語の評価が重要で、マレー人の優遇政策の一環でもありました。したがって、生徒にはマレー人の比率が多く大半が学校構内にある寄宿舎での共同生活、週末に田舎に帰ることもできる生徒もいました。

私も派遣前には、東京で3か月、現地クアンタンで1か月のマレー語の語学訓練を受け、訓練学校に派遣されました。皮肉なことに、現在ではマレーシアで英語教育が行われております。

Johor Bahruには、当時3人協力隊隊員が派遣され、警察で柔道の指導員、同訓練学校で機械の指導員と派遣され、お互いに別々に住、マレーシアでの同化を重要視してました。Johor州は、イスラム習慣が厳格で金曜日と土曜日が休日、日曜日はウイークデーです。したがって、郵便局・公共機関は金曜日休み、銀行は日曜日が休み、不便もありましたが住めば都、ただし食堂も金曜日は休みのため困りましたが。なぜなら朝・昼食は学校のキャンティンでマレー料理、夜は町のマレーまたはインド料理がほとんどでした。小さな町での生活のため生徒にも出会い、かつイスラム色が強く生活の上で気配りもしました。

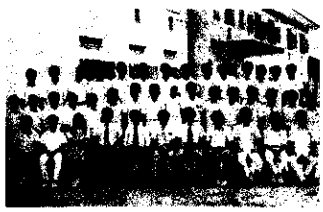
Johor Bahruでの生活で一つ面白い光景に遭遇しました。町の中心の公園内にマレーシアのシンボルオランウータンが飼育されており、誰が教えたかタバコを吸うのです。その光景が非常に楽しく美味しそうに吸うのが滑稽で、まさしくオランウータン“森の人”です。また、公園内には大きなモスクがあり、そこで売っているドリアンアイスが南国の暑さを和らげてくれた記憶があります。

当時通信手段としては電話か手紙ですが、学校の事務所に1本ある電話もKuala Lumpurに連絡するには3時間位かかり、その間じっと待たねばなりません。

同封しました写真は Guru-Guru Sekolah 1974“1974年全先生の記念写真”前段右端が筆者です。学校ではイギリス支配が長かった為、公式の場ではネクタイは必要で、例えば毎朝7時に国旗掲揚と、国家斉唱で始まり、我が日本国とはえらい違いです。

マレーシアは多民族国家でマレー・中国“華僑”・インド人と学校での催し事があると、野菜サンドイッチとコーヒーでの昼食会。なぜなら、校長先生はインド人で採食主義のため肉類は一切出ませんでした。

ジョホールバル職業訓練学校の卒業アルバム(1974年)



電気科4年生

電気科5年生

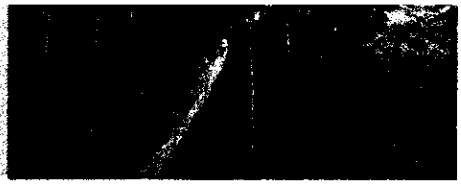
二枚目の写真は、電気科4年生と5年生の生徒・先生の記念写真です。今思えば彼・彼女らはマレーシアでなんの仕事をしていますか。マレーシアも定年が50歳と聞いていましたが、もう定年していますか。

あれから40数年、わずか2年半の付き合いでしたが、アルバムを見て、当時の状況が思い出されます。

隊員任期終了後、デンマークのプラント会社に16年およびフィンランドの採石機械製造メーカーに17年勤務し、定年退職後は、自営業で電気設備の電気主任技術者として国内で生活しております。また、マレーシアのMM2Hを習得し、マレーシアのペナンに休暇で時々滞在します。たぶん南国の青春時代ののどかな生活が忘れられないのでしょう。

Selamat Jalan.

Pahang
パハン州



30年目の思い出

山村 博章
昭和58年4次隊(電気機器)

パハン州、クアンタン　ポリテクニク（POLISAS）

◆地域特色

マレイシア半島東海岸の中部に当たり主要都市
イスラム教の宗教色の強い地域

◆驚いたこと

毎週金曜日はイスラム教宗教上の休息日でお祈りの日に当たり、仕事は午後からとなり、仕事は事実上休日となること。

学校においての教室型活動でしたが、学校の教育設備が海外欧米からの輸入品で立派なものでしたので、私のほうが勉強することになってしまった。

また、先生の中には欧米各国での大学卒業者がいるのでこちらのほうが教わることになってしまった。

◆自分の活動と地域に根付いたもの

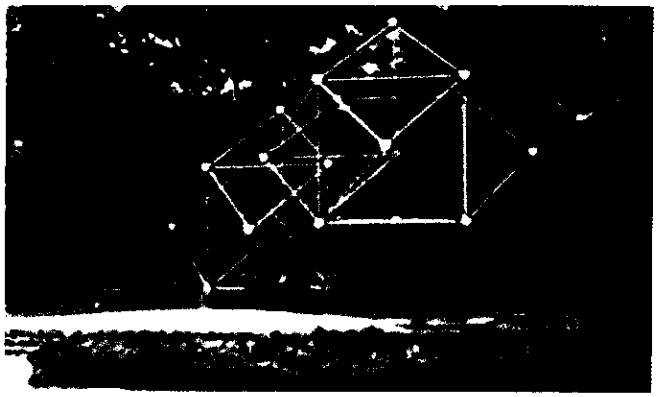
前任者が数人おられてその受継ぎみたいに日本語の教室を街中で教えること。主に中国人の若者で同じような年齢の人たち

◆カウンターパートとの関係

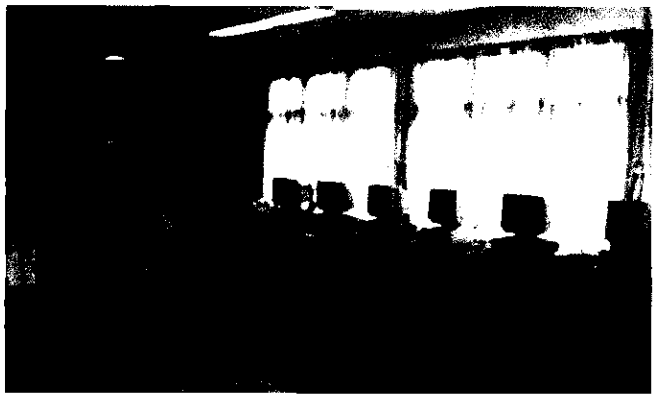
特にカウンターパートのようなものはなし

◆その他

任期終了後、帰国就職し仕事の関係でマレイシアでのプロジェクトの立ち上げにて赴任し、この協力隊時の付き合いでこの時も現地現場の仕事関係にもなり、色々と世話にもなった。

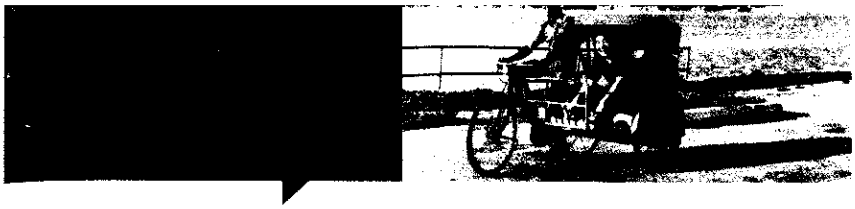


クアンタン　ポリテクニク(POLISAS)の校門



写真①コンピュータ教室

写真①のように、30年前なのでコンピュータも現在のようにノートパソコンではなく、フロッピーディスクを使用するタイプで今のように日本語を入力できなく、使うにもある程度の知識がないと難しかった。



独立記念碑の修復作業

金森 寛
昭和50年1次隊(鋳物)

◆地域の特色

「真紅な太陽燃えている　果てない南の大空に　とどろきわたる　雄叫びは　正しい者に味方するハリマオ、ハリマオ　僕らのハリマオ」これは怪傑ハリマオの歌詞です。41年前の1975年にマレーシアの東海岸、ハリマオの活躍した地トレンガヌに派遣されました。ここトレンガヌは、漁業、バティック、真ちゅう鋳物などの盛んな地方都市でした。真ちゅう鋳物の産地で、蝋で型を造り粘土を幾重にも蝋型に張り付けて型を強固にし、乾燥させ、焼いて蝋を型から抜き、蝋の抜けた空間に溶解した真ちゅうを流し込み製品を製造する昔からの蝋型鋳物が村々の高床式の家の下で行われていました。製品は、鍋、皿、手洗い器、日常使用する道具類。仕事終了後は、トレンガヌのラグビーチームに加入し練習、遠征などでラグビーを楽しみました。着任したときは信号機もありませんでした。明るい地方色豊かな海のきれいな東海岸ののんびりとした所がトレンガヌでした。

◆驚いたこと

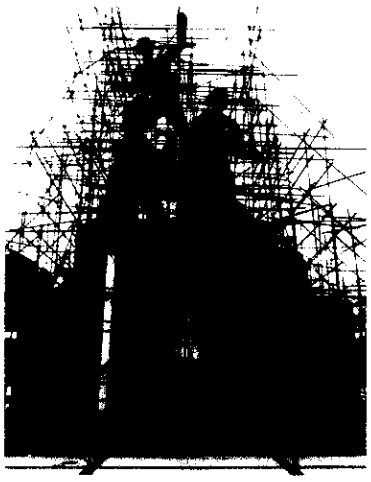
トレンガヌでは下宿生活でした。何人かの職場の人たちと一緒に生活することになりました。まず大変だったのが便所です。もちろんトイレットペーパーは使用していないので、手汲みの柄杓に水を入れて便所に行き済んでから左手に水を溜めて尻穴を洗い流すのです。一番驚いたのは次から次に下宿人が増え８人、しかし下宿代を支払っていたのは私と同僚２人でした。ステレオはボリュームを音量いっぱいにして聞く。協力隊で借りていたオートバイは貸してくれと言っていつも彼らが乗っていました。しかしある時パンクをしたまま置いてあったので、それ以後は貸しませんでした。停電もよくしたため蝋燭生活もしました。下宿の周りは沼でしたので蚊がよく来ました。彼らは自分の物と人の物の境がなかったように思います。宗教上から来ていたのだと思います。

◆自分の活動と地域に根付いたもの

私の仕事は、トレンガヌ(MARA手工芸センター)の訓練生に砂型鋳物技術を教えて、彼らが習得した技術を村に持ち帰り、村に現金収入をもたらすことでした。着任早々コミュニストによりマレーシアの独立記念碑が爆破され、その修復作業をMARA公団が受けて、トレンガヌ州の手工芸センターが破損部分の鋳造することになりました。クアラルンプールで破損した箇所を石膏型で取りトレンガヌに送られて来ました。その型を砂型で造り鋳造し部品を仕上げてクアラルンプールに送り溶接し完成させました。その時に教えた砂型技術は、どこかの村でしていると思います。マレーシアは現在工業化が進みたくさんの鋳物工場があり、従業員にトレンガヌで砂型鋳物を習った人が居ると聞いています。

◆カウンタパートとの関係

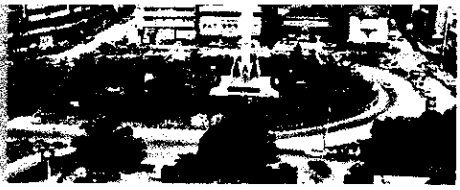
カウンタパートとの関係は最悪でした。出会いは、私はアメリカンピースコーより砂型鋳物を習っているので、あなたの技術を習う必要はないと言われました。その時に彼が何度やっても出来なかったシリンダーを作るようにと所長から言われ、縦300㎜×直径150㎜の円筒型の物を造りました。半分ずつを合わせて使用するものでした。皆が私の技術を認め、その後はなんだかんだと文句を言いながらも銅像修理の鋳造時には協力してくれました。銅像の部品が全部仕上がった時には、金森が指導し、仕上げたのだから最後の部品に JOCV KANAMORI と入れろと言ってくれました。あの銅像を見ると彼と喧嘩した事、一緒に銅像の部品を造った人達、彼の家に招待された事、銅像の中にJOCV KANAMORIと記されていることなどが想いだされます。


独立記念碑修復作業中(1976年)

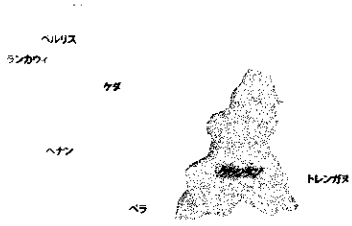
修復作業中

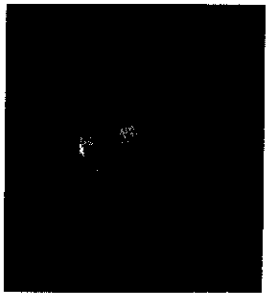
銅像の修復部品にJOCV KANAMORIと記す

トレンガヌ州ラグビーチームに加入

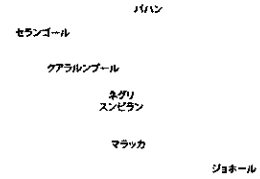


Kelantan
クランタン州





Selamat datang ke Kelantan
~ようこそクランタン州へ~



堀田 裕美子
平成20年2次隊(青少年活動)

クランタン州は、マレーシア半島の東海岸側北部にあり、タイと国境沿いの州です。そして、マレーシアの中で、最もイスラム教色が強いとされている地域でもあります。

私はこの州の『JKM(社会福祉局)』に配属されました。この『イスラムなクランタン』の生活に触れ、初めこそ戸惑いましたが、温かく大らかで、ちょっぴり自由奔放な同僚・友達・村の人たちに支えられ、任期を終えることができました。私の大好きなクランタン州を少しだけご紹介致します。

保護者同伴の元、聴覚障がいの子が寮制の聴覚特別支援学校に通うかどうかの話し合い
(2010年:クランタン州: PDKワーカー)

① トドン率の高さ、NO.1!!
先に述べたように、イスラム教色の強いクランタン州では、女性のトドン(スカーフを頭に被る)率が非常に高く、小さな女の子でも被っています。私がお世話になっていた大家さんが、『来客だ』と慌ててタオルを頭に巻いて対応していたのにはびっくりしました。(とにかく頭部を隠すように。と)

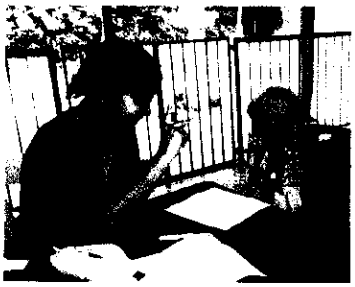
② 州全土で『お祈り』の時間を大切に。
マレーシアは日本と同じように『休日』と言えば、多くが土・日曜日です。ですが、クランタン州は違います。金曜日のお昼に男性はモスクに行ってお祈りをする為、多くの人が金・土曜日が休日なのです。外資企業である、24H営業のマクドナルドでさえも24Hって書いているのに、金曜の13:00~14:00は閉まります。モスクでのお祈りは、"お祈り"だけではなく、男性たちにとって大切なコミュニケーションの場でもあるそうです。

③ お店の看板には『アラビア文字』が書かれている。
これまでイスラムな州であるとお伝えしましたが、ここも多民族国家のマレーシア。もちろんイスラム教以外の方も住まれています。看板は中国語、ヒンドゥー語、タイ語、英語…と様々ですが、そのほとんどの看板にアラビア文字が書かれています。マレーシア国内だけではなく、世界中のイスラム教の方たちが看板を読めるようになっているのです。

④ 人も動物(家畜)もノビノビと。
道を羊、ヤギ、牛、鶏などが自由に歩いています。この光景を初めて見たときは驚きました。のんびりと『今』の時間を楽しみ、誰とでも仲良くなれるフレンドリーさがノビノビと過ごせる秘訣なのでしょうね。

⑤ 帰国後も食べたくなるクランタン料理。
タイと国境を面している為、ハラールなタイ料理を食べることができたり、豚肉やアルコールはほとんど売られていない代わりに、ご当地料理のような食べ物が多かったり、また砂糖の消費量が一位と言われる程「激甘辛」だけどやみつきに…。特にナシクラブはおススメです!

町を見て楽しい! 食べて美味しい!! 大らかな人に触れて温かな気持ちになれる!!!それがクランタン州の魅力ではないでしょうか。



PDKに通う聴覚障がいの子と手話の勉強中です
(2009年4月:クランタン州)

身近な物を使ってみんなで遊ぼう ~買い物ごっこ~ (2009年6月:クランタン州)

そんなクランタン州には、同時期に他2名の隊員(ソーシャルワーカー、作業療法士)も派遣されており、私は『青少年活動』としてPDK(地域に根差したリハビリテーション)を巡回し、主に障がいを持っている子ども達へ遊びを通して社会性を身につけられるように提案したり、様々な理由で学校へ通う事が難しい子が学校へ通う"きっかけ作り"で現地のワーカーさんと学校訪問をし、PDKと学校を繋げるパイプ役を努めました。また週末にはカウンターパートと話し合う時間を設け、どうすれば『PDK』がより良い場所になれるか一緒に考えていきました。私が帰国する直前には『3PK(特殊教育サービスセンター)』にも新隊員が加わり、メンバーチェンジをしながら情報を共有し活動が続いています。

帰国して早6年、現在は隊員の派遣は終了し、町もどんどん発展しているようです。新しいクランタン州も楽しみですが、私が知っているクランタン州に皆様が触れ、好きになってもらえたら嬉しいです。

Sabah
サバ州

サバ州クダット地域で協力隊初のチーム派遣による村落開発事業に取り組みました！

福永 敬
昭和59年1次隊シニア（村落開発普及員）

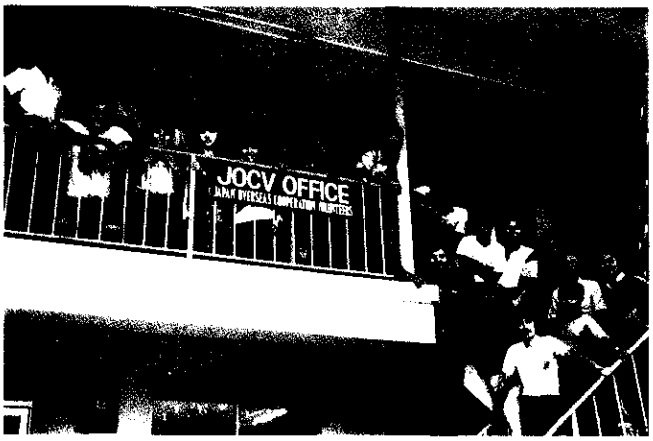
私は56年度1次隊でフィリピンに村落開発普及員として2年間派遣されましたが、不幸にも任期終了直前にマニラ市内で交通事故にあい、不本意ながら任期短縮して1983年6月に帰国しました。

そこで再度シニア英語資格を取ってフィリピンからの要請を待っていた時に、マレーシアで初めての村落開発チーム派遣のチームリーダーとして行かないかと協力隊事務局から誘われました。最初はフィリピンに未練がありましたが、当時は村落開発の要請が少なく、フィリピンにも近いサバ州での事業とのことで引き受けて、1984年8月から2年間の任期で赴任しました。

最初の仕事はコタキナバル市内の配属先（UPKR）に勤務しながら、毎週5時間ほど車に揺られてクダット地域にある2つの対象村で、隊員用の事務所兼宿舎を建設することから取り組みました。といっても私には建設のノウハウもないので配属先の同僚の協力を得ながら、地元の公共事業省のスタッフに設計から施工までお願いして何とか隊員赴任時までに2棟が完成しました。

サバ州村落開発チーム派遣パンフレット表紙の隊員住居と島本隊員（1985年頃：サバ州クダット地区バンガオ村）

サバ州村落開発チーム派遣関係者のサバ首席大臣との記念写真（1986年頃：サバ州コタキナバル市内ホテル）



サバ州派遣隊員総会時に参加者全員が連絡事務所の前で撮った記念写真（1985年5月：コタキナバル）

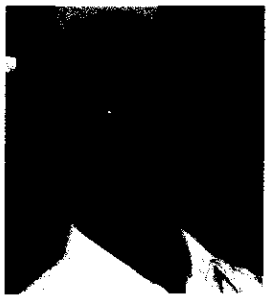
各対象村には野菜・畜産・土木・保健の4職種の隊員が1チームとなって駐在し、ロングハウスに居住しているルングス族の生活改善から取り組みましたが、赴任当初はハプニングの連続でした。

何とか初代隊員の4人に続いて2代目隊員の4人も赴任し、試行錯誤しながらも村落改善事業が進みだしたころにサバ州の総選挙があり、予想外の政権交代で配属先にも大きな影響を受けました。しかしサバ事務所の浜田調整員他JICA関係者の支援もあって何とか新政権下でも事業が継続されることになり、サバ州の新大臣に活動報告会ができたことは非常に嬉しい思い出でした。

さらに毎年2回の隊員総会時には全員で首都KLに集まる機会があったのですが、同会議終了後に課題別研修会を申請して、農業隊員等と一緒に半島部の隊員活動地を訪問したのも良い機会でした。

サバの村落開発事業は私の後も2代で6年間続きましたが、クダットの対象村で村落改善がある程度進んだ成果よりも、チーム派遣隊員の人材育成に大きな成果を上げたと自負しています。実際私が赴任当時の隊員の中からはその後JICAプロジェクトの専門家や調整員になった人材が何人も出た事実や、後日インドネシアで始まった協力隊による村落開発チーム派遣にも当時の隊員やシニアが大きく関わった事実は、初代村落開発型チーム派遣の成果として自慢できると思います。

Sarawak
サラワク州



オランウータンは森の人になれたか？

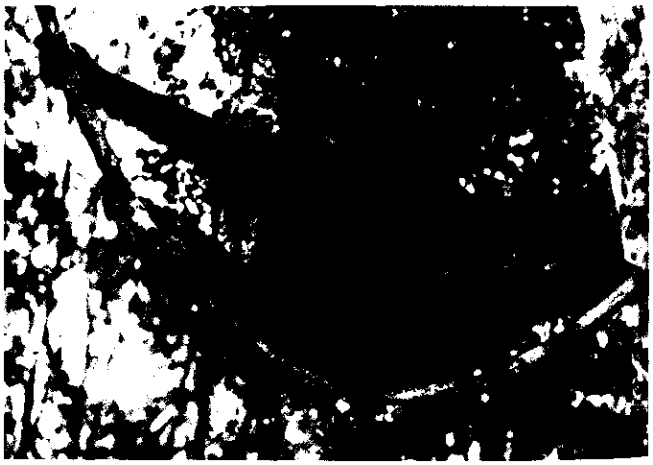
大沼 学
平成5年1次隊（動物学）

私が「動物学」隊員としてマレーシア・サラワク州森林局・セメンゴ野生動物リハビリテーションセンター（現在は「セメンゴ野生動物センター」に改名）に赴任してから23年が経過した。協力隊員としてはサラワク州森林局で3年間活動した（任期を1年延長）。任期終了後、サラワク州政府に採用され、州政府職員として3年間働き、合計6年間をサラワク州で過ごした。赴任した当時、日本ではサラワク州における熱帯林の伐採が注目を集めていた時期だった。赴任先がサラワク州森林局ということもあり、実際の状況を知ろうと、赴任前にマレーシアOBの方々にお会いした。残念ながら、任地がサラワク州ではなかったため、OBの方々からサラワク州がどのようなところなのか情報を得ることができなかった。しかし、赴任前に得られる情報が少なかった分、かえって先入観を持たずにサラワク州森林局に赴任できたのではないかと思う。そして、その後6年間過ごして、サラワク州の自然、歴史、文化、そこに暮らす人々、そして食べ物（特にサラワクラクサ！）を知り、月並みではあるけれども、サラワク州は私の第二の故郷と言える場所になった（任期中に知り合いになったある外国人の方は、サラワクを「Hidden paradise」と言っていた）。

セメンゴ野生動物リハビリテーションセンターでの仕事は、主に違法飼育されていたオランウータンを森で暮らせるようにすることだった。その他にもセンターには絶滅しそうな野生動物（マレーグマ、スローロリスからワニ、ニシキヘビまで）が多数持ち込まれ、必要であればそれらの動物の治療も行った。治療中に、オランウータン、マレーグマ、ワニに手や足を噛まれ、その傷は今も残っている。その傷を見ると、器具も経験も不足しながら、頼もしい現地のスタッフとともに日々の仕事をこなしていた当時の様子を生き生きと思い出すことができる。今でも仕事上で様々な壁にぶつかった際、私はオランウータンの治療をしている自分の写真を見ることにしている。それによって、なぜ自分が今の仕事をしているのか再確認できるからだ。仕事の関係で、私はかつての任地を年に1回程度今も訪れている。その際に、2-3歳ころにセンターで受け入れ、その後、森で暮らせるようになったオランウータン達が子供を連れている姿を見ると、感激のあまり泣きそうになる。一緒に仕事をしていた現地スタッフもそれぞれのオランウータンの生活を嬉しそうに私に説明してくれる（全てのオランウータンに名前が付いていて識別できる）。

オランウータンを診察中の筆者（1997年：クチン市）

私が活動した分野は農業、教育、医療など、いわゆる協力隊の活動と言えるものではなかったけれど、子供を連れたオランウータンや嬉しそうな現地のスタッフを見ていると、私も何か貢献できたのかもしれないと思っている。また、振り返ったときに、自分を鼓舞できるような経験を得る機会を作っていただいたサラワク州森林局、サラワクの動物たち、そして、青年海外協力隊に今でも非常に感謝している。そして、青年海外協力隊が「顔の見える援助」として役割を担うとともに、私のように自分を鼓舞できるような経験を若い方々ができる役割を今後も担っていってほしいと思っている。



森で暮らせるようになったオランウータン　脇に抱えられている幼いオランウータンは、その後、妊娠・出産した（1996年：クチン市）

ボランティアを支える人々

- **元カウンターパート:**
  JICAボランティアの配属先で共に仕事をする上司、同僚
- **マレーシア会:**
  マレーシアに派遣されたJICAボランティアOVの有志による会
- **元調整員:**
  JICA在外事務所でボランティア派遣、また派遣中の調整を行う支援員
- **元所長:**
  JICAマレーシア事務所長
- **ナショナルスタッフ:**
  JICA在外事務所で勤務するローカル採用スタッフ

Chapter

V

元カウンターパート

FELDA-JOCV DEVELOPMENT COLLABORATION

DATUK ALLADIN HASHIM
DIRECTOR GENERAL OF FELDA (1979-1989)

Perhaps to understand the significance of the role played by the JOCV volunteers in Felda we have to go back some 50 years ago.

The initial and primary role of Felda or the Federal Land Development Authority (established in 1956) was to redress landlessness and rural poverty, with the objective of improving and raising the living standards of the rural folks. This was achieved through an integrated program of large scale land development involving the clearing of jungle land converting it into agricultural plantations and rural settlements.

The economic objective of Felda was to improve the income and livelihood of the migrant settler families through the growing of oil palm, rubber and other crops. The social objective was to create and develop modern and progressive rural communities through the provision of housing, educational, health and other social infrastructures and amenities. Felda's social development also involved a program of 'planned-change' or 'social-engineering' using extension and adult-education methods and approaches to produce self-reliant and cohesive rural communities.

It was in this context that the JOCV played a very important role in Felda's socio-economic development program in the early years.

I was fortunate to be directly involved in the JOCV-Felda 'development-collaboration' which was initiated in 1975. Through this program, JOCV volunteers worked and lived alongside the settler families in a number of selected new land and settlement projects.

The "modus operandi" of this JOCV-Felda partnership program was through the development of grass-roots talent, leadership and resources with the objective of instilling and fostering the spirit of 'self-reliance' or 'berdikari' among Felda settlers. This was considered an essential element in ensuring the success of Felda's massive rural development and transformation program.

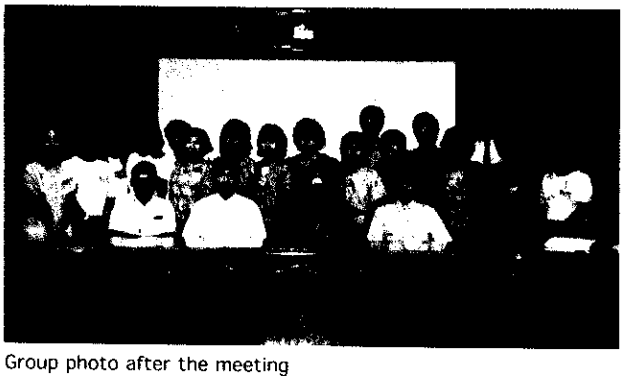
The JOCV-Felda partnership in development program spanned over 27 years involving some 105 Japanese volunteers working in kindergarten education, vegetable-growing, tailoring, handicrafts, nursing and related areas.

With the benefit of having been associated with the Japanese as well as the American and the Canadian volunteers programs, may I share "some lessons" from my personal experience and perspective.

- clear understanding and mutually agreed objective of the program.
- proper selection of volunteers with appropriate skills and expertise in identified areas of cooperation.
- adequate understanding of social and cultural environment in which volunteers and program operate.
- volunteers work alongside community leaders and with local personnel to achieve mutual benefits.

Felda has to date developed over 2 million acres of land for oil palm and rubber cultivation. Felda's development program has benefited and improved the lives, and provide a better future for some 113,000 families (in 322 settlements) or half a million rural folks. Felda through its business arm, Felda Global Ventures (FGV), is now a leading global player in palm oil and other related business.

There is still a lot of work to be done to address poverty, education and healthcare inequalities and disparities in many parts of the developing world. There is a continuing need to keep alive the spirit and the mission of "volunteerism" , and agencies like the JOCV can continue to play an important role to help address some of these pressing development issues.



Group photo after the meeting

FELDA development land

 このページの和訳はP-89

マレーシア会会長

人生観を変えた協力隊と「マレーシア会」

白山 肇
昭和55年1次隊
(理数科教師)

あの時の絶望感が、はっきりと蘇ってくる。ホテルのうす暗い部屋にあるベッドで仰向けになり、思考停止した頭脳に「後悔」という屈辱だけが襲いかかってきた。心の奥底に潜んでいた魔物という弾丸が「生きるという力、全て」を打ち抜いていた。無残にもそして苛酷に。日本での35年間の経験が何の役にも立たないどころか、それが重荷にさえなった。「マレーシアに足を踏み入れる前は、自信満々であった。化学に関する知識もあるし、技術もある。カッコよく振舞うことだってできる」と。

サバ州コタキナバルにあるUniversiti Kebangsaan Malaysia Kampus Sabah (UKM Sabah)が、私の活動現場であった。「大学の化学部講師で分析化学を指導する」こと、但し英語ではなく"マレー語"で。着任直後に学長と面談し、ある約束事が交わされた。「君の現在のマレー語能力では、専門用語も含めて講義をすることは困難と思います。そこでこれから3カ月間、マレー語の勉強をして下さい」と。私はこの学長のことばを聞き安堵した。講義に立つのに3カ月という猶予期間が与えられたのだ。しかし、数日後に事は起こったのである。学長がヨーロッパに移ってしまい、副学長が代理となった。直ちに、化学部長が私に、「来週から教壇に立って下さい」と要請したのである。「私は出来ません」とはっきりと断った。しかし、相手はひるむどころか強い口調で、現在の大学の置かれている現況について説明した。それは教えるスタッフである教師が不足していること、そして学生は私の講義を待っていることを。ホテルに戻り、「やるか、やらないか」の自問自答に対する七転八倒の精神的な苦痛が私を襲ったのである。こうして、私の協力隊はスタートした。

Universiti Kebangsaan Malaysia Kampus Sabah (UKM Sabah)での活動

そして、1週間後に多くの不安の中、教壇の前にいた。そこで学生の満面の微笑みの歓迎を受けた。私は救われたのである。不思議なくらい、心の不安がかき消された瞬間であった。37年前の出来事である。私の人生観はこの時変わったのである。

帰国後、地域(富山県)での青年活動に長い間係わった。協力隊OB会そして協力隊を育てる会の活動もその1つである。7年前の2009年に在京を中心としたマレーシアから帰国した協力隊OB・OGの集まる機会があった。そこで「マレーシア会設立」の機運から、実現に向けての準備会が作られ、2010年9月に「青年海外協力隊マレーシア会設立準備会」が開催され、120名が参加した。そこで満場一致でマレーシア会設立が了承された。

帰国後の活動：大学での海外研修授業 (サバ州の環境問題) 中央が筆者

2011年9月開催の第1回設立総会に臨むにあたって、会則(案)を作成 (第3条: 本会は、会員間の親睦を旨とする、第4条: 本会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。(1) 会員間の連絡網を円滑にするための名簿を作成する(2)定期的に交流集会や各種イベントを行う (3)その他、JICA等が実施するイベントに参加する) し、全国各地から116名が参加した設立総会で承認された。また、地方との連携を密にするためのブロック担当の配置も承認された。発足時の会員数は300名、派遣隊員数は2011年5月時点で1,200名を超えていた。こうして、1965年に初めてマレーシア国へ隊員が派遣されてから46年という長い年月を経た2011年に遅咲きの「マレーシア会」が誕生したのである。

会員は青年海外協力隊OB・OGに限らず、JICA職員、シニアボランティア、専門家等々会員資格はきわめてゆったりしたものとなっており、会費の徴集もない。現在は、505名の隊員OB・OG が登録されている。事業としては、名簿の更新 (会員数の拡大)、隔年の総会開催 (直近では2016年1月11日: 第3回をKLで開催し46名が参加)、年2回の会報発行 (直近では、第9号: 2016年2月25日発行)、役員会開催 (1カ月半に1回程度)、適宜の帰国報告会の開催、地区集会 (中部)、協力隊まつりやグローバルフェスタへの参加、マレーシア関連の情報配信等である。

元調整員

青年海外協力隊事業50周年 おめでとうございます

三浦 康夫
平成3年3次隊
(工作機械)

元マレーシア隊員の一人として、歴史あるこの事業の一端に関わることができたことは大変うれしく思います。

私がマレーシアに派遣されたのはもう24年も前になりますが、配属先での業務や同僚たちのこと、毎日の自転車通勤、美味しい中華料理やマレー料理、協力隊の仲間や現地の人々との交流などなど、楽しい思い出がたくさん蘇ってきます。協力隊員としてのマレーシアでの日々は、日本とは全く違う環境の中で戸惑うこともありましたが、毎日が刺激的で本当に楽しく過ごすことができ、その後の自分の生き方に大きな影響を与えた二年間でした。

そんな貴重な二年間をちょっと振り返ってみます。
1992年、毛利衛さんが宇宙へ飛び出した年、我々平成3年度3次隊の6名は無事に駒ケ根での訓練を終え、期待と不安を胸にマレーシアへと旅立ちました。予想を超えるKLの都会ぶりに驚き、また、これから始まる二年間に対する不安もありましたが、それ以上に楽しみな気持ちが強かったように記憶しています。

現地での結婚式にマレー服で出席(1993年:イポー)

そして調整員から切符を渡され、汽車に乗って任地であるペラ州のイポーへ赴任。私の配属先は教育省傘下のポリテクニック(技術系短期大学)の機械科で、活動は、同僚講師や生徒に対する工作機械の操作指導でした。機械は日本の援助で導入されたもので、その指導のために協力隊員が要請されたのです。それまで機械メーカーで培ってきた知識と技術を活かして、何とか活動を進めたのですが、実習授業ではその他の機械の指導も求められ、うまく指導できない悔しさから、休日に実習場でこっそりと操作の練習をしたこともありました。そんなこんなで、活動を通じて自分の実力を認識、特に不足している部分を痛感させられましたが、学校では日本語教室を開いたり、クラブ活動の顧問をしたりと充実した日々を送ることができました。

もやしで有名なイポーは中国系マレー人の多い街で、美味しい中華料理は最高です。商店も多く生活には不自由しませんでしたし、隊員同士の絆や現地人の支え、現地に住む日本人にもお世話になり、幸い大きな病気や怪我もせず、異文化の中で仕事も生活も何とか頑張ることができました。活動自体は誇れるような成果を残せたとは言えませんが、多くの人に支えられて無事に任期を終えることができ、たくましく生きていく力が養われた二年間だったように思います。

帰国前に同僚の家で日本食を作った(1994年3月)

さて、50周年を迎えたマレーシアでの協力隊事業が、これからどうなってゆくのか、大変興味深く感じています。50年前と今ではマレーシアの状況も大きく違うし、隊員に求められることにも違いがあるかもしれません。しかしどの隊員も自ら志願して参加したのですから、この貴重な機会を無駄にせず、置かれた状況の中で泥臭く精いっぱい頑張ってほしいです。活動の結果はどうであれ、そこで頑張れたことは、その後の人生で大きな自信になると思います。あとどれくらいマレーシアへの協力隊派遣が続いていくのか分かりませんが、これからもマレーシアのために、そして自分自身のためにそれぞれの隊員が今後も活躍されることを願っています。

元所長

時は流れて

永江 勉
昭和55年2次隊
（地質学）

今年、マレーシアへのJOCV派遣開始から５０年を迎えたとのこと。実に半世紀。まずは、その長い歴史と、その間、数々の隊員たちが成し遂げてきた努力と、それを支えてきたマレーシア事務所、並びに、JOCV事務局のご尽力に心から敬意を表したい。

他人事のような書き出しになったが、かく言う私も、マレーシアJOCV隊員の一人で、１９８０年から２年と２ヶ月、サバ州のUKMサバ分校（現サバ大学）で活動した。それから、早、３０年以上の時が過ぎている。

JOCVに参加したのは２７歳の時。それまで、地質学を勉強していた私には、国際協力などという世界とは、縁もゆかりもなく、また、全く関心もない、実に遠い世界だった。

そんな私が何故協力隊に参加したかというと、世界の「石」を見てみたい、これが動機である。地質学を勉強していると、その教科書には、日本では見ることの出来ない様々な、地形、岩石、鉱物、鉱床、地質構造などが解説されているわけで、これを実際に自分の目で見てみたいと思ったわけである。

そんな時に目にしたのがJOCVの募集広告である。募集職種に目を通してみると、地質学分野の募集があって、躊躇なく応募。結果、マレーシア派遣が決まった。

派遣先は、サバ州に新設されたUKMサバ分校。理学部のみからなる４年生大学で、派遣された頃は、開校から年が浅く、まだ卒業生も出ていなかった時期である。

JOCV隊員は私を入れて３人。また、日本のボランティアの他に、マレーシア人講師に加え、アメリカ、ドイツ、オーストラリア、アイルランドなどからのボランティア達が講師陣として控える、日本では考えられない指導体制であった。

そして、サバだけではなく、お隣のサラワク、半島マレーシアの全国から集まって来ている学生たち。そんな学生、マレーシア人＋外国人講師らと過ごした約２年間が、単に「石」見たさにJOCVに参加した私の気持ちを変えたようである。

そして、それから３０年余りの間、所謂、国際協力の世界に身を置いたわけであるが、その最後の任地が、マレーシアだったというのは、実に感慨深いものがある。

「国際協力分野」で活動する人たちを、私たちは、国際協力人材と呼んでいる。数多ある職業に比べると、非常にマーケットの小さな業界だが、この業界を志す若者も多い。

かつての私のように「石」見たさという不純な動機ではなく、国際協力/開発協力に携わることを目標に、JOCVをそのキャリア形成のステップとして参加する若者も目にするようになった。

動機はどうあれ、JOCVに参加して得られる経験が、その人の人生観、世界観を変えるのは間違いない。

３０年後、再び、私はマレーシアで勤務することになった。３０年振りで戻ってきたマレーシアでは、隊員当時の教え子や大学の教員らと再会した。

ある学生は国税庁の副長官になっていた。博物館の館長や環境NGOの代表となっているものもいた。大学の同僚だった講師は、その後、総合大学になったサバ大学の理学部学部長になっていた。

２年間という短かい時間ではあったが、かつて自分が人生を共にした人達が、こんな風に様々な世界で活躍しているのを目の当たりにする、そういったチャンスを与えてくれたのもJOCVだ。

隊員当時：キナバル山頂上で

最近の若者は、内向きになっていて海外に目を向ける者が少ないという。そんな若者には、是非、JOCVのようなチャレンジの場を経験して欲しいと、そろそろ、国際協力の現場から、身を引く時期が近づきつつある私からの切なる願いである。

そしてそんな貴重な機会を与えてくれたJOCVに改めて感謝するとともに、これからの更なる飛躍に期待したいと心から思う。

ナショナルスタッフ

Jasamu Dikenang. Terima kasih Sahabat.

Noorul Ashiqin Yahaya
JICA Malaysia

Di kesempatan ini, saya ingin merakamkan ucapan setinggi-tinggi tahniah kepada JICA di atas sambutan ulangtahun Program JOCV di Malaysia yang ke-50. Perjalanannya yang cukup panjang dan tanpa disedari telah menjangkau 50 tahun ini memperlihatkan sumbangannya yang berterusan dalam memenuhi tuntutan negara Malaysia dalam pelbagai aspek terutama dalam memperbaiki ketidakseimbangan sosio-ekonomi masyarakat khususnya di kawasan luar bandar.

Saya mula bekerja dengan JICA pada tahun 1996 dan mula melibatkan diri dalam Program Sukarelawan JICA sejak tahun 2003 hingga kini. Kewujudan JOCV di Malaysia sejak tahun 1966, yakni sebelum saya dilahirkan. Namun, sepanjang penglibatan saya dengan Program JOCV dan khususnya sebagai rakyat Malaysia, saya amat berbangga dengan pencapaian JOCV yang telah diperlihatkan sepanjang 50 tahun ini yang telah bertungkus lumus menyumbangkan kemahiran serta tenaga dalam proses pembinaan negara.

Selama 50 tahun, JOCV telah berjaya memberikan impak yang positif kepada pembangunan Malaysia terutamanya di peringkat akar umbi yang merangkumi pelbagai sektor seperti pertanian, perikanan, pendidikan, sukan, perkhidmatan veterinar, latihan kemahiran industri, pelancongan, sains dan teknologi, terkini pemuliharaan alam sekitar dan pembangunan OKU, meskipun terdapat perbezaan budaya kehidupan. Malah, Malaysia adalah antara negara yang telah banyak menerima kemahiran melalui perkongsian kepakaran, permindahan pengalaman serta teknologi khususnya dari Jepun.

Malaysia merupakan sebuah negara yang didiami oleh pelbagai kaum yang terdiri daripada pelbagai etnik yang mempunyai budaya, agama, kepercayaan, kesenian dan adat resam yang unik. Kepelbagaian ini menjadikan Malaysia sebuah negara yang mempunyai masyarakat yang majmuk. Perbezaan ini tidak menjadi faktor utama yang menghalang JOCV menjalankan tugas mereka dengan penuh dedikasi dan bersemangat.

Apa yang lebih dikagumi, JOCV berjaya memupuk kepercayaan, kerjasama dan persahabatan dikalangan masyarakat dalam tempoh perkhidmatan yang agak singkat. Tidak dinafikan, pelbagai jerih, susah payah telah mereka tempuhi. Juga pelbagai pengalaman pahit dan manis mereka perolehi sepanjang berkhidmat di Malaysia.

Pepatah Melayu ada menyebut, "tak kenal maka tak cinta". Melalui kerjasama selama 50 tahun, JOCV juga telah menjadi medium untuk kita semua memahami akan sosiobudaya negara Jepun, seterusnya menggalakkan hubungan antara rakyat kedua-dua negara. Ianya telah dapat memupuk kefahaman yang lebih terhadap kebudayaan, kepentingan dan keperluan antara satu sama lain. Dalam hal ini, saya ingin menyampaikan penghargaan yang setingginya di atas penglibatan JOCV dalam membantu mengembangkan lagi hubungan dua hala antara Malaysia dan Jepun.

Di saat kita bersama-sama meraikan ulang tahun JOCV yang ke-50, saya mendoakan agar JICA dan JOCV akan menjadi lebih cemerlang, dinamik dan inovatif serta dapat merealisasikan misinya untuk membangunkan dunia yang lebih damai dan sejahtera.

Pameran Hasil Seni OKU Anjuran AEON & JICA di AEON Tebrau City dari 4-6 Sep 2009

Makan malam bersama-sama EX-Malaysia di Ginza Japan pada November 2011

 このページの和訳はP-91

そして未来へ

・現役ボランティア
・シニアボランティア
・未来へのメッセージ

Chapter

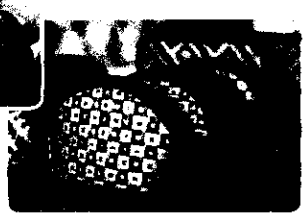
VI

現役ボランティア

50周年記念に寄せて

渡会 慧
平成26年2次隊
（コミュニティ開発）

村の食事。食事に関してはほぼ自給自足が成り立っている。（2015年6月5日：サバ州）



プログラムで作っている工芸品。バイヤーの目に止り、日本でも売られている。（2015年8月4日：サバ州）

私は現在、サバ州のクニンガウにて、コミュニティ開発の活動をしています。自然保護区の中に住んでいる村人に対してプログラムを提供し、自然負荷の少ない生計手段を確立するという内容です。クニンガウは小さくまとまった歩きやすい街で、ついつい出歩いては、肌が黒くなっていくばかりです。

マレーシアボランティア事業50周年ということで、記念式典でお会いした先輩方のお話を伺う度に、マレーシアの発展と共に歩んできたボランティア事業の歴史を痛感させられました。先輩方の活動報告では、今のマレーシアでは想像もつかないこともありながら、一方でやはり、今も昔もマレーシアなのだな、と思わされる共通点も多く、大変興味深く勉強させていただきました。記念式典という貴重な機会に、日本マレーシア両国の方々とお話させていただき、日本とマレーシアが互いに支え合ってきたということが強く実感されました。

マレーシアの皆さんは、私の名前、サトシを略して、サト、と呼びます。マレーシア語で1を表す言葉、サトゥに音が近いこともあり、すぐに名前を覚えてもらえます。どこに行っても、サト、サト、と呼ばれ、日本人の自分をすぐに受け入れてくれるというのがマレーシアの印象です。KLの語学訓練でホームステイをしていた家族のお母さんは、家族の一人として、家の中ではトドン（ムスリム女性が頭に巻くスカーフ）を外して対応してくれるようになりました。任地であるサバ州の村では、家に呼ばれてご飯や地酒を振る舞われることは珍しくありません。こうして温かく迎え入れてもらう度、ボランティアとしてマレーシアに来たのに、支援するどころか助けられてばかりだな、と思わされます。

私の出身は宮城県の仙台市です。2011年の震災では、故郷の仙台も大きな被害を受けました。国際社会からの援助は非常に心強い手助けだったと思います。そんな中マレーシアからも、新聞発表で5.1億円もの義援金が寄せられました。金額の多寡ではないと思いながらも、その途方もない金額には、感謝の念を禁じえません。

このように、私の個人的な経験から見ても、そして日本とマレーシアという国家の関係を見ても、この50年は日本がマレーシアを援助してきた50年というだけではなく、日本とマレーシアが共に助け合ってきた50年なのではないでしょうか。既に相応の発展を遂げたマレーシアをいつまで援助するのか、という議論がありますが、両国の関係はそうした一方的なものだとは思えません。これまでの両国はもっと両方向的な関係であったと思いますし、これからは南南協力、三角協力という形に舞台を移し、より複雑に結ばれた、強固な関係になっていくものと確信しています。

これまでのボランティアの職種を調べてみますと、マレーシアからの要請がどのように変化してきたのかが良く分かります。今後も必要に応じて姿を変えながら、マレーシアのボランティア事業、そして両国の互いに支え合う関係が続いていくことを願ってやみません。

村は自然環境保護区の中にあり、環境に恵まれている

シニアボランティア

50周年に現役SV隊員として

鷹取 一雅
平成27年1次隊
(化学応用化学)

現役SV隊員としてJICAボランティア派遣50周年にめぐり合わせ、感慨深いものがあります。まず、現在の任地での活動、その後ボランティア総会で実施した50年を振り返るアクティビティを紹介します。

時間外に学生相手に日本語クラスを開講(2015年8月:ADTEC Taiping)

任地はペラ州タイピンの上級技術訓練センター(ADTEC Taiping)です。タイピンはスズの産地として栄えましたが、今ではイポーとペナン島の狭間の古い田舎町です。ペラ州は粘土の産地としても知られ、ADTEC Taipingに先進セラミック学科が設置されています。私はその職員とファインセラミックスの理解と技術向上に取り組んでいます。セラミックスといえば粘土を使った食器か植木鉢だけが連想されるマレーシアでは、携帯電話などの電子機器に組み込まれる工業用のファインセラミックスを知る人はごく一部で、その産業は未だ立ち上がっていません。人的資源省のADTECには中小・零細企業では買えない高価な装置が設置されています。そして現在、その使い方を試行錯誤している状況にあります。進学や就職が学校の成績で振り分けられる社会事情の中で、ADTECで職業訓練をする学生には、指示待ちではなく少しでも自発的になって欲しく、カイゼン意識がそのきっかけになることを切に祈っています。

2015年10月にヘイズ禍のKLのJICA事務所で年1回のマレーシアボランティア総会が開かれ、OVの前島さんと現地職員のヌルルさんにご参加頂き、現役隊員23名がボランティアの50年を振り返りました。日本のOV会に先輩隊員の派遣当時の情報を頂くとともに、20年史、35年史から抽出した資料を準備して、5グループで10年毎の任地と職種の変遷をマップにして壁に貼り、全員でその情報を共有しました(写真1)。Feldaへのボランティア派遣、職業訓練学校協力、マレーシアの急成長に伴う派遣の方向性模索などを隊員の立場で話し合いました。宗教や国民性の違いに基づく、考え方や技術伝達の難しさは相変わらずの課題ですが、活動内容を一過性に終わらせずに定着させる努力が一層期待されることを確認しました。この50年はベルリンの壁崩壊を挟んで日本も世界も大きく変化しました。それでも人と人が理解しあい友人になりたいという気持ちは変わらないと信じて、将来志向で個性豊かで平和な将来に向けての種まきに励みたいと思いました。アクティビティの最後に、全隊員が今後自分の活動にどう反映するか、それぞれの想いを書きました(写真2)。

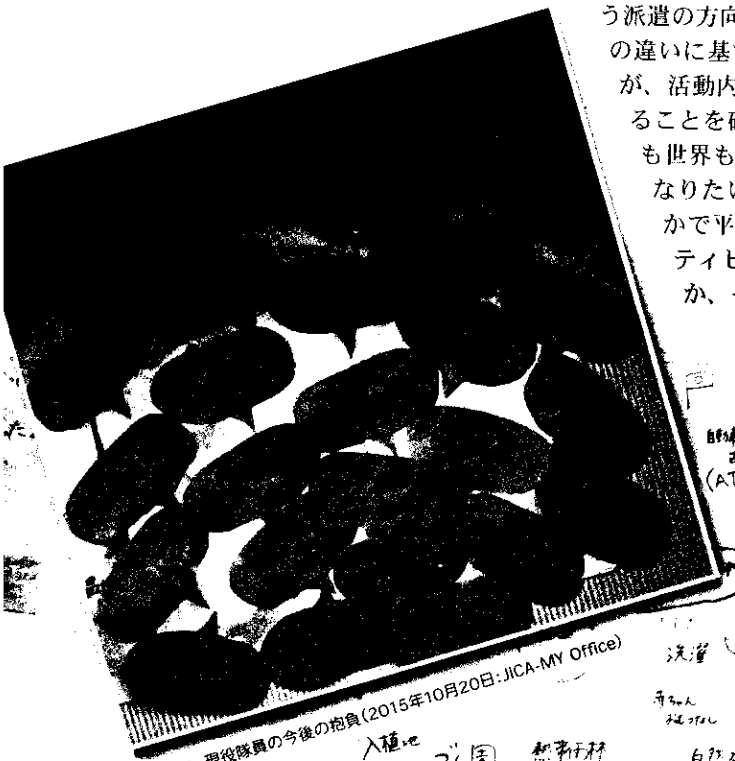


写真2:現役隊員の今後の抱負(2015年10月20日:JICA-MY Office)

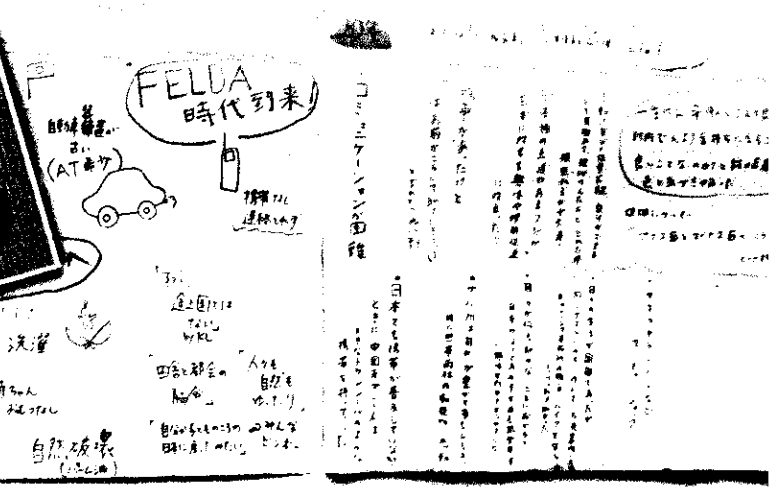


写真1:10年毎に分類した活動内容と任地の変遷(2015年10月20日:JICA-MY Office)

未来へのメッセージ

・マレーシアの良さを失うことのない発展と一人一人が輝ける未来に (Y.O)
マレーシアの良さを残しつつ誰もが明るい未来を実現できるように願っています。

・これまでも、これからも、私たちは草の根レベルでコツコツと。(K.M)
50年の歩みが100年先まで続くようにJVは現地の人と共に歩みます。

・マレーシアと日本が共に発展していけるよう願っています。(C.T)

・Satu Malaysia になることを心より望みます。(T.I)

・マレーシアの障がいのある人たちには色々なことが出来る力があります。
私はJICAボランティアとして、クダ州の障がいのある人たちのその出来る力を引き出すことが、とても嬉しいです。
マレーシアの障がい者はデキル!! (A.H)

・マレーシアと日本は50年もの友だちです。お互いを尊重し、たくさんのことをその友だちから学べますように。(N.C)

・みんなが夢を持ち、地域で生き(又は活躍し)、幸せを感じられる社会を願っています。(F.S)

・いつも笑顔で、常に一人一人が手を取り合って子どもたちのためにどうぞ、輝かしいマレーシアを築いてください。(Y.K)

マレーシアで活動中の現役JICAボランティアから有志を募って集まりました。

和訳

P4

Message

青年海外協力隊50周年記念に際して、JICAに心からのお祝いを申し上げます。

マレーシアが独立して間もなく、我々両国の関係は始まりました。実際には貿易などを通しての関係だけにとどまらず、両国とも互いを尊重する開発パートナーとして良好な関係を確立しています。この関係は、1981 年に導入されたルック イースト (DPT)政策の実施により、さらに第2ルック イースト(DPT 2.0)政策が 2013 年に開始されたことより、強化されています。第2ルックイースト政策は二国間の投資に基づくさらなる経済発展を目標としています。経済分野での両国間の戦略的協力のために、より多くの機会を与えることができると考えています。

日本政府による協力はJICA プログラムを通して直接マレーシアに恩恵を与えられてきました。マレーシアと日本の連携の重要な点は物理的な支援だけではなく、人材育成と技術の向上に重点を置いて考えていることです。これは、2020 年までに先進国になるという目標に向けて、包括的で持続可能な知識基盤の開発を強調するマレーシアの開発目標に沿ったものとなっています。

私が見たところ、JOCVは担当分野の技術支援だけではなく、派遣期間を通して地域社会の中での生活や文化を通して様々な交流プログラムを実施してきています。マレーシア側でも様々な日本の文化や生活について知る機会を得て、多くの学びを得ることができました。

現在、マレーシアとJICAの協力は、幸運にもSATREPS (地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム)や関連政府機関との開発研究など、様々な技術協力を通じても拡大しています。日本は技術、インフラ、社会サービスなどにおいて政府機関に多くの知識を与え、その知識は国の発展における重要な場面で用いられてきており、二国間の関係はさらに強固になっています。

国家達成ビジョン 2020年に向けて、マレーシアでは今なお開発を必要としており、日本とマレーシア間の協力がさらに強固になることを願ってやみません。JOCVには今までの実績への祝辞と共にさらなる発展を願っています、今後も日本とマレーシアのより良い関係のためのきっかけづくり、また橋渡し役としての働きに期待しています。

ありがとうございました。
2016 年 3 月
ダト・スリ・アブドル・ワヒド・オマール
マレーシア首相府大臣

P-80

FELDA－JOCVの協働開発

青年海外協力隊がFELDAのために果たした役割の重要性を理解するためには、約50年前に戻らなければなりません。

FELDA、連邦土地開発庁（1956年設立）の初期の役割は、土地を持たない農村の人々の生活水準の向上と改善で、農村部の貧困を是正することでした。これは、大規模な土地開発のプログラムによってジャングルを農地や集落に変えることで達成されていきました。

FELDAの経済的目標は、ゴム、油ヤシ、他の作物の栽培を通じて所得を増やし、入植者家族の生活を改善することでした。社会的な目標も立て、住宅、教育、健康管理など社会インフラの整備を通して現代的、進歩的な農村社会の創出・発展でした。FELDAの社会開発では、自立してまとまりのある農村を育成するため、公開講座や成人教育による「計画的変革」や「社会工学」といったプログラムも含まれていました。

JOCVは、FELDAの社会経済開発プログラムに参画し始めた数年間で、非常に重要な役割を果たしました。私は、幸運なことに1975年に開始されたこのFELDA－JOCV協働開発に直接かかわることができました。このプログラムを通してJOCVは、いくつかの選ばれた入植地で入植家族と共に生活し、入植プロジェクトに関わりました。

このFELDA－JOCVのパートナーシップ・プログラムでは、草の根の才能開発、リーダーシップの育成、リソースの開発を通じて入植者の間で「自立（BERDIKARI）」の精神を浸透させていきました。これはFELDAの大規模な農村開発と改革プログラムの成功を確保する上で不可欠な要素でした。

FELDA－JOCVパートナーシップ開発プログラムの中で、27年の間に105人の日本人ボランティアが幼稚園教育、野菜栽培、服飾、手工芸品、保健を含む関連分野で派遣されました。

私個人は日本と同様に、アメリカとカナダのボランティア プログラムにも関わってきたので、その経験から学び得た「教訓」を共有させていただきます。
(a) プログラムの十分な理解と相互に合意した目標をもつこと。
(b) 協力分野について適切な技術と専門性を持つボランティアの選択をすること。
(c) ボランティアプログラムが実施される社会的文化的な環境への十分な理解。
(d) ボランティアは、相互利益を達成するために地元の関係者や地域社会のリーダーとともに活動する。

FELDAは、今日までに200万エーカー以上のパーム油やゴム園のための土地を開発してきました。FELDA開発プログラムの恩恵を受けて、322の入植地で11万3千家族、約50万人の農村に住む人々の生活が改善されました。FELDAはその事業部分であるFELDAグローバルベンチャー（FGV）を通じて、今ではパーム油、その他関連事業において世界をリードする企業に成長しています。

まだ世界の多くの発展途上国では貧困、教育および保健面における不平等と格差が存在し、なすべき仕事が多くあります。引き続き「ボランティア」の精神と使命を保ち続ける必要があります。JOCVはこれからも様々な開発課題に対応するための重要な役割を担っています。

ダト アラディン ハシム
FELDA長官
(1979年-1989年)

P-84

友人に感謝

この機会に、私はマレーシアで第50回青年海外協力隊プログラムの記念日にJICAに心からお祝いの意を表したいと思います。マレーシア側からの要望に沿って50年間にわたる継続的な協力により、特に農村部では社会的経済的不均衡を改善する上で、様々な面での貢献をしてきました。

私は1996年にJICAでの勤務を開始し、2003年からJICAボランティア事業に従事しています。私が生まれるより前の1966年以来、マレーシアの青年海外協力隊は活動を続けてきたのです。しかし、私が本事業に関与するはるか以前から、青年海外協力隊のプログラムがマレーシアの国家建設の過程で貢献し、JOCVが自分の技術とエネルギーを駆使して精力的に取り組んできたことを非常に誇りに思っています。

50年間青年海外協力隊は、文化や生活環境の違いにも関わらず草の根レベルで活動し、農業、漁業、教育、スポーツ、獣医、技能訓練、観光、科学技術、障害者支援など様々な分野でマレーシアの発展に寄与してきました。マレーシアは、他の国と比べても特に日本から、専門知識、経験、技術移転の共有を通じて技術向上を果たしている国の一つです。

マレーシアは異なる民族文化、宗教、信仰、芸術と独特の習慣からの様々な人々が住んでいる国です。この多様性と、多様な社会によるそれぞれの違いは、青年海外協力隊が活力を持って貢献することを妨げることにはなりません。

私が非常に驚いたことは、JOCVはたった2年の任期の間にその地域社会に溶け込み、協働し、人々からの信頼を得ることに成功していることです。確かに、多くの苦労やトラブルに直面してしまうことは多くあるし、多くの苦しく、そして甘い経験が、マレーシアでの活動期間にはあったことでしょう。

マレー語の諺に「知らなければ愛さない」というのがあります。50年の協力を経て、青年海外協力隊はこのように両国の国民の間の関係強化を促進し、私たちマレーシア人が日本を社会的に、文化的にも理解するための触媒となっています。文化や互いのニーズをより良く理解することを促してきました。この点で、私はマレーシアと日本の二国間関係の発展に寄与した、青年海外協力隊の尽力に感謝の意を表したいと思います。

私たちが共に青年海外協力隊の第50回の記念日を祝えるように、私はJICAと青年海外協力隊が、さらに鮮やかにダイナミックで革新的、かつ平和で豊かな世界の開発に協力できるよう、その使命の実現を祈っています。

ヌルル・アシキン・ヤハヤ
プログラムマネージャー
ボランティアセクション

写真のキャプション
(障害者による絵画展、ジョホール州テブラウ市のイオンにて　2009年9月4-6日)
(元マレーシア赴任者との夕食会、銀座にて2011年11月(研修で来日)

編集後記

深澤 晋作
JICA マレーシア事務所次長

皆さんにマレーシアでの50年に渡るボランティア活動を知っていただく機会として、本記念誌では出来るだけ幅広く、そして多くのOG,OBや関係者の言葉を集めるようにしました。この記念誌を手に取り、始めてマレーシア最北の小さな州ペルリスを知り、そこで30年前に活動していた日本人ボランティアがいたことを知って驚いた方もいらっしゃるかと思います。私もその一人です。本記念誌を通じて、これまでにマレーシアに派遣された凡そ1,500名のボランティアの熱い思いの一部でも伝えることが出来れば幸いです。今回50周年を一つの区切りとして記念誌を作成しましたが、これからもこのような多くの声が積み重なって行くことを願って止みません。最後に、本記念誌の作成に関わって頂いた全ての方々にお礼を述べたいと思います。

金城 睦子
短期企画調査員(ボランティア事業)

50年と言う大きな節目に実施される、記念式典や記念誌の作成に係われたことをうれしく思います。これまで培ってきたマレーシアとの関係が、式典や記念誌作成に生かせたことは私の強みであり、誇りです。
記念誌への投稿依頼で、突然電話やメールを差し上げたにも拘らず、快く引き受けて下さった方々、編集にご尽力頂いた松本所長・深澤次長・Akomoriの熊谷様・マレーシア会の志岐様に感謝申し上げます。最後に一言この記念誌は面白い！読まなきゃ損！これであなたもマレーシア通。

池上 実
企画調査員(ボランティア事業)

マレーシア派遣隊員の皆さんの任国への思いが各手記に表れていて、この思いが協力隊事業の原動力となっているんだなと今回改めて感じました。ガーナOBである私にとって派遣後33年を経過してもいまだに当時の同僚、お世話になった家族のことが気になっており、それはその後調整員として勤務した他の7か国に対する思いとは確実に違っています。こんな思いを持ち続けさせてくれる協力隊・・万歳！！

四方 照美
NGO-ジャパンデスク

多くの人のたくさんの想いが詰まった記念誌になってうれしいです。JOCVは、草の根外交官とよく言われますが、今回の記念誌作成を通して改めてその意味と意義に深く共感しました。JOCVの活動は多くの場合、大きな成果として表面化はされませんが、その存在は地域の人々の心に残り、日本への距離を確実に小さくしています。また、JOCVにとっても生涯のかけがえのない思い出となるばかりでなく、次の人生を踏み出すための大きな糧となっています。50年間途切れなく続いてきたマレーシアでのJOCV事業、この記念誌に関わることができて光栄でした、乾杯！

50周年記念誌編集委員会：松本高次郎、深澤晋作、宮川朋子、園山由香、池上実、金城睦子、四方照美
編集協力：マレーシア会/志岐文子/熊谷敦子(編集企画)/Sinni(デザイン総括)/Aqila Normal(オペレーション)

マレーシア青年海外協力隊50周年記念誌
JOCV Malaysia 50th Anniversary Booklet

2016年7月21日　初版第1刷

発行者：独立行政法人国際協力機構　マレーシア事務所
Japan International Cooperation Agency Malaysia Office
Suite 29.03, Level 29, Menara Citibank,
165, Jalan Ampang, 50450 Kuala Lumpur, Malaysia.
Tel: 03-2166 8900 Fax: 03-2166 5900
http://www.jica.go.jp

編集：50周年記念誌編集委員会/Akomori Sdn. Bhd
カラー校正：Phans Graphic
印刷所：Hup Lee Printing & Services

・本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
・本誌に関するお問い合わせは、JICAマレーシア事務所にお問い合わせください。ms_oso_rep@jica.go.jp
ISBN 978-967-14294-0-2

ISBN 978-967-14294-0-2
9 789671 429402

独立行政法人国際協力機構　マレーシア事務所